

創立100周年

記念誌

昭和53年5月

東村立 東小学校

創立100周年

記念誌

東村立東小学校

発刊のことば

百周年記念事業のまとめとしてここに百周年記念誌を刊行することができました。

本誌は、明治、大正、昭和と世代別の代表者による寄稿、座談会、並に写真やいろいろな資料によって、創立以来百年、時代の進展と共に歩み続けてきた本校の足跡と、それを支えてきた社会的背景、更に、百周年目の現時点における本校の実態を多方面から収録し、次の世代への遺産となるよう企画し、編集いたしました。然し、諸般の事情から当初の願いを十分に果たすことはできませんでしたが、その意のある所をおくみ取り願えれば幸いに存じます。

本誌に寄稿して下さいました方々や、座談会参加の方々、並に遙か南米や本土から、或は地元地域から貴重な写真や諸資料を提供して下さいました方々に対し心から厚く御礼を申し上げます。

さて、百周年記念事業もこれをもって万事終了することができました。百周年という節目をステップに、これから本校を育つ後輩達が、強く、たくましく、賢く育ち、社会の有為な人材として大きく羽ばたいてくれることを共に念じていきたいと思います。

終りに本誌編集委員長の比嘉宗幸氏をはじめ編集委員の皆さん、なかんずく、公私共に多忙の中で本誌の資料収集の段階から発刊まで多大な労苦を払い奉仕を戴いた宮里優、宮城良輝、伊集道男の各氏に対し心からの感謝の御礼を申し上げ発刊のことばといたします。

平成2年8月1日

東小学校百周年記念事業

期成会長 池 原 貞 男



平良尋常小学校(明治33年頃)

平良尋常小学校は、明治21年、久志村平良に創設された。明治38年に、久志村川田(現在の敷地)に移転された。

この写真は、明治33年「東宮殿下御成婚記念」に各県ら献上されたものである。沖縄では「吉村」と言う写真家に写真撮影が委嘱され、明治34年に宮内庁に献上され残っていたものである。



空から見た東校 —— 百周年のために校庭に人文字が描かれた



校 旗



東 校 全 景

東小学校校歌

作詞 泉国 夕照
作曲 仲本 朝教

希望にみちて ♩ = 112

mp

た た な わ る や ま ふ と こ ろ に い だ か れ し な ご み の む
 ら ひ が し ひ か り さ す と こ ろ こ こ
 に そ び え た つ わ れ ら が ほ こ う ひ が し ひ が
 し わ れ ら が ほ こ う ひ が し こ う



学 校 の 前 景

東小学校旧校歌 (70周年まで)

作詞 金城 珍徳

作曲 金城 恒

みよとうかーいのそらそめて

のーぼるあさひをみにあびて

つどーうわれらのまなびやは

けーんじよんひゃくこれいつか

東小学校旧校歌 (70周年まで)

- 一、見よ東海の空染めて
昇る朝日を身に浴びて
集う我等の学び舎は
健児四百これ一家
- 二、川田並松枝香わし
郷党相寄り助けよと
村を興ししその神の
教え我等の掟なり
- 三、流れつきせぬ平良川
あまたの流れ極めつつ
六大州の果てまでも
輝かさなむ我が望み
- 四、太平洋の荒潮に
毅然とそびゆる宮城崎
剛毅不屈のその姿
これ我が友の心なり
仰げば崇^{たか}し玉辻の
たなびく雲に微笑みて
高き理想を胸に抱く
その名もゆかし東校

学舎の変遷



戦前の赤瓦の校舎(絵画)

アルゼンチンの知念氏が百周年の記念に戦前の赤瓦の絵画を寄贈し、式典会場に展示された。



終戦後の「かやぶき」校舎

昭和25年には「PTA」が発足している。
1949(昭和25)年撮影 知念祐憲法氏)





昭和29年頃の校舎全景

一部はコンクリートと石積みの瓦の校舎になっている。(村史より)

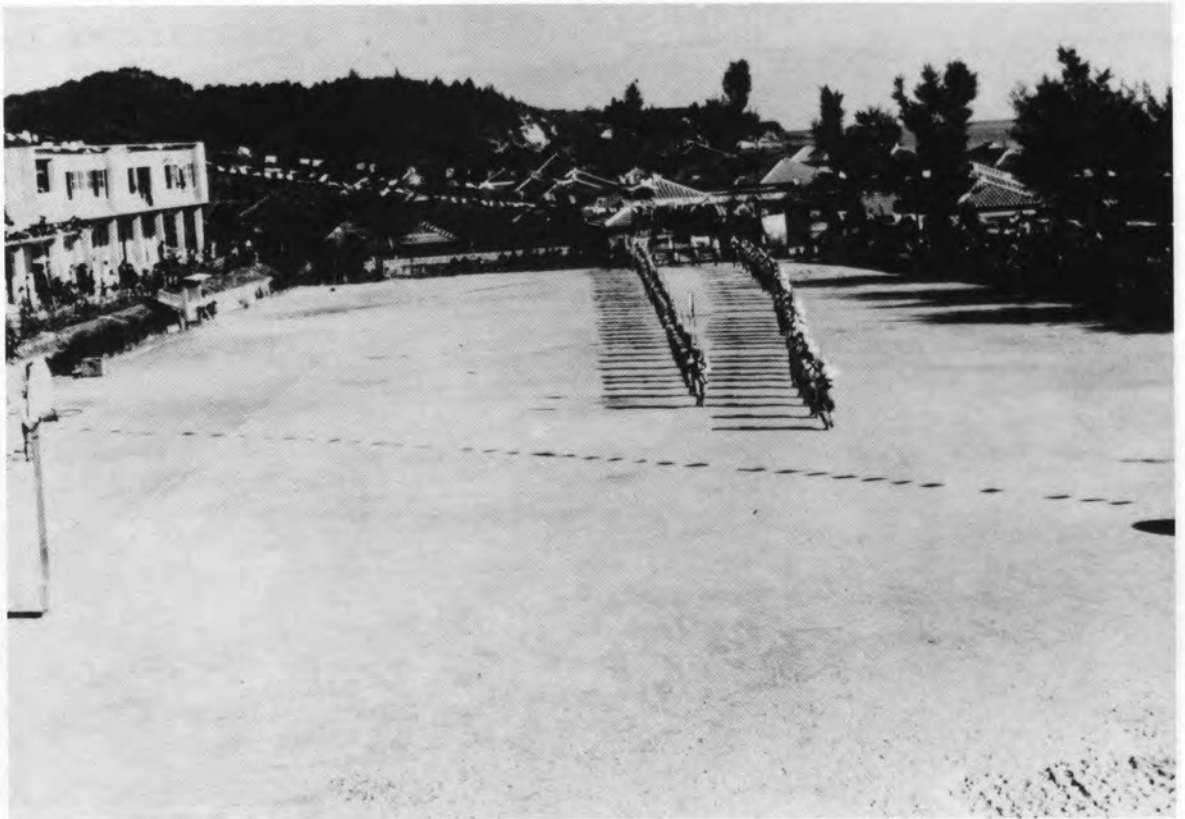


昭和29年頃の東小学校の朝礼

ほとんどの子供達が裸足である。

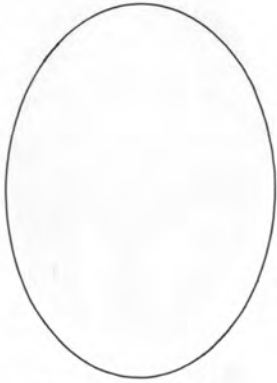


昭和33年頃の校舎「かやぶき」から鉄筋コンクリートの校舎になる

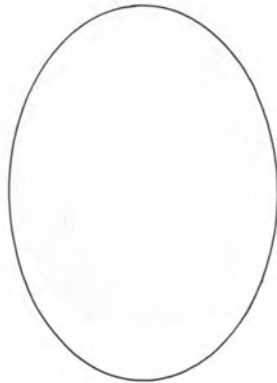


創立70周年の「川田の巻棒」が行われている(昭和33年撮影 知念祐憲氏)

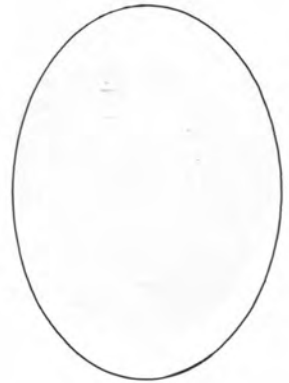
歴代校長



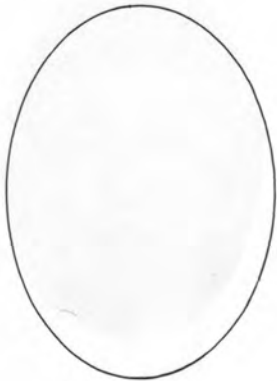
初代
国吉太郎
明治21年～



第2代
小西(不詳)



第3代
井田(不詳)



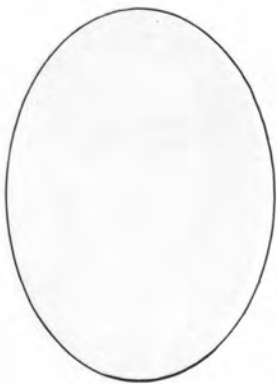
第4代
永井(不詳)



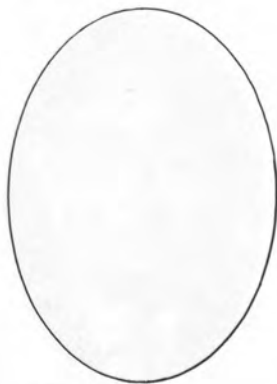
第5代
平良清助
明治30年～明治34年



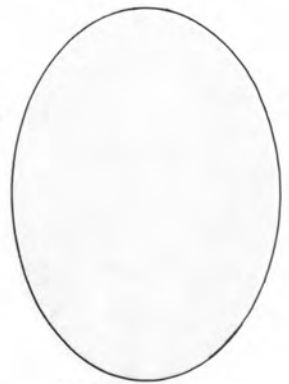
第6代
安谷屋忠作
明治34年～明治35年



第7代
甲東秀
鹿児島県出身



第8代
嘉数宜栄
本部町出身



第9代
源 秀二郎
佐賀県出身



第10代
新城源徳
大正5年～大正11年



第11代
岸本公松
大正11年～大正15年



第12代
宮里善助
大正15年～昭和3年9月



第13代
宮城定蔵
昭和3年9月～昭和5年9月



第14代
比嘉福吉
昭和5年9月～昭和11年3月



第15代
新垣宜昭
昭和11年4月～昭和12年4月



第16代
比嘉良和
昭和12年4月～昭和14年3月



第17代
大浜信光
昭和14年4月～昭和18年3月



第18代
伊波寛永
昭和18年4月～昭和20年9月



第19代

金城 珍 徳

昭和20年10月～昭和22年 3 月



第20代

金城 徳 明

昭和22年 4 月～昭和23年 3 月



第21代

上江洲 知 徳

昭和23年 4 月～昭和27年 3 月



第22代

當 間 賀 助

昭和27年 4 月～昭和32年 3 月



第23代

吉 田 賀 盛

昭和32年 4 月～昭和37年 3 月



第24代

吉 田 善 昌

昭和37年 4 月～昭和42年 4 月



第25代

平 良 景太郎

昭和42年 4 月～昭和47年 3 月



第26代

山 内 昌 敬

昭和47年 4 月～昭和50年 3 月



第27代

田 端 景 雄

昭和50年 4 月～昭和55年 3 月



第28代

比 嘉 敏 雄

昭和55年4 月～昭和58年 3 月



第29代

玉 城 誠 栄

昭和58年 4 月～昭和61年 3 月



第30代

金 城 昂

昭和61年 4 月～平成元年 3 月

歴代PTA会長



平良平助 (川田)
昭和30年4月～昭和32年4月



宮里那三郎 (平良)
昭和32年4月～昭和34年4月
昭和36年4月～昭和38年4月



吉本好助 (川田)
昭和34年4月～昭和35年4月



金城政信 (川田)
昭和35年4月～昭和36年4月



渡嘉敷直勇 (川田)
昭和38年4月～昭和39年4月



親泊康治 (平良)
昭和39年4月～昭和41年4月



久高将順 (宮城)
昭和41年4月～昭和43年4月



池原直吉 (川田)
昭和43年4月～昭和45年4月



大城清 (平良)
昭和45年4月～昭和47年4月



久 高 将 信 (宮城)
昭和47年 4 月～昭和49年 4 月



喜屋武 盛 元 (川田)
昭和49年 4 月～昭和51年 4 月



大 城 安 正 (平良)
昭和51年 4 月～昭和53年 4 月



伊 集 盛 久 (宮城)
昭和53年 4 月～昭和55年 4 月



池 原 善 尚 (川田)
昭和55年 4 月～昭和57年 4 月



比 嘉 康 定 (平良)
昭和57年 4 月～昭和59年 4 月



大 村 進 (宮城)
昭和59年 4 月～昭和61年 4 月



吉 本 勲 (川田)
昭和61年 4 月～昭和63年 4 月



比 嘉 勝 正 (平良)
昭和63年 4 月～現在

式典・祝賀スナップ



「百年」の花文字と「飛躍」の

書が式典会場のメインになった



校門にPTAの協力で懐かしい「ソテツの門」
が建てられた

舞台も広げ三千鉢の花が飾られ準備
OKの会場



午前中の児童生徒の式典 期成会長あいさつ



百周年記念讃歌斉唱



祝賀パレード モールで飾った50台の車で3区をパレード



幼稚園児も沿道でパレードを迎えた

パレードの声援に駆けつけた川田区民



百周年のために結成された吹奏楽部の川田公民館での演奏



飾られた車



宮城共同売店での演奏



待機するパレード参加の車



おめでとう！ 声援する平良区民



パレードは一路宇出那覇へ

受付係に配置された美女



ようこそ記念式典へ！
お忙しいの受付



芝の庭には休憩所が設けられた





開会を宣言する金城マサ期成会副会長

東小学校



主 催 者



百周年記念讃歌斉唱の児童生徒と吹奏楽部

会場あふれんばかりに参列した同窓生



来賓

懐かしい顔・顔・顔





表彰風景

表彰者席で待機する受賞者



会場には昔の写真も展示された

幕開けの演奏をする古典クラブ



在校生の「かぎやで風」



在校生も含めた婦人会の「四ツ竹」





教職員のダンス



川田区の「国頭サバクイ」



比嘉睦江(琉舞師匠)の「高平万才」



津留県教育次長・金城昂校長・玉城勝郎
県教育庁主事・平良昇康村長

宮城区の伝統芸能「エイサー」



「ちきじ会」の「マミドーマー」代表 金城光江

平良区の五福の舞





「東小学校バンザイ」音頭
桑江常盛氏



和やかに談笑する同窓生



女性の参加者も多かった



あいさつをする宮城徳善先輩

東小学校100周年記念誌 目次

目 次

発刊のことば

口 絵

歴代校長

歴代PTA会長

式典・祝賀スナップ

記念式典(式辞・あいさつ・祝辞)

式 辞	……………	学校長	金 城 昂	5
あいさつ	……………	創立百周年記念事業期成会長	池 原 貞 雄	7
児童会長あいさつ	……………	児童会長	宮 里 聖 志	8
祝 辞	……………	沖縄県教育委員会 教育長	池 田 光 男	9
祝 辞	……………	東村長	平 良 昇 康	10
祝 辞	……………	東村議会議長	仲 泊 弘 次	11
祝 辞	……………	東村教育長	前 田 正 博	12
祝 辞	……………	東小中学校PTA会長	比 嘉 勝 正	13
祝 辞	……………	生徒会長	儀 間 竜 広	14
百周年記念讃歌	……………			15
100周年記念讃歌作詩の感想	……………	東小学校6年	大 嶺 えり子	16
式典を終えて	……………	学校長	金 城 昂	17

東村教育史

年表100年の歩み	……………	25
東村教育史概要	……………	31

回顧録

思い出の記	……………	金 城 政 信	45
思い出の記	……………	玉 村 弥 吉	46
思い出の記	……………	池 原 貞 雄	48
思い出の記	……………	玉 城 幸 男	50
小学校時代の思い出	……………	桑 江 常 盛	52

思い出の絆.....	比 嘉 吉次郎	53
東校の思い出.....	渡嘉敷 直 勇	56
50周年卒業生の一人として.....	宮 城 昇	57
小学校の思い出.....	立 津 ツル子	59
小学校時代の思い出.....	津嘉山 朝 松	61
回 想.....	宮 城 俊 登	62
師 弟.....	玉 城 国 昭	64
思い出.....	新 垣 友 勝	66
思い出.....	奥 本 道 夫	67
思い出.....	吉 本 勲	69
追憶の小学校.....	岡 本 妙 子	71
螢雪100年に寄せて	渡嘉敷 直 勝	73
児童の作文紹介.....		76

みやぎいつか／城間 樹／末吉奈美

90周年記念誌より

東江律子／吉田善昌／吉川安一／きんじょうゆみこ／なかむらあつ子

吉本昌代／比嘉恵美／大嶺菜穂子／金城かおり／大城 司／當真三和子

思い出のアルバム	95
座談会.....	121
新聞記事	147
学校教育概要	159
校内スナップ	159
校舎配置図	161
100周年を迎えた学級の思い出.....	163
100周年時の学校職員.....	189
学校行事	191

P T A 活動

P T A 活動スナップ	209
活動経過報告	213

100周年記念式典までの経過

準備委員会・期成会スナップ	217
活動経過報告	239

資料編

池原貞雄氏 琉球大学学長就任	265
創立80周年記念式典写真	267
創立70周年記念式典写真	269
各種文書・書類	285

寄付者名簿	313
-------------	-----

編集後記



式 辞

校 長
金 城 昂

本日ここに県教育委員会の都留教育次長さんはじめ、村内外から多数の来賓、同窓生、並に地元の方々、PTA会員の皆様等、多数の方々のご臨席のもとに本校創立100周年の記念式典を盛大に挙行できますことは本校にとり、最大の慶びとする所であります。

本校は明治21年（1888年）5月24日、字平良の番所跡に平良尋常小学校と称し、4年制の小学校として創立されました。創立当初は当時の困窮社会を反映してなかなか生徒が集まらず、6歳から10歳を越える者までいろいろな年代を一諸にして15名程で発足したと聞いております。しかし、いろいろな就学奨励、督促の施策によって明治40年には100名近くとなり、現在の敷地に移転し、川田尋常小学校と改称、明治43年には第1回目の6年生卒業生を送り出し、大正8年に高等科が設置され川田尋常高等小学校と改称し、それまで大宜味校や、瀬嵩校で高等科に通学していた方々が本校に編入されております。

大正12年、久志村からの分村と同時に東尋常高等小学校と改称、昭和16年に東国民学校となっております。

平良から現敷地への移転当初は敷地も狭く、教室も茅葺き土間の粗末なものでしたが年々改善され、昭和10年代の後半には200米トラックがとれる程に拡張されました。在籍も年々増えて昭和の10年代には常時300名を越す程になっていました。現在の本校は小・中合わせて211名です。

このように年々充実、進展して来た本校も昭和20年の太平洋戦争で総てが灰燼に帰しました。

戦後は沖縄全域の例にもれず、それこそ全くの無からの出発で、校区民は、自らの生活の目度さえ立たない中から教育を憂い、その復興に励みました。テントから茅葺へ、更に瓦へと一步一步苦難を乗り越え、戦後の教育の復興に励んで来ました。これらの変遷については既に皆さんがご存じの通りですが、特に日本復帰を境に外観内実共に大きな変容を遂げております。

このような激しい移り変わり、変容を遂げつつ本校は戦前1,100人余、戦後1,600人余、合計2,700人余の卒業生と幾多有為の人材を世に送り出しております。本校のこの100年の歩み、歴史を想い、感、新たなるものがあります。

今、この100周年という新たな節目を迎えるに当たり、私達職員一同は由緒ある歴史の伝統を引継ぎ守り育てると共に、高度技術化時代、情報化時代、国際化時代、高齢化時代といわれる21世紀を健康でたくましく、創造性に富み情緒豊かに生きる児童生徒の育成に励んでいきたいと思ひます。同窓生、PTA並に関係各位のご協力、ご指導を宜しくお願ひ申し上げます。

最後になりましたが、100周年記念事業期成会の発足以来、会長さんはじめ同窓生一同や関係機関、団体の本校に寄せられた数々の御芳志、御援助、激励に対し、なかんずく本校PTAの御協力に対し衷心より感謝を申し上げ、式辞といたします。



ごあいさつ

東小学校創立100周年記念事業期成会
会 長 池 原 貞 雄

本日ここに、津留県教育次長、平良村長、仲泊村議会議長、前田村教育長のご臨席をいただき、同窓生皆様、PTA会会員及び有志各位のご参列のもと、かくも盛大な記念式典が挙行されますことは、記念事業を推進してきた期成会のこの上ない喜びであります。

母校の100周年の歩みに想いをいたしますと、教える人、学ぶ者、後援する人、教育施設などに幾多の変遷がありました。その中で伝統は継承されて、年と共に輝きを増して今日に至りました。また母校は地域文化の礎となって、文化の向上発展を支えてきました。母校の今日の姿は、まさに100年にわたる先輩同窓生、歴任教職員及び後援会のご尽力の賜物であります。

母校の創立100周年を迎える節目に、21世紀にはばたく母校の更なる発展をはかるべく、期成会では創立100周年記念事業を企画して推進して参りました。

記念事業は予定通り順調に進行していますが、これは偏に、皆さま方の教育に対する深い理解と、物心両面からのご協力によるものでありまして、皆さまのご芳情に対し衷心から厚くお礼申し上げる次第であります。

期成会としては、記念事業が完了するまで、努力を続けていく所存でありますので、皆様におかれましては、今後とも積極的なご協力とご鞭撻を賜りますようお願い申しあげまして、期成会代表のごあいさつといたします。



児童会長あいさつ

児童代表 宮 里 聖 志

創立100周年おめでとうございます。

今日は、私たちの学校の100歳のおたん生日です。東小学校は、明治21年につくられました。その長い100年の間には、いろいろなことがあったと思います。

ぼくのお父さんや、おじいちゃんも、この学校の卒業生です。その当時の学校の様子を、お父さんや、おじいちゃんから聞きました。教室は、かやぶき校舎で、雨が降ると、雨もりがして、かたすみによって勉強したそうです。服装は、着物をきて、はだしで学校に通っていたそうです。学校用品なども買えず、えんぴつが折れると、しんを竹に入れて使い消しゴムの代わりに指をなめてつばをつけて消したそうです。

今では、学校もコンクリートの美しい校舎に変わり、広々とした運動場や体育館で勉強することができ、とても幸せだなと思います。このように学校が変ってきたのも、多くの人々の、いろいろな苦勞と、協力があつたおかげだと思います。特に今年は、100周年記念事業として、体育館がきれいになり、幕も新しくかえられました。また、校内放送の施設もできました。校庭には100周年記念植樹が行なわれ、学校がみちがえるように、きれいになりました。また、たくさんの吹奏楽器がそろえられ、新しいバンド部が結成され私たちもがんばっています。

私たちの東小学校のためにいろいろお世話下さった同窓生や、多くの先ばいの方々ほん当にありがとうございました。

これからも、先ばいたちのきずいた、よい校風と伝統を守り、東小学校の在校生として、誇りと希望を持って、がんばっていききたいと思います。



祝 辞

沖縄県教育委員会

教育長 池 田 光 男

代読（教育次長） 津 留 健 二

東村立東小学校の創立100周年に当たり喜びとお祝いのことばを申し上げます。

100周年の節目に本校の歩んできた道程をふり返し、先人達の偉業をしのびつつ、同窓の方々が一堂に会して、さらに大きな飛躍発展を願い、記念式典を挙行し、記念行事を挙行することは極めて意義深いことだと思います。

本校は明治21年の創立以来、地域の振興、発展を担う人間育成はもとより、広く県内外の各界で活躍し、貢献し得る人材の育成を目ざして諸々の教育活動を展開してこられました。その成果として、本校ご出身の方々からは、琉球大学の元学長をつとめられた池原貞雄先生をはじめ、めざましい活躍をしておられる有為な人材が数多く輩出されております。

本校の100年にわたる沿革をたどってみますと、明治、大正、昭和と、それぞれ激動を続けてきた我が国の歴史そのもののようです。急変する時代の流れと共に、幾多の苦難を克服して、このように充実した豊かな現在の東小学校を築いてこられました。

本校の発展のためにご尽力くださった歴代の学校長をはじめ、ご奉職くださった多くの職員、村ご当局、地域の方々に対し、深甚なる敬意を表します。あわせて、多くのご先輩方の汗と英知によって築いてこられた本校の輝かしい伝統を土台にして、今後とも本校のますますの充実発展のために、関係各位がなお一層ご精進くださることをご期待申し上げます。

本校は校歌にもありますように、たたなわる山ふところにいだかれたすばらしい自然の景観に恵まれており、特にこの地にあります福地ダムは県民の生命を守る大事な水ガメとして大きな恩恵を与えております。

このような立地条件に恵まれたところで学ぶことのできる児童生徒のみなさんは、立派な校風と伝統のもとで、心豊かにたくましく、快活で楽しい学校生活を満喫していることと思いますが、どうか先輩の方々をお手本にしますます学業に励み、健やかに大成することを期待いたします。

100年の節目を迎えて、なお心を新たにし、学校、地域、関係当局が一体となって、広く国際社会を展望しながら、活力ある教育活動を展開され、本校がますます飛躍発展していきますよう祈念申し上げまして、お祝いのことばといたします。



祝 辞

東村長 平 良 昇 康

この度、東村立東小学校が創立100周年を迎えられたことに対し、御臨席の皆様と共に心からお祝い申し上げます。

本校は、明治21年5月、平良尋常小学校として開校したのでありますが、明治40年に校地を現在の場所へ移転して川田尋常小学校と改称されたのであります。その後、学制改革等によりたびたび校名が改称されましたが、昭和27年に東小学校となり現在に至っております。

創立以来1世紀にわたって公的教育機関として、地域の初等教育の振興発展に重要な役割を果たして参りました。今日までに輩出された卒業生は2,700名に及び、各界において活躍している数多くの優れた人材を社会に送り出し、輝かしい実績と伝統を築かれたことは、誠に喜びにたえない次第であります。

開校以来今日まで、激動する時代を切り開き、初等教育の場として君臨して来ました。

特に、去る大戦によって焼失した校舎やその他の教育基盤を、先生方や地域の方々が力を合わせいち早く再建し、これまで一環して教育施設及び教育環境整備に努力され、名実共に義務教育の殿堂として今日の隆盛をみたのであります。

これも偏に歴代の校長先生をはじめ諸先生方の教育に対する情熱と、本校発展のために御支援下さった父兄や地域の方々の理解と協力の賜物であり、衷心より深く敬意を表します。

教育は国家100年の大計と申します。1世紀にわたる本校の輝かしい伝統と歴史は、正にそれを物語るものであります。

本校は今、21世紀へ第一歩を踏み出すのでありますが、100周年を契機として関係各位が教育の使命と重要性に対する認識を深められ、将来を担う子弟の教育に一層の御活躍を期待申し上げます。

我が国の教育は世界で最も高い水準にあります。これは国民の教育に対するたゆまざる努力があったから成し得たものと思います。

本校の輝かしい伝統と実績も先輩達の100年に及ぶ努力によってうちたてられたものであり、この伝統を後輩が受けついで、さらに発展させてくれるものと信じています。

終りに、本校が豊かな人間性を培い平和で明るい民主的社會の建設に貢献し得る人間教育の殿堂として、限りない発展を祈念して祝辞といたします。



祝 辞

東村議会議長 仲 泊 弘 次

東小学校創立100周年記念式典が挙行されるに当たり、村議会を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

諸先生方、在校生徒のみなさん、同窓生並に御父兄のみなさん誠におめでとうございます。

明治21年5月、平良尋常小学校として創立された東小学校も過去幾多の歴史をきざみつつ、明治40年現在の場所に移転し、現代にみるすばらしい校風と伝統のもとに、名実ともに初等教育の場としての地位を築かれました。

かえりみますと、去る第二次大戦によって私達の先輩が営々築き上げてきました校舎を始め諸施設が総て灰じんと化し、衣食住にもこと欠く中を地域住民を初め、諸先生方と御父兄の子弟教育に対する情熱により、現在のこの姿を生み出したものであります。

関係各位の御尽力に対し、衷心より敬意を表するものであります。

又、この100年、本校は数多くの有能な人材を社会へ送り出し、その活躍は、めざましいものがございます。

そのことが私達をはじめ、次代をになう青少年の大きな励ましとなっている事は、本校のこの上ない誇りであり皆様と共に喜びにたえない次第であります。

今、東小学校は、このようなすぐれた先輩たちの血と汗によって築かれた遺産を受け継ぎ、21世紀へ向け出発しようとしています。

終りに、本校の発展に尽くされました歴代校長先生を初め、諸先生方、御父兄、期成会の皆さん、関係各位の皆様方の御健勝と東小学校が益々発展していくことをお願いいたします。私の祝辞といたします。



祝 辞

東村教育長 前 田 正 博

本日、茲に東小学校創立100周年記念式典が催されるに当り、御臨席の皆様方とともに心から喜び、又、祝辞を述べる機会を得ましたことは私にとって身に余る光栄と存じて居ります。

東小学校は、明治21年平良尋常小学校として発足し、爾来、校舎の移転改築、校地の拡張、教育制度の改革等、100年の間に幾多の変遷を重ね、立派な校風と伝統を築きあげて参りました。今日、施設、設備に於いては昔と比ぶべくもなく充実致しましたが、これも偏に歴代校長先生を始め諸先生方の御努力と快く土地を提供して戴きました地主の方々、又、惜しみない奉仕を戴きました父兄のお陰と深く感謝しているところであります。

現在、東小学校では施設の充実と共に教育内容の充実を計るべく先生方を中心に父兄、児童が一丸となって努力し、着々とその成果を挙げつつあることも真に喜ばしい限りで、東校が明るく希望に満ちた学校となることを確信しております。めまぐるしく移り変わる社会情勢の中で、現在あらゆる機会に「世界の日本」「国際社会で活躍できる子どもの育成」と云われておりますが、その為には、平和を愛し、思いやりのある心優しい子どもの育成に努めなければなりません。東小学校に於いても約2,700人の卒業生のうち、過去の忌まわしい戦争のため113名の同窓生が戦死して居ります。実に残念なことで、このような悲惨な歴史は二度と繰り返してはなりません。幸い生き延びた私共は、平和の有難さ、人命の尊さを深くかみしめ、平和教育の重要性を痛感し、これを後世に伝える責務があると思ひます。

また、東校には社会に大きく貢献した先人や、戦後の苦難を乗り越え、現在各界で目覚ましい活躍をされている同窓の方々が多くおられますが、その偉業や御努力は本校に学ぶ後輩の大きな励みとなり、立派な校風を更に大きく輝かしいものにすることと思ひます。今後とも変わらぬ母校愛をもちまして後輩に対する御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

終りになりましたが、このような立派な式典及び記念事業を推進された100周年記念事業期成会役員並に東小中学校教職員の皆様、及びこれを支え御協力された皆様方の御努力に対し深く敬意を表し、併せて東小学校の限りなき御発展を祈念致しまして祝辞といたします。



祝 辞

東小中学校PTA会長 比 嘉 勝 正

東小学校創立100周年、誠におめでとうございます。

明治21年5月「産声」をあげて以来、星霜100年、めでたく100周年を迎えることになりました。

開校して1世紀の時を刻み筆舌に尽くし得ぬほどの困難を克服しつつ、堂々と築かれた誇り高き立派な「校風」と不動の伝統は歴代の校長先生を初め、職員、生徒たちの手によって今日まで正しく受け継がれてまいりました。

100年の長い歴史を着実に切り開き、その上に積み重ねられた輝かしい伝統、その中から今日まで2,700人余の卒業生を世に送りだし、各階層で幅広く活躍していることは、我が東校の歴史と共に大きな誇りであります。

創立当初から、この学校を守り育ててこれら関係各位に対しまして厚く感謝の意を表します。

この創立100周年を迎えるにあたり、記念事業期成会を中心に多くの事業が計画され見事に完成致しました。村当局、議会、教育委員会、期成会、PTA、同窓生、地域の方々の御協力と御芳志を頂きましたことに対し、心から感謝申し上げます。創立100周年の大きな節目を次の大きなステップとしてさらなる発展と飛躍を切に念願するものであります。

在校生の皆さん、どうか東校の児童、生徒であることを誇りにしていただきたい、その誇りが自らを高めていくのです。

私達PTAは、学校、家庭、地域との連携を密にし、活動を展開していきたいと思います。

終りに創立以来、本校の教育と記念事業にお寄せ下さいました関係者皆様の御厚情、御芳志、御協力に感謝申し上げ、私の祝辞と致します。



祝 辞

生徒会長 儀 間 竜 広

本日、ここに東小創立100周年記念式典を迎えるにあたり、生徒会を代表してお祝の言葉を申し上げます。

東小学校は、明治21年5月24日に平良尋常小学校でスタートし、明治40年に現在の場所に移転し、川田尋常小学校となりました。

当時の様子を聞きますと、宮城からの通学は、ちゃんとした道がなく、海辺の浜を通ってくるため、満潮の時などは大変苦勞したそうです。今、100周年を迎え、PTAの皆様や諸先輩方のあたたかい心づくしにより東校は、大変りっぱになりました。

私たちも、それに負けないよう、先輩方の残した伝統を受けつぎ、100周年をひとつの区切りとし、生徒会を中心に頑張っていきたいと思います。

最後に100周年記念を心から祝福するとともに、東校がいつの時代までも名実ともに発展することをお祈りいたしまして、お祝の言葉とします。

東小学校百周年記念讃歌

作詞 大嶺えり子
大嶺 絹代
作曲 竹内 裕



あ お き う な ば ら た い へ い よ

ひ か り か が や く こ お て い は い つ

も あ か る い か お と か お こ こ

ろ と か ら だ す こ や か に

は ば た け わ れ ら の ひ が し し ょ う

東小学校百周年記念讃歌

一、青き海原 太平洋

光輝く 校庭は

いつも明るい 顔と顔

心と身体 健やかに

はばたけわれらの 東小

二、緑豊かな 恵み受け

あふれる水は とこしえに

歴史の数々 たたえつつ

未来を築く 学び舎は

はばたけわれらの 東小

三、高くそびえる 玉辻の

ふところきざむ 百周年

明るい明日を めざしつつ

永遠に栄える わが母校

はばたけわれらの 東校

100周年記念讃歌作詩の感想

東小学校6年 大 嶺 えり子

私がこの詩を作ったのは、学校からぼしゅうがあったので、作ってみようかな、という気持ちになり、お父さんお母さんといっしいに考えました。むづかしくて上手に作れませんでした。それで学校からもらったほかの学校の歌を参考にしていろいろ考えました。あまりうまくできませんでしたけれど竹内先生が作曲して下さいました。この100周年讃歌には、私達小学校のみんなが、明るく元気で、そしていつまでもさかえるようにという願いがこめられています。学校の前には太平洋、後ろには緑豊かな玉辻を中心に連なる山々、そして沖縄で一番大きな福地ダムがあります。そのすばらしい自然につつまれて来年、私達の学校が100歳をむかえます。私は、自分が東小の生徒であるうちに100周年をむかえられて大変うれしく思います。

100年の間には、色々な歴史があったと思います。お父さんお母さん、おじいさんおばあさん達が築いたこの100周年の歴史を私達みんなが守りつづけ未来へはばたいて行きたいと思います。



表彰を受ける大嶺えり子さんと竹内教諭



式典を終えて

学校長 金城 昂

昭和63年5月29日(日)、同窓生はじめ地域の方々並に来賓の方々、予想をはるかに上回る700余名の参席のもとに100周年の記念式典を厳粛且つ盛大に挙行することができました。主催者としてこれ以上の喜びはございません。

100周年記念事業のための準備委員会が発足して式典を終了するまでの経過については既に述べられたとおりですが、その中の二、三の点についてその具体的な動きや状況、感想等を述べてみたいと思います。

記念事業の推進に当って

昭和60年7月、PTAを中心に、期成会準備委員会が発足して期成会会則を制定し、それにのっとり期成会を組織し、役員を配置する等、事業推進のための態勢を整えるまで約一年を要し昭和61年5月24日に発足総会が開かれ、ここに宮里松次氏を会長とする「東小学校100周年記念事業期成会」が正式に発足致しました。

発足総会にはご存知のように、地元だけでなく県下の全域から30代の若者から80代までの古老まで多くの方々が集まり、母校の100周年についての同窓生の想いが噴出し、成功に向けての堅い決意が述べられ盛会のうちに終了致しました。

期成会の発足と同時に第1回の評議員会に向けて記念事業趣意書と事業計画の原案が総務部によって作られました。これらの作成に当っては、先ず、100周年の意義を次のように捉え、基本理念として事業を進めることにしました。

1. 本校創立100周年を機に同窓の者及び関係者が一同に会し、本校100年の歴史を祝い、交流を図り、心の絆を更に強め、21世紀に向けての本校の更なる発展に寄与する機会とする。
2. 教育は1時代、1時期だけのものではなく、未来永劫に継承され、発展していくものであり、教育の振興なくしては子々孫々、民族の発展は有り得ないことを確認する機会とする。
3. 情報化時代、高度技術化時代、国際化時代を迎える21世紀を示向した教育環境を整える機会とする。

事業計画については、ご存知のとおり、行政当局の負担する公費によるものと、期成会自体の募金に依る私費によるもの、とに分け、公費による分については村教育委員会と村当局に陳情書を出してお願いいたしました。

事業内容については既にご存知のとおり、当初、「100周年記念碑」の建立が挙げられました。しかし本校には既に昭和48年に教訓碑が、昭和57年には校歌碑が更に昭和58年には校訓が建立されており、しかも職員室の前庭には大きな石碑大の庭石が配置されているので、これ以上の碑の建立は好ましくないとの意見があり、記念碑建立の件は沙汰止みとなりました。然し適当な場の選定ができれば、何らかの形の記念碑は残しておきたいものだと思っております。

第1回の評議員会で趣意書、募金計画書、事業計画書等が承認されると同時に各部は担当の事業を開始致しました。

総務部は、同窓生の名簿作りと趣意書、募金依頼書（募金部と共同で）の発送。

全同窓生の氏名、住所を地域の各家庭、或は郷友会と連絡を取りつゝ作成したのですが、連日のように夜間、学校に集まり短時間の間にやり遂げました。

募金部は、募金計画から募金活動まで、それこそ足を使って、寸暇を惜しんで行なわれました。地元では丁度パイン自由化の問題が持ち上り、経済的に先行き不安な時でしたが、募金部の皆さんの努力と、地域の方々のご理解によって予定通りの募金活動ができました。郷友会の分については、各区の郷友会長さんと幹部の方々、先輩の方々にたいへんな難儀をしてもらいました。期成会の方から1、2回趣旨説明に参加しただけで、後は完全に郷友会の方々に任せきりでしたが予想以上の募金を集めていただきました。

事業部は、主として植樹とアスレチックの設置、その他校地の環境整備に当たりました。労力は役員とPTAが提供することになっておりましたので、殆んどの人が、二重、三重の負担をすることになってしまいました。植樹も大がかりなもので、会員から提供された梯梧の大木や大きな松の成木を、これ又会員提供によるユンボや大型トラック等を使って計画通りの植樹を行いました……。

アスレチックの設置は、NTT名護支所から電柱約50本の寄贈を受けて行なわれました。同支所では期成会事業部長と学校からの要請に心よく応じていたゞきたいへん感謝致しております。このように計画された事業は遅滞なく順調に進められました。

期成会長の交替について

発足当初から会長を引受け会運営に尽力された宮里松次氏が約1年後に腰痛を起し辞任を申出られ62年5月24日の総会によって辞任が承認されました。総会では引き続き後任会長の選出が役員会に一任されましたので、その為の役員会、選考委員会を開き、郷友会の

先輩達にもはかって、大先輩の金城珍徳先生にお願いすることになりました。幸いなことに先生が心よく引き受けていただき62年8月21日に会長に就任いたしました。その間約3ヶ月余は会長不在のまま副会長による会の運営がなされております。しかし喜んだのも束間、約6ヶ月後の63年2月14日に先生が急逝されました。最後のご奉公だと張切っておられた先生のご心中を察し哀惜の情を禁じ得ません。取り急ぎ先生のご冥福を祈りつゝ役員会を持ち後任についての話し合いを持ちましたが、先生への礼を尽し「49日の喪明け」を待って選定を行うべきだ、との意見によりその間又副会長が会長を代行することになりました。「喪明け」と共に地元や郷友会の先輩に相談を申し上げた所、全員が池原貞雄先生以外にはいない、とのことでしたので川田郷友会長の池原幸男氏を介して先生の意向をお伺いした所、「お引受け願える」との返事をいただき、早速池原幸男氏共々をお願いに上った所、逆に激励を受け、たいへん恐縮すると共に感動致しました。今になって振り返ってみますと、先生には母校とはいえず、日々忙殺されている中でしかもそれこそ間近になって、どこから来て、どこへ行くのかもしれない船の船頭をさせられた様なもので、たいへんなご苦労があったことと思います。この場をかりて深くその非礼をお詫び申し上げます。

このように二度、三度、と会長が変わりましたが、池原会長のもと役員全員が一致協力して無事に式典を乗り切ることができました。

式典を持つまでに

当初式典は、総務部の所管のもとに行う予定をしておりましたが、総務部だけでは負担が重すぎるということで、新たに式典委員会を設置して、式典の一切を取り仕切ることにしました。

委員会は、1. 式典祝賀運営部、2. 表彰部、3. 会場設営部、4. 案内接待部の四部を設け、期成会役員全員が何れかの部に属し、各部の連けいを保ちながら各部の計画を進めました。

1の式典運営部は、・式典パレードに関すること、・式典並に祝賀の内容の計画推進、・児童生徒の参加に関すること

2の表彰部は、・表彰規定の作成、表彰者の推せん、・表彰状の作成と記念品の選定購入

3の会場設営部は、・会場の設計と設営装飾、・会場周辺の整備装飾

4の案内接待部は、・招待者の決定、・案内状作成、発送、・当日の案内接待の一切

以上の四部がお互いに連けいを保ちながら一丸となって進められたわけですが、特に案内接待部は、全同窓、来賓への案内状発送や、当日のための酒肴、諸物品の調達や業者との対応等、式典が近づいてからは連夜おそくまで学校づめでした。又、会場設営部は、部長のめん密な設計、計画のもと、そのために必要な物品や花の調達、備品や、100周年表示のた

めのパネルや看板作り等、式典の半年程前から準備が進められました。式典の3日前には校区民全員が動員され、ペゴニヤの鉢6,000余鉢による花の表示や資料の展示、ソテツの葉で作られた昔なつかしい緑門等、皆さんがご覧の通りの見事な設営ができました。

このように役員始め、校区民が一体となって取りくんだその姿こそ100周年の意義を短的に表象しているものと思います。このように全員の気持が集中されたその力によって御存知のとおり、式典を成功させることができました。ほんとに御苦労さんでした。

その他、式典にまつわる二、三のことについてご紹介をしておきたいと思います。

1. 東校吹奏楽部の誕生

学校行事や、地域行事を盛上げると共に児童生徒の音楽性、情操を高め、地域文化の向上を図ることを目的に、吹奏楽部の設置を考えていましたが、楽器が高価なためなかなか実現することができませんでした。そこで100周年記念事業としてその件を行政当局に御願いした所、即座に認めていただき、62、3年度予算から550万円程の楽器を購入。62年5月に東校吹奏楽部を発足させました。約1年程、竹内裕教諭を中心に猛練習に励み、記念式典でお聴きいただいた程に上達致しました。

その後も練習を続け、地区や中央のコンクールにも出場する程になっております。今後ますます成長し、素晴らしい吹奏楽部に育って欲しいと念じております。

2. 100周年記念賛歌の制定

100周年の意義とその想出を、いつまでも心に残る思出として、児童生徒の心に刻むための100周年賛歌の制定が学校で進められ、その事をPTAを通じて校区に呼びかけ募集した所、相当数の作品が寄せられました。その中から平良区の小6年大嶺えり子、絹代親子の合作が当選し、それに音楽担当の竹内裕教諭が曲をつけ、「100周年記念賛歌」として制定いたしました。全校生徒が歌い、式典の時は、プラスバンドに乗せて小5年生が歌いそれに和して参加者全員が歌って好評をいただきました。

3. 二つの校歌

本校には、昭和21年の終戦直後から「見よ東海の空染めて……」で始まる校歌（玉城幸男作詞・仲村恒作曲）が制定されておりましたが、昭和33年、当時の吉田賀盛校長が、東校創立70周年を記念して現在の「たゝなわる……」で始まる校歌を改めて制定致しました。

然し100周年の式典で現在の校歌を聴いた昭和30年代の卒業生が、自分達の歌った校歌を懐かしみ、前の校歌を是非再録して欲しいという強い要望があり記念誌に再録をすることにしました。当時の方々は、大いに口ずさみ、往時の思出のよすがにしていたゞきたいと

思います。

4. 遠い本土や南米から式典に参加された方々

式典の1月程前に、玉村彌敬氏（川田区）が学校を訪問され100周年記念についてのお祝いと記念事業についての激励を受け、多額のご芳志をいただきました。氏は、日程の都合で式典に参加できないことをたいへん残念がってお帰りにになりました。又、式典の2、3日前に、わざわざ式典に参加されるために郷土を訪れた知念久泰氏（川田－神奈川在）金子清栄氏（宮城－長崎市在）知念祐憲氏夫妻（川田－南米亜国在）のご訪問を受け多額の御芳志を戴きました。

亜国からの知念氏は亜国在住の同窓生からの募金も持参していただいたわけですが、御存知のように南米のインフレで、亜国の通貨が、ドルに対して日々下落し、沖縄に来ると今度は円に対しドルが下落するという二重、三重のダメージを受けたと話しておられました。たいへんな御苦勞をかけ恐縮致しております。更に知念氏から戦前の東校の風景を描いた高価な油絵の寄贈を受けました。この絵は当初絵の得意な同氏が当時を偲んで自分で描くつもりでしたが、同氏の高校時代の恩師である平良泉幸先生が健在でまだ絵筆をとっておられると聞き、先生に懇願して描いてもらったとのことでした。大切に掲示、保管し、氏の好意に報いたいと思います。

まだまだお知らせすべき多くの事柄や、エピソードがありますが、紙面の都合で割愛させていただきます。

このように同窓生の母校に寄せる熱い想いと、関係者並に関係機関団体のご理解とご協力によって100周年式典を初めとする諸記念事業が御存知のように厳粛且つ盛大に、スムーズに終了することができましたことに対し心から感謝とお礼を申し上げ更にこれを起点に皆様の母校に対するなお一層のお力添、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

東村教育史

年表100年の歩み

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1674	延宝 2			久志間切は第二尚氏、国王尚貞王の時代に、金武間切から久志、辺野古2ヶ村と、名護間切から大浦、瀬嵩、汀間、安部、天仁屋、有銘、慶佐次、平良、川田の10ヶ村を分ち、久志間切を新設して豊見城王子朝良、久志親方助豊に賜い、後年川田村の一部を東方に移し、大鼓村と命名し、13ヶ村となる。大鼓村は後に富久地村と改め更に宮城村と改称され後に高江が分離した。	暦を印刷して国中に使用させた。 1688 イギリス名誉革命
1695	元禄 8			平良、川田村が大宜味間切に編入された。	1716 享保の改革
1719	享保 4			平良、川田村が久志間切に戻された。	玉城朝薫の御冠船踊り始まり
1728	享保13				蔡温三司官となる。 程順則名護間切地頭職となる。 ユタを禁止した。このころ産業革命おこる
1798	寛政10				国学(公学校所)を首里に建つ。 1775 アメリカ独立戦争 1787 寛政の改革 1789 フランス革命 首里に平等学校建つ。
1871	明治 4				野村流工工四成る 始祖野村安趙歿 1853 ベリー来航 1854 日米和親条約 1861 アメリカ南北戦争 1868 明治維新 1871 廃藩置県
1872	明治 5				1872 学制の発布 大陰暦を廃し太陽暦を用う 明治 5 年12月 3 日を以て明治 6 年 1 月 1 日となす 1873 徴兵令がでる 1877 西南の役
1880	明治13				1879 沖縄県ができる 国学を首里中学校と改称 県下に14の小学校が創立された。
1886	明治19				小学校令が改正され尋常科4年、高等科4年を就学期間とし、尋常小学校は義務制となった。

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1888	明治21	初代 国吉太郎 那覇市	平良村に平良尋常小学校が創立された。当時は出校率が悪く賦役を免除したり、弟妹の子守りをしながら授業を受けるものもいた。教科は読方、作文、算術、そろばん等であった。		
	不明	2代 小西不詳 不 明			1889 大日本帝国憲法の発布
	不明	3代 井田不詳 不 明		1890 第1回帝国議会教育勸語がでる	
	不明	4代 永井不詳 不 明		明28 有銘村に天銘尋常小学校が創立された	1894 日清戦争
1897 ＼ 1901	明30 ＼ 34	5代 平良清助 大宜味村		明31 久志小学校に高等科(4年制)が併置され間切内13ヶ村に1校あるのみで遠隔地生徒のため寄宿舎を設置した。	
1901 ＼ 1902	明34 ＼ 35	6代 安谷屋忠作 久志村		明35 大宜味小学校に高等科が併置され東村から入学するものもいた。その頃から授業料が徴収された。大宜味村民月額5銭、他村民10銭	1902 日英同盟
1902 ＼ 1906	明35 ＼ 39	7代 申 東秀 鹿児島県		明39 平良青年夜学会が開かれ毎週2回勉学す 会員71名	明36 小学校国定教科書制度公布 1903 ライト兄弟が飛行機をつくる 1904 日露戦争(～1905) 1905 ポーツマス条約
1906 ＼ 1908	明39 ＼ 41	8代 嘉数宜栄 本部町	明40 平良尋常小学校を川田へ移転、川田尋常小学校と改称す。敷地約700坪、校舎80坪(建築費1,506円79銭) 明41 高江小浜ノ上に川田尋常小学校高江分校が設置された。		明40 小学校令が改正され、尋常科6年制(義務制)、高等科(2年制)が布かれた 明41 沖縄県島嶼町村制発布間切を村に、村を字に改める
1908 ＼ 1916	明41 ＼ 大 5	9代 原 秀次郎 佐賀県	明45 高江分校が新川に移転した。	明42 村婦女会設立 明43 男女青年団設置	1911 辛亥革命 1912 中華民国の設立 1914 第1次世界大戦
1916 ＼ 1922	大 5 ＼ 11	10代 新城源徳 今帰仁村	大 8 川田尋常小学校に高等科が併置され川田尋常高等小学校と改称した。	大 7 天銘尋常小学校に高等科が併置され、川田尋常小学校区からも通学した。	1920 国際連盟に加盟

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1922 ～ 1926	大11 ～ 15	11代 岸本幸松 名護町	大12 川田尋常高等小 学校を東尋常高等 小学校に改称	大12 4月1日久志村 より東村として分 村、初代村長知念 貞馨 大13 字宮城を分けて 字高江が新設	大13 メートル法施行 1923 関東大震災 1925 治安維持法、普 通選挙 1925 ラジオ放送の開 始
1926 ～ 1928	大15 (昭和元) ～ 昭3	12代 宮里善助 久志村	昭2 児童愛護会が結 成され校長が会長 となる		昭3 県立第三中学校 名護に設立す。
1928 ～ 1930	昭3 ～ 5	13代 宮城定蔵 国頭村			昭5 県立第三高等女 学校設立す 1929 世界恐慌
1930 ～ 1936	昭5 ～ 11	14代 比嘉福吉 東 村		昭8 東村へ初めてバ スが運行	1931 満洲事変 1932 5・15事件 1933 国際連盟を脱退 1936 2・26事件
1936 ～ 1937	昭11 ～ 12	15代 新垣宜昭 首里市			1937 日中戦争
1937 ～ 1939	昭12 ～ 14	16代 比嘉良和 本部町	昭13 東尋常小学校創立 50周年式典を催す		昭12 支那事変勃発 1938 国家総動員成立 1939 第二次世界大戦 始まる
1939 ～ 1943	昭14 ～ 18	17代 大浜信光 石垣市	昭16 高江分校に高等 科併設		昭16 太平洋戦争勃発 昭16 学制改革により 国民学校と改称、初 等科(6年制)高等 科(2年制)となる 1940 日独伊3国軍事 同盟 1941 太平洋戦争はじ まる
1943 ～ 1946	昭18 ～ 21	18代 伊波寛永 名護町	昭19 東国民学校高江 分校が分離独立し 高江国民学校とし て開校した。 昭20 沖縄戦により校 舎全焼		昭20 学校授業1年間 停止を閣議決定、師 範、各中学校の男生 徒を鉄血勤皇隊及 び通信隊へ、女生徒 を補助看護婦とし て部隊へ配属した。 昭25 8月15日終戦 1945 広島、長崎に原爆 投下 ボツダム宣言受 諾 国際連合設立
1946 ～ 1947	昭21 ～ 22	19代 金城珍徳 東 村	昭21 東初等学校に改称 昭21 東幼稚園が併設 された 昭21 運動場が300坪拡 張された 昭21年10月茅葺校舎9 教室が建築された		昭21 初等学校令が公 布された(8年制) 昭21 辺土名高等学校 開校 1946 日本国憲法公布 1947 教育基本法公布
1947 ～ 1948	昭22 ～ 23	20代 金城徳明 豊見城村			昭22 東実業高等学校 創立

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1948 ～ 1952	昭23 ～ 27	21代 上江洲智徳 具志川村	昭25 東初等学校 P T A 設立 昭26 石積瓦葺校舎 1 棟（2教室130平方 米竣工） 昭27 東初等学校を東 小学校に改称	昭23 初の村長選挙行 われる 比嘉謙三氏当選 昭28 村制30周年記念 式典挙行政	昭23 教育基本法制定。 6・3・3制に移行 初等学校、中学 校に分離 1949 湯川秀樹が日本 人初のノーベル賞 受賞 昭27 琉球教育法（布 令第166号）施行 1951 日米安全保障条 約調印 昭27 第1回教育区教 育委員会及び会計 係特別選挙 1952 サンフランシスコ 平和条約
1952 ～ 1957	昭27 ～ 32	22代 當間賢助 浦添村	昭28 健康教育実験学 校発表会（文教局 指定） 昭29 ブロック建スラブ 校舎 1 棟（4 教室） 竣工 昭32 スラブ校舎 2 階 建（6 教室）竣工 昭32 東小中校併置校 となる	昭31 東中学校が東小 学校敷地へ移転	昭32 民法による教 育法が施行された。 昭33 B円をドルに切替 1953 テレビ放送開始 1956 日本国際連合に 加盟 日ソ共同宣言
1957 ～ 1962	昭32 ～ 37	23代 吉田賢盛 浦添村	昭33 創立70周年記念 式典 校歌改定 校旗樹立 中学校敷地990平 方米拡張 昭35 スラブ校舎 3 教 室竣工 昭36 保健室竣工 昭37 スラブ校舎 1 教 室竣工	昭35 パン給食始まる	1958 通過 B 円からド ルへ 1960 日米新安全保障 条約調印 1960 ベトナム戦争は じまる
1962 ～ 1967	昭37 ～ 42	24代 吉田善昌 仲里村	昭39 家庭学習の仕方 の指導（北連教育 長指定）発表会 昭39 東中 2 階 2 教室 竣工		1964 第18回オリンピッ ク東京大会開かれる
1967 ～ 1972	昭42 ～ 47	25代 平良景太郎 大宜味村	昭42 体育備品室（同 窓生寄贈） 昭43 創立80周年記念 式典 記念図書館 建設 校長住宅新築 昭43 放送教育研究発 表会（北連指定） 昭44 中学校技術家庭 教室竣工 昭45 給食準備室竣工 昭47 体育館竣工（895 平方米）	昭42 全国優良町村表 彰 昭44 全村電機点灯 昭46 自動電話開通	1969 アポロ11号月に 着陸 昭47 本土復帰 1970 日本万国博覧会 開かれる 1972 中華人民共和國 との国交正常化
1972 ～ 1975	昭47 ～ 50	26代 山内昌敬 今帰仁村	昭49 東中理科音楽室 竣工（186平方米）	昭48 若夏国体炬火宿 泊 昭49 福地ダム完成 昭50 簡易水道浄水場 完成	1975 国際海洋博覧会 が沖縄で開かれる 1975 ベトナム戦争終 わる

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1975 ～ 1980	昭50 ～ 55	27代 田端景雄 宜野座村	昭51 小学校理科音楽 教室竣工 昭51 中学校図書管理 室竣工 昭51 教員住宅1棟新 築 昭53 中学校美術、視 聴覚教室竣工(318 平方米) 昭54 小学校管理室、 保健室特別教室改 増築(700平方米) 昭54 創立90周年記念 式典 東国民学校4期 生(昭20卒) 卒業証書授与式 昭55 90周年記念運動 場拡張工事(第1 期)着工	昭51 村民の森つづじ 園着工 昭52 村中央公民館竣 工 昭54 広報無線放送開 始 昭54 国際児童年記念 子ども大会 昭55 村営屋外運動場 完成	1976 ロッキード問題 おこる 昭53 7・30交通方法 変更 1978 日中平和友好条 約を結ぶ
1980 ～ 1983	昭55 ～ 58	28代 比嘉敏雄 名護市	昭57 九州地区PTA 大会に於て仲間教 頭、PTA活動を発 表 昭57 校歌碑建立(57 年卒) 昭57 比嘉敏雄校長学 校保健功労文部大 臣賞受賞 昭57 小学校普通教室 2階建6教室増改 築(485平方米)	昭56 村営体育館完成 昭56 東村が基礎学力 向上推進地域に指 定される(県教育 庁) 昭57 村制60周年記念 式典	1980 イラン・イラク戦争 勃発 1982 フォークランド紛争 勃発
1983 ～ 1986	昭58 ～ 61	29代 玉城誠栄 本部町	昭59 数学科教育課程 研究発表、文部省 指定(中学)徳元教 諭 昭59 中学校普通教室 2階建4教室増改 築(435平方米) 昭59 校歌碑台座を設 け校門左へ移動(59 年卒) 昭59 地区中体連剣道 女子団体優勝、男 子準優勝 昭60 運動場整備完了 昭60 地区中体連剣道 女子優勝 昭60 児童オリンピック 6年吉本久也 砲丸投1位 6年比嘉 香 県中体連走幅跳 中1宮城正栄 2位 砲丸投1位 昭61 教員宿舍(100平 方米)新築 昭61 運動場照明施設 昭61 屋外備品室、仮 所新築	昭59 基礎学力向上推 進地域研究発表 昭60 教育年報創刊号 発刊	1983 ソ連、大韓航空機 撃墜 1984 ペルシア湾でタン カー攻撃続発

西暦	日本年号	校 長	東小学校関係	東村関係	そ の 他
1986 }	昭61 } 63	30代 金城 昂 東 村	昭62 体育館屋根塗装 工事 昭62 プラスバンド完備 昭62 A V調整卓工事 昭62 体育館緞帳取替 昭62 タイムス展習字 小 城間亜紀 最優秀賞 昭62 地区英語弁論大会 1位中村幸治 昭62 県中体連陸上砲丸 大会新 吉本久也(15・81) 昭62 県指定社会科研 究発表 昭63 小 学 校100周 年 記念式典 (5 ・ 29)	昭63 村営体育館周辺 塗装幸治	1988 ソウルオリンピック 開催

教 育

1 間切・久志村時代

王国時代には階級意識が極めて強く、士族と平民の差別が著しかったので、平民子弟の勉学する機会は限られたものであった。各間切の番所には筆算学校があって「読み・書き・算盤」を教えたが、これは将来間切や村（字）吏員を志望する者を養成するのを目的としたものであった。しかも家柄のよい子弟でなければならなかったので、一般庶民の勉学する機会は与えられなかった。

廃藩置県後、普通教育の普及の目的で、県令によって久志間切に久志小学校が創設されたのは、明治15年（1882）3月15日であった。当時は子供が7、8歳に達すると、薪採りや弟妹の子守をしたり、12、3歳になると農耕作業や草刈り・台所の手伝いなど、家業を分担するのが常であった。上杉県令による熱心な子弟の就学奨励にもかかわらず、「百姓には学問は不要である」と考えるものが多く、就学者の増加をはかることは困難であった。そのために「強制的賦課法」が制定され、子弟の就学数を各村（字）に強制的に割当て、米や金銭を補助したり、文房具を貸与したり、就学者の家の夫役や公費を免除したり、卒業後は筆者、掟、文子などの資格を与えたりして就学を勧誘した。

当時の生徒の年齢は、8歳から20歳くらいの者まで長幼混在し、中には妻帯者も含まれていた。生徒たちは結髪して帯を前に結び、裸足で通学した。弟妹の子守をしながら授業を受けることも珍しいことではなかった。小学校が間切の南方に偏在していたので、僻遠の有銘以北の地区から自宅通学することは不可能であった。そのため就学するには学校近くの民家に下宿生活をしなければならなかった。そのようなことから、「強制的賦課法」による就学者は、村（字）内の住民の貧富を考査して、富者の子弟から選ばれた。

明治19年(1886) 小学校令が改正され、尋常科4年、高等科4年を就学期間として、尋常小学校を初めて義務制とした。この小学校令は、沖縄県も全国と同時に施行されることになり、置県以後の沖縄県民の皇国民化を促進することになった。

明治21年(1888) 小学校尋常科（4年）の義務制を受けて、平良村に平良尋常小学校が同年5月24日に創設された。平良尋常小学校の創設は、現在の東村地区における普通教育の発展史上画期的なことで、小学校の創設によって就学生徒数も増加し、とくに女子生徒の就学するものが増えた。

明治28年(1895) 平良尋常小学校の創設に遅れること7年目にして、有銘村に天銘尋常

小学校が創設された。創立当初は校舎は無く、村事務所を校舎に充て、教員1名（安谷屋音房）が配置されただけであった。創設されて2年後の明治30年（1897）に、現在の有銘小学校敷地に校舎が新築されて移転し、初代校長に玉城定英が就任した。

平良尋常小学校と天銘尋常小学校の2校が間切東部地区に配置されたことにより、この地区における普通教育はかなりの進展を見せた。それに拍車をかけるように、明治27～8年（1894～95）戦役の勝利は、県民の日本人意識を高め、就学率も伸びた。沖縄県の開戦前（明治26年）の就学率は19.9%であったが、戦後の就学率31.15%と急増を示した。当時の平良尋常小学校と天銘尋常小学校の就学率についての資料はないが、両校の就学率も高まったことは容易に首肯できる。

明治31年(1898) 久志小学校に高等科（4年制）が併置された。久志間切に唯一の高等科が間切の南部に偏在しているため、有銘以東地区からの就学者には不利であった。高等科に進学するには、寄宿舎にはいるか民家に下宿して通学しなければならなかった。休日には自宅に帰り、食糧を担いで帰校するのが常であった。就学するには相当多額の学費が必要であったので、裕福な家族の子弟のほかには進学者はほとんどなかった。毎年開催される高等科の運動会は午後の半日だけだった。運動会には間切各村（字）の区長は必ず招待を受けるのが慣例であった。たった半日の運動会参列のために、区長は村のサジーに食糧を携帯させて炊事をさせ、2泊3日も出張しなければならなかった。

明治33年(1900) 明治33年11月13日付琉球新報の国頭視察録（5）によれば、当時における久志間切の4つの尋常小学校の就学者の100分比例は表1のとおりである。

平良尋常小学校の就学者率が低くなっているのは、高江村からの通学が困難であるからである。高江では、就学希望者は平良校に通学可能な村落や与那原・泡瀬・具志川などの縁故者の家に下宿して就学せざるを得なかった。小学校が義務制になったとはいえ、高江村では就学を望んでも、その実現は容易なことではなかった。

明治35年(1902) 大宜味小学校に高等科が併置された。同校は他間切にありながら久志村の高等科より距離的に近かったので、東村区域から入学する者も多くなった。その頃から高等科に在学する者は授業料を支払わなければならなくなり、大宜味間切出身者は月額5銭、他間切出身者は月額10銭が徴収された。

明治37年(1904) 琉球新報（明治37年8月1日版）に「国頭郡小学生徒出席比例」が掲

表1 久志間切四小学校の就学者百分比例
(昭和33年度調査)

校名	新 募	就学者百分比例		増	減
		前 年	本 年		
久 志	男 43 女 33	42.6	54.7	12.2	—
久 辺	男 6 女 9	58.7	68.5	4.8	—
天 銘	男 12 女 16	38.3	46.0	7.7	—
平 良	男 6 女 21	27.7	51.2	23.5	—

載されている。久志間切4小学校と1分教場の出席比例は表2のとおりである。

国頭郡内の12小学校・3分教場のうち、平良小学校は97%で最高出席率を示している。これについて久辺小学校の96%の出席率が高くなっている。当時、平良小学校は国頭郡で最も高い出席率をもっていたことがわかる。ちなみに間切別でみると、久志間切は金武間切と並んで、出席率第1位を占めた。

明治40年(1907) 教育令の改正によって、小学校6年制(義務制)・高等科2年制となった。同年、平良尋常小学校を川田村に移す決定がなされ、校名は川田尋常小学校に改称された。移転に伴う校地面積はおよそ700坪、木造瓦葺校舎80坪、校舎建築費1,506円79銭の規模であった。

明治41年(1908) 川田尋常小学校高江分教場が、高江小浜ノ上に設置された。その頃まで高江には正規の普通教育施設がなく、地元民から小学校設置が強く望まれてきた。小学校尋常科(4年制)が義務化された明治19年(1886)から22年も経ってから、初めて普通教育施設が実現したが、その間における高江区民の就学にかかる苦悩は深刻なものであった。分教場設置に対する高江住民の喜びがいかに大きかったかは、次の句からもうかがい知ることができる。

深山路や 教え草咲く 御代の春 (読み人不詳)

君が代や 深山奥にも 教え草 (読み人不詳)

創設された高江分教場に、初代教師として宮城芳太郎が赴任した。

同年に、沖縄島嶼町村制が施行され、間切を村に、各村を字に改称され、間切長を村長と改められた。

明治45年(1912) 高江分教場が高江の小浜ノ上から新川に移転された。新川から小浜ノ上の分教場に通学するには、新川を徒歩で渡らなければならなかった。降雨時には新川が増水し、川を渡って通学するには危険が多く、川にロープを張り渡して、それにつかまって川を渡って通学していた。

大正6年(1917) 「沖縄県国頭郡誌」によれば、久志村東部地域(天仁屋以東)内の小学校の規模は、表3のとおりであった。

表2 国頭郡小学生出席比例

(明治37年6月現在)

学 校 名	男	女	計	授業日数	等 位
久 志	93	95	92	26	1
嘉陽分教場	94	88	91	26	2
久 辺	94	98	96	26	優
天 銘	96	83	91	26	2
平 良	97	97	97	26	優
計	95	93	94		—

表3 久志村東部地域小学校一覧

(大正6年4月現在)

学 校 名	学級数	教員数	在 籍 児 童			創立年月日	校費予算
			男	女	計		
川田尋常小学校	5	5	129	101	230	明21.5.24	1,427.900
天銘尋常小学校	4	4	124	86	210	28.7.31	1,213.840
(大宜味小学校) 高等科	2		77	19	96		

当時同地域には高等科は設置されてなかったので、高等科に就学する生徒は大宜味校の高等科に入学した。同校の高等科に、久志村東部（現東村）の出身者が何名在籍していたかは、判明しない。

大正7年(1918) 天銘尋常小学校に高等科が併置され、校名は天銘尋常高等小学に改称された。天銘校に高等科が設置されたので、川田尋常小学校から進学するものも少なくなかった。

大正8年(1919) 天銘校の高等科併置に続いて、川田尋常小学校にも高等科が併置され、校名は川田尋常高等小学校に改称された。同年、天銘尋常高等小学校の分教場が天仁屋に創設されて、天仁屋区域出身の尋常科1年生から3年生までの約30名が、天仁屋分教場に移った。

大正11年(1922) 天銘尋常高等小学に在籍していた天仁屋出身の尋常科4年生が天仁屋分教場に移った。

2 分村から終戦までの教育

大正12年(1923) 有銘、慶佐次、平良、川田及び宮城の五つの字が久志村から分れて、行政上独立した「東村」が誕生した。それに伴って、川田尋常高等小学校は東尋常高等小学校に、天銘尋常高等小学校は有銘尋常高等小学校に、それぞれ校名が改称された。分村によって、天仁屋分教場の児童は、久志村の嘉陽小学校に移った。

昭和6年(1931) 満洲事変勃発 **昭和12年(1937)** 支那事変勃発。この二つの事変の勃発の影響を受けて、日本の教育は次第に軍国主義的な色彩が濃くなっていった。

昭和13年(1938) 東尋常高等小学校では、学校創立50周年記念式典が盛大に挙行された。

昭和16年(1941) 小学校令が改められ、国民学校令が同年4月1日から実施された。国民学校令の目的は、皇国民を錬成するところにあつて、教科をとおしての教育によって皇国民の基礎的錬成をすべきであるとして、従来の小学校教科の再編成や教科内容の大幅な改変が進められた。

同年、国民学校令の施行によって、東尋常高等小学校は東国民学校に、有銘尋常高等小学校は有銘国民学校に、それぞれ校名が改称された。高江分教場に高等科が併置され、これで高江村民が義務教育6年、高等科2年の普通教育を受けられるようになった。

同年12月8日、日本は米国と英国に対し宣戦布告して、太平洋戦争に突入した。学校教育は、専ら戦争の勝利に向けて盲進する国家総動員運動の渦に巻き込まれていった。

昭和19年(1944) 高江分教場は東国民学校から分離独立して、高江国民学校として発足した。初代校長に太城栄俊（金武村出身）が任命された。久志間切時代、平良村に平良尋

常小学校が設置されてから、実に56年目に高江に独立校高江国民学校が設置されたことになった。

昭和20年(1945) 沖縄本島攻略の前進基地として、米軍が慶良間諸島に上陸したのは3月26日のことだった。同年4月1日、ついに嘉手納の中飛行場に近い水釜付近から沖縄島への上陸作戦を敢行し、沖縄島は日米決戦の修羅場となった。米軍は、嘉手納と泡瀬を結ぶ地帯で沖縄島を東西に分断した。米軍の上陸部隊は北進作戦と南進作戦を展開した。まさか山村の東村にまで米軍が進攻して来るとは夢想だにしなかった村民も、万一に備えて山中に避難小舎を作っていた。米軍は東村にも進攻して来たので、村民は食糧や身廻り品を山小舎に運び込んで、山中生活をせざるを得なかった。住民が山中に避難している間に、部落の住居や学校は米軍によって焼き払われてしまった。勿論、学校は自然休校が続いた。

3 戦後の教育

昭和20年(1945) 6月23日、日本軍の沖縄守備隊・第32軍司令官牛島満・参謀長長勇、摩文仁で自決し、事実上の沖縄戦が集結した。7月下旬から村民が下山を始めた。有銘・慶佐次村民は羽地田井等へ、平良・川田宮城村民の大半が大宜味村根路路へ収容された。

同年8月、収容されていた地区から、村民が各部落への復帰が許可された。各出身部落に復帰はしたものの、家屋や学校が米軍に焼き払われ、住む家も学ぶ学校も灰燼に帰っていた。各部落民は、焼け残った数軒の家屋に分泊しながら、まず住まう仮小屋を造らなければならなかった。

当時、食糧は米軍から無償配給を受けていたが、小麦粉や缶詰類が殆んどで村民は極度の栄養失調に陥った。数カ月の山中で避難生活と下山後のバランスを欠いた食糧配給で村民の体力は著しく減退した。それに加えて、避難生活中に罹ったマラリヤのために、老人や子供が次々に死亡した。そのような災難にもめげず、村民は互に助け合い励まし合いながら、住宅建設と食糧増産に日夜奮闘した。

大人たちは戦災復興に専念していたので、各家庭では子供の面倒をみる者がいなかった。この事態を憂慮した父兄や元教師たちの間から、学校復活の声が高まった。やがて部落毎に児童生徒を集めて、戦後初めて教育が始まった。校舎が焼失してしまっているのに、子供たちを収容する施設が無かったので、部落近くの広場や木陰、浜などの適当な場所に分れて学習指導をした。部落内の有資格者や教師経験者が教師となったが、必要人数を充たすことができず、旧制中等学校卒業生や在学学生で補充せざるを得なかった。

辺土名地区(国頭・大宜味・東村地区)警察隊長ラプレス中尉の「8歳から15歳までの児童は学校に通うべし」との学校開設の命令が伝達された。それに基づいて、村内の各校

区に正式に学校が開設されるようになった。

同年10月1日、東校が開設され、平良、川田で分散授業が行なわれ、初代校長に金城珍徳が就任した。同年同月同日、有銘校が開校され、校長事務取扱いに新里義雄が就任し、茅葺校舎四棟が建設された。当時は正式な学校名はなく、慣例にしたがって東校、有銘校と呼ばれていた。開校されたとはいえ、教科書も学用品もなく、授業は専ら教師の創意工夫に委ねられた。

昭和21年(1946) 沖縄諮詢委員会により初等学校令が公布された。それによって東国民学校は東初等学校に、有銘国民学校は有銘初等学校に、それぞれ校名が改称された。同年東初等学校の運動場が拡張され、旧役場敷地も校地に編入された。同年5月6日、高江初等学校が開設し校長に玉城幸男が就任した。

昭和23年(1948) 本土の6・3制が採用され、初等学校(6年)、中学校(3年)が義務教育になった。新制度になった東中学校初代校長に金城珍徳が就任し、校地は川田のヌンガニクの東実業高等学校跡地が充てられた。東初等学校長には上江洲智篤が就任した。有銘中学は有銘初等学校に併置され、校長は有銘初等学校の校長松田福一郎が兼任した。高江中学校は初等学校に併置され、松田健徳が校長を兼務した。

昭和26年(1951) 沖縄群島の各初等・中学校の本格的な校舎建築が始まった。東初等学校及び有銘初等学校に、石積み瓦葺校舎がそれぞれ1棟(2教室130平方米)が建設された。

昭和27年(1952) 群島政府が廃止され、新たに琉球政府が発足した。琉球教育法(布令第166号)が施行され、高江初等学校は高江小学校に、東初等学校は東小学校に、有銘初等学校は有銘小学校に、それぞれ校名が改められた。高江小学校に、石積み瓦葺校舎1棟(2教室)が建設された。

昭和28年(1953) 沖縄教職員会が、校舎の戦災復旧募金運動を本土において展開したので、アメリカの軍政府も動き出し、その後校舎の建設が急速に進展した。有銘小中学校にブロック建瓦葺校舎1棟(2教室130平方米)が建設された。東小学校では文教局から「健康教育実験学校」の指定を受け、その実験結果の発表会が開催された。

昭和29年(1954) 沖縄全域にわたる校舎復旧工事が進められ、東小学校にブロック建てスラブ葺校舎1棟(4教室)、有銘小学校にブロック建スラブ葺校舎(2教室)がそれぞれ建設された。

昭和31年(1956) 東中学校がヌンガニクから東小学校校地に移転し、東小学校長当間賀助が校長に併任された。有銘小中学校では学校創立60周年記念図書館とブロック建スラブ葺校舎1棟(2教室)が建設された。また、学校創立60周年記念式典が盛大に挙行され、校歌も制定された。

昭和32年(1957) 昭和28年(1953)頃から進められた校舎の戦災復旧工事は依然として

続けられ、高江小中学校にブロック建スラブ葺校舎D型1棟(2教室)、ブロック建スラブ葺校舎2階6教室が東小中学校に、有銘小中学校では運動場の拡張工事と調理室(52.8平方米)がPTAの援助で建設された。

昭和33年(1958) 東小中学校では、学校創立70周年記念式典が盛大に挙行された。記念行事として校歌が制定され、校旗が樹立された。なお、中学校敷地970平方米の拡張工事が行なわれた。

昭和34年(1959) 高江小中学校では、沖縄営林署の職員官舎を学校施設として払い下げを受けた。有銘小中学校では、PTAの資金援助を受け、スラブ造り便所(26.4平方米)が建設された。

昭和35年(1960) 高江小中学校では教員宿舎兼家庭科教室1棟、東小中学校ではスラブ校舎3教室がそれぞれ建設された。有銘小中学校は文教局より「保険体育実験学校」の指定を受け、実験結果の発表会を開催した。

昭和36～39年(1961～64) 高江小中学校にスラブ校舎(1教室)、東小中学校に保健室・スラブ校舎(2階1教室)・中学校2階2教室、有銘小中学校ではスラブ校舎2階が、それぞれ建設された。なお東小中学校では、北部連合教育長の「家庭学習の仕方の指導」の実験学校の指定を受け、実験結果の発表会を開催した。

この頃までに村内各校の普通教室の建設はほぼ終了し、その後は特別教室や教員宿舎などの建設に力が注がれるようになった。教室の復旧に伴い、各種の教育活動が活発に行なわれるようになった。

昭和41年(1966) 高江小中学校では学校創立60周年記念式典が盛大に挙行され、校旗の樹立及び記念碑の除幕が行なわれた。また、新川に教育住宅1棟が建設された。

昭和42年(1967) 高江小中学校の新川校地を牛道の新校地に移転することが、中央教育委員会で認可され、同年10月6日、牛道の新敷地において厳粛な地鎮祭が挙行された。東小中学校では、同窓生の寄贈による体育備品室が建設された。有銘小中学校が第3回全琉美化コンクールにおいて、文教局長賞を受けた。さらに、第9回全琉緑化大会において、琉球政府主席賞を受賞した。

昭和43年(1968) 高江小中学校は文教局長より「小学校算数研究校」の指定を受け、その研究成果の発表会が開催された。なお、前年に着工された新校地の地均し工事が完了した。東小中学校創立80周年記念式典が挙行された。記念図書館と校長住宅が建造された。同校は北部連合教育長より「放送教育研究校」の指定を受け、その研究成果の発表会が開催された。有銘小中学校のスラブ校舎(2階)が落成した。同校は北部教育連合区教育長より「理科教育研究校」に指定され、研究成果の発表会が開催された。

昭和44年(1969) 2年前から牛道新校地の地均し工事に引続いて行なわれた新校舎建築

工事が完了し、高江小中学校は旧校地の新川より移転した。東小中学校の中学校技術家庭科教室と有銘小中学校のスラブ葺校舎（2階120平方米）及びスラブ葺図書館が竣工した。

昭和45年(1970) 新校地に移転した高江小中校では校歌が制定され、東小中学校の給食準備室、有銘小中学校の技術家庭科教室が竣工した。

昭和46年(1971) 高江小中学校では、文教局長より「中学校英語科におけるシート学習」の研究校に指定され、個別指導を効果的にするシート式録音機の利用についての研究発表会が開催された。また、校地の移転に伴って、校門、運動場のスタンド施設、排水溝施設の工事が行なわれた。高江区長佐久本盛栄と伊波良子（中学3年）が、校外における児童生徒の指導の功績によって沖縄こどもを守る会より表彰された。東小中学校の運動場拡張二期工事が行なわれた。

昭和47年(1972) 同年5月15日を期して、沖縄の施政権が日本に返還された。戦後の東村の教育は、アメリカの施政権下における沖縄の教育行政の変遷を背景にして進展してきたが、1972年の沖縄の施政権返還によって、沖縄の教育は、完全に日本の教育基本法に基づいて為されるようになった。

同年、高江小中学校は、僻地研究校の指定を受け、第18会九州僻地教育研究大会において「学習指導の効率化をめざす教育機器の利用」について発表した。高江中3年高江洲義彦が、児童生徒の校外活動指導の功績により、沖縄こどもを守る会より表彰された。また、PTA会長嘉手苺真昭は、そのPTA活動に尽した功績に対し、沖縄県PTA連合会より表彰された。東小中学校の体育館（895平方米）が竣工した。有銘小中学校は東村教育委員会より音楽教育研究校の指定を受け、その研究成果の発表会を開催した。翌年の昭和48年（1973）に有銘小中学校の音楽教室（84平方米）が建設された。

昭和49年(1974) 高江小中学校の複々式学級が改組され、複式学級編成となった。同校の教員住宅1棟（2世帯）が竣工した。東小中学校の理科音楽教室（186平方米）が竣工した。

昭和50年(1975) 高江小中学校の運動場拡張工事が施工された。有銘小中学校の教育住宅1棟（2世帯）と体育備品室（49平方米）が竣工した。

昭和51年(1976) 高江小中学校の家庭科・普通教室（計136平方米）が落成した。東小中学校の小学校理科・音楽教室、中学校図書館、管理室、教員住宅1棟（2世帯）が竣工した。有銘小中学の体育館（729平方米）が完成した。昭51年卒業生によって、卒業記念として「少年像」が建立された。なお、同校の創立80周年の記念式典が挙行された。

昭和52年(1977) 高江小中学校の水泳プールの工事が進められ、その竣工をみた。このプールは、村内の学校では初めてのプール建設となった。東小中学校の給食準備室の増築（49平方米）が落成した。有銘小中学校では校地の狭さが教育に支障をきたしていることが問題となっていたが、区公民館に隣接する場所に校地を拡張し、新しく運動場が建設さ

れた。

昭和53年(1973) 東小中学校の図書室、図画工作室、音楽室の特別教室(合計136平方米)が建設された。同校創立90周年を迎え、盛大な創立90周年記念式典が挙行された。また、記念事業の一つとして進められた築山が完成した。東中学の美術視聴覚教室(218平方米)の特別教室が竣工した。有銘中学校の運動場の移転新設によって学校敷地が広くなり、普通教室5教室、管理棟、図書室、保健室の合計520平方米の新校舎が落成した。同校のサッカー・チームが、全県サッカー大会において、県下の参加チームを抑え優勝した。

昭和54年(1974) 高江小中学校で、「複式学級の体育年間指導」(村教育委員会指定)の発表会が行われた。なお、同校は、読書感想画コンクールにおいて、その成績の優れたことが認められ、沖縄県図書館協議会から努力賞が授与された。東小中学校の小学校管理室、保健室の増改築(700平方米)が落成した。更に、昭和20年(1945)の沖縄戦で村内各校の授業は行われず、その年に卒業が予定されていた卒業生の卒業式が挙行されなかったもので、当時の東国民学校4期生の卒業式が挙行され、卒業生に対し卒業証書が授与された。有銘中学校では、県教育庁の指定を受け、中学校教育課程(3年間)の研究結果の発表が行われた。仏桑華の会による懸賞作文募集に応募した山口栄泉(中学1年)が優秀賞を受け、本土招待旅行に招待された。また、日本移住財団の懸賞作文募集に参加した沼倉智恵子(中学1年)が特選に入賞し、米国旅行に招待された。県中学校体育連盟の主催する陸上競技大会において、仲嶺真正(中学3年)が棒高跳びの種目で3米90の県中学校新記録を樹立して優勝した。また、第1回九州中学校陸上競技大会にも参加し、第3位に入賞した。有銘校では、更に、「望ましい生活習慣を身につけさせる研究」で優秀な成績を挙げ、第24回学研教育賞が贈られた。

昭和55年(1980) 高江小中学校は、日本学校歯科医師会より、よい歯の学校として、表彰された。東小中学校では、90周年記念事業の一つとして進められて来た記念運動場拡張第1期工事が終わった。有銘小学校の校舎増改築工事(700平方米)が落成した。

昭和56年(1981) 高江中学校の高江洲悟(中学2年生)と津波古和子(中学2年生)が、第18回県読書感想画募集に応募し、優秀賞を受けた。有銘小中学校は、第26回九州地区僻地教育研究大会において、「特別教育活動」についての研究成果を発表した。有銘中学校3年生伊佐敬子は、県中学校総合体育大会において、砲丸投げの種目で11米22厘の好記録で優勝した。

昭和57年(1982) 高江小中学校の体育館(685平方米)が竣工した。九州地区PTA大会において、沖縄の代表として東小中学校のPTA活動が報告された。東小学校の普通教室2階建6教室(485平方米)の増改築が竣工した。また、昭和57年卒業生の卒業を記念して、校歌碑が建立された。有銘小学校2年生仲村慶太が、県読書感想画の募集に応募し、優秀

賞を受けた。

昭和58年(1983) 高江小中学校は、県学校歯科医師会より、よい歯の学校として表彰された。同小学校4年生高江洲義春は、県農業協同組合連合会の主催する「交通安全ポスター」募集に応募し、優秀賞を受けた。有銘小学校6年生金城有起は、第3回県児童オリンピック大会に出場し、100米競走種目で12秒8の好記録で優勝した。有銘中学校3年生久高稔は、県中学校体育連盟主催の競技大会において、棒高跳びの種目で3米30厘の好記録で優勝した。

昭和59年(1984) 東中学校は文部省指定研究協力校として、「数学科教育課程実施について」の研究を行い、その成果を発表した。同校普通教室2階建4教室(435平方米)の増改築が行われた。以前に建立された校歌碑の台座の建設が行なわれ、また、従来の校門の位置が現在の位置に移設された。有銘中学校の音楽室、美工室、技術室、家庭科室の特別教室(500平方米)の増改築が行われた。

なお、東村全域が県教育庁による「基礎学力向上推進地域」の指定を受け、3年間にわたる研究成果を発表した。

以上、東村における戦後教育の変遷について、村内の3校別に年譜を追って述べてきた。

東村における戦後教育は、無から出発して今日の隆盛をみるに至った。終戦直後は、教育に関する法令がなく、村民の収容先の米軍地区隊長の指示を受けて、村民が収容されている地区(辺土名地区・田井等地区)の集落毎に行われた。そのような状態は、村民が各出身集落に帰還後も、なお暫く続いた。

終戦の昭和20年(1945)10月1日から、沖縄群島の教育行政機関の教育部の下で、各地に正規の学校が開設され、東校と有銘校が開校されたが、高江校の開校はその翌年の5月6日であった。

それ以後、学校名が初等学校、高等科を中学校に、更に初等学校が小学に改称されて現在に至っている。校舎は、高江校以外は戦災で焼失したので、茅葺教室の建設から石積み瓦葺校舎に改築され、更にブロック建スラブ校舎に変わり、2階コンクリート校舎へと増改築が進められてきた。復帰後になって特別教室、体育館、図書館、教員住宅棟等が建築され、教育施設は年を追って整備されて来た。高江小中学校が新川の旧敷地から牛道の現敷地に移転し、施設設備の飛躍的な整備充実がはかられた。東小中学校でも敷地の拡張が行われ、それに伴って運動場の拡張や校舎の増改築が進められて来た。以前から校地の狭隘の問題を抱えていた有銘小中学校においても、新運動場敷地が加わり、教室施設面の整備や体育施設の整備拡充がはかられた。

沖縄の施政権の返還後は、体育館、特別教室なども建設され、東村における義務教育は目醒しい進展をみせた。村、地区、県、九州地区、文部省の研究指定校になり、教師の研究活動も盛んになり、児童生徒の中から賞を受けるものが著しく増えてきた。体育面でも、

県大会で新記録を出して優勝し、また九州地区で上位の成績を挙げる者も育ってきた。村内3校の高校進学率も高まってきた。

4 義務教育以外の教育

昭和16年（1941）の国民学校令が公布される頃から、村内の各字に幼稚園が設置されるようになった。しかし、その頃の軍国主義的時勢が反映し、国民総動員体制の教科に即応した幼稚園教育が行われた。更に太平洋戦争に突入する頃からは、幼稚園の戦時体制化が強く要望され、幼稚園のもつ教育的機能よりも、生産増強に伴う勤労家庭のための幼児保護が重視される傾向が強かった。

終戦翌年の昭和21年（1946）になって、東初等学校と有銘初等学校に幼稚園が併置された。その頃は、幼稚園に使用する建物がなく、園児は木陰や広場で指導を受けた。教材や教具もなく、戦後の復興に精励する父兄に代って子守の役目を果すのを第一義とする傾向であった。

昭和51年（1976）に東小中学校敷地内に、幼稚園々舎が落成した。有銘小中学校の運動場が新敷地に移設された。学校敷地にゆとりができたので、有銘幼稚園園舎が新築された。

大正15年（1926）に「青年訓練所令」が施行され、村内各校に青年訓練所が併置された。訓練期間は4年、16歳以上の男子を入所させ、全国一斉に青年に対し訓練がおこなわれることになった。指導員には小学校教員と在郷軍人が当てられた。

青年の訓練は、小学校の放課後におこなわれ、青年たちは日常の仕事を早めに終えて訓練を受けた。訓練期間は4年、訓練時数800時間のうち400時間が軍事教練に当てられた。なお、青年訓練所は昭和9年（1934）に廃止された。

昭和14年（1939）、「青年学校令」によって青年学校が義務制となった。これは村内の小学校に附設されたものであった。小学校の男子が引続き青年学校に進み、7年間にわたって教育を受けることになった。しかし、昭和16年の国民学校令公布によって、青年学校普通科が廃止され、本科5年の義務制が昭和20年に完了する予定であったが、第二次大戦のため中断された。

昭和23年（1948）に、戦前の青年学校の後を受けて、沖縄の各地に青年実業高校が設置された。同年4月、東実業高等学校が川田のヌンガニクに設置され、初代校長に金城珍徳が就任した。しかし制度の終えんにともない、わずか1年後に廃校となった。実業高校は職業教育を目指した教育課程が組まれたが、小学校を卒業してしばらく学業を離れていた者が偏入学したりしたので、教育上の問題が多かったようである。廃校にともない教師は村内の初等、中学校へ配置転換された。

歴代校長

代	氏 名	年 代	出 身 地
初代	国 吉 太 郎	明治21年～	那 覇
2	小 西 (不 詳)	不 明	不 明
3	井 田 (//)	//	//
4	永 井 (//)	//	//
5	平 良 清 助	明治30年～明治34年	大 宜 味
6	安谷屋 忠 作	明治34年～明治35年	久 志
7	甲 東 秀	明治35年～明治39年	鹿 児 島
8	嘉 数 宜 栄	明治39年～明治41年	本 部
9	原 秀次郎	明治41年～大正 5 年	佐 賀
10	新 城 源 徳	大正 5 年～大正11年	今 帰 仁
11	岸 本 幸 松	大正11年～大正15年	名 護
12	宮 里 善 助	大正15年～昭和 3 年	久 志
13	宮 城 定 蔵	昭和 3 年～昭和 5 年	国 頭
14	比 嘉 福 吉	昭和 5 年～昭和11年	東
15	新 垣 宜 昭	昭和11年～昭和12年	首 里
16	比 嘉 良 和	昭和12年～昭和14年	本 部
17	大 浜 信 光	昭和14年～昭和18年	石 垣
18	伊 波 寛 永	昭和18年～昭和21年	名 護
19	金 城 珍 徳	昭和21年～昭和22年	東
20	金 城 徳 明	昭和22年～昭和23年	豊 見 城
21	上江洲 知 徳	昭和23年～昭和27年	具 志 川
22	当 間 賀 助	昭和27年～昭和32年	浦 添
23	吉 田 賀 盛	昭和32年～昭和37年	浦 添
24	吉 田 善 昌	昭和37年～昭和42年	仲 里
25	平 良 景太郎	昭和42年～昭和47年	大 宜 味
26	山 内 昌 敬	昭和47年～昭和50年	今 帰 仁
27	田 端 景 雄	昭和50年～昭和55年	宜 野 座
28	比 嘉 敏 雄	昭和55年～昭和58年	名 護
29	玉 城 誠 栄	昭和58年～昭和61年	本 部
30	金 城 昂	昭和61年～平成元年	東

回 顧 錄



思い出の記

金城政信

拝復

猛暑の候皆様方には益々御清栄のこととお喜び申し上げます。さて先達って依頼されました思いでの記について私しなりに次のことが記憶に残っていますのでご報告致します。

先ず歴史の変遷について私は大正5年川田尋常小学校へ入学し、大正13年同校高等科を卒業（5期生）当時校舎瓦葺1棟3教室に6学年3・4年生は西側、5・6年は中央の教室で高等科であった。東側に職員室、北側に校長住宅と井戸、西側に便所、西北の高台に実習地があった。西南に茅葺1棟土間（1・2年の教室）校庭はせまく運動会是一周して100米、コース造りの材料の縄とクイは上級生の持参でした。学校で使用する水はすべて井戸水を使用していた。次に生徒の服装、食事、通学について、服装は男女着物でノーパンのはだし。昼食について平良、宮城、川田、福地の生徒はおかずなしの芋食、川田の生徒は家に帰り食事していた。通学路について平良の生徒は福地川に橋がなく下を渡り又は渡し舟を利用、川田上原の農道を通っていた。宮城の生徒は浜道を通っていた。学校までの5、6ヶ所の川には橋がなく、魚・伊是名の生

徒は道のりが遠いため遅刻、欠席する生徒も多かった。当時各家庭には山羊4・5頭、豚1・2頭飼っている家が普通で、豚3・4頭に牛1頭飼っている家は少なかった。川田の生徒5・6年以上は登校前下校後の毎日2回かゝさず草刈、日曜日には山、畑仕事の手助をした。当時の職員数は8名、内女の先生3名でした。校長の給料は60～70円でした。分村当時東村には天銘尋常高等小学校、川田尋常高等小学校、高江分教場の3校で分村以前の学校の運動会には2泊3日で大変な大仕事でした。私しも瀬高の久志校で1回、嘉陽校で1、2回参加した事がありますが、出発の合図は鉄砲を使っていた。

生徒の遊具はロクボク、鉄棒、飛箱、マリーに、自家製の竹馬、女子は自家製のマリを使ってよく遊んだ。特に鉄棒での機械体操、ケマリ、飛箱、竹馬、女子はまりつき等の遊びが盛んでした。次に社会、経済、文化について、大正年間から昭和の初期迄は1日の労賃は上で50銭で、その上、税金は村税、地租割、家屋税、特別地税、国税等税負担が多く苦しい生活で税金の未納者が多く、教員の給料も2・3ヶ月分も未納する事もしばしばであった。分村以前から

分村後の人口の多かった字順は 1 有銘、2 川田、3 高江、4 平良、5 宮城、6 慶佐次の順であった。したがって村議の割当も有銘 3、平良、川田、宮城、高江各 2 名、慶佐次 1 名で計 12 名の村議は各字で推選されそのまま村で選任されていた。議員は無報酬の名誉職とされていた。東村の分村当時の村長の給料は月 40 円、助役 35 円、収入役 33 円、書記 30 円以下の 7 人の職員に使丁 2 人でした。又当時の生徒には学校での成績も良い生徒も多数いたが、家が貧しく中学以上の学校へ進学出来ない生徒もいた。

次に校地拡張について、昭和 30・31 年当時の校長当真賀助、私が P T A 会長の時、東側の森を取りこわし拡張する事に決定し、当時米軍以外にブルのない時期でしたが、幸い高江の部隊のブルを借る事が出来、米軍の兵隊数名で 8 日かかりで取りのぞき、これまで低かった校庭も 1 米ほど上げる事が出来、更に西側の福木の太木も 5・6 本取りのぞき、やっと待望の 100 米の直線コースが出来た。戦後中学校が別でしたが、合

併問題がもち上り川田、宮城両区は合併に賛成し平良区が猛烈に反対し数回の会合でも決定出来ず、一度平良の常会に当真校長、珍徳校長、私 3 名が呼び出され長時間やりあったが話し合は物別れ、ついに当時の古波蔵文教局長を招いて合併について講演をしてもらい、やっと合併が出来た。又西側の石ブロック積み校舎の屋根瓦が落ち屋根の葺替に 3 区の父兄を動員し 7 日かかりでやっと瓦の葺替が出来た。P T A 会長だった私にとって以上 3 つの問題は一生忘れる事の出来ない大仕事でした。最後に 80 周年記念事業で北側への校地の拡張、其の後の運動場拡張、今回更に 100 周年の記念事業で残された学校の諸施設が解決され戦後わずか 40 ケ年の歳月でこのように発展を続けてきた事にはたゞ感心するのみである。そこで昔とくらべあまりぜいたくすぎてどうかと思う事が少なくありません。以上思いうかんできた事をあらまし記して思い出の話を致します。

昭和 63 年 8 月 2 日



思い出の記

玉 村 弥 吉

私は大正 10 年 4 月東小学校に入学昭和 4 年 3 月卒業、以来 59 年の歳月を経ているこ

とに今更乍ら驚いている。今回の創立 100 周年記念に当り幾多の人材を社会に送り出し

たことを憶うとき感無量を覚えるとともに心から敬意と祝意を捧げるものであります。

十年一昔の諺からすれば59年は中昔かも知れない。然し乍ら当時のことを懐古するとき、いろいろなことが次ぎつぎと浮かんでくる。その思い出の一端を記して見たい。

1、校舎の状況……当時の1、2年の教室は、茅葺の假校舎で両側の窓は半窓で戸も無く、土間に机腰掛を並べただけで冬は寒さに震えていたことを覚えている。その当時の受持ちは宮城栄昌先生であった。3年以上の校舎は木造瓦葺であったので早く3年生になって本校舎に入りたいというのが夢であった。

2、複式学級……当時3年以上は複式学級で先生の数も校長（宮城定蔵氏）以下6名であった。今にして考えて見ると先生の負担が如何に重かったかが思いやられる。生徒の在席数は240～50名位と覚えている。複式学級では、地理歴史は同教科書で一緒に勉強した。私達の場合は5年のとき6年のものを勉強したので一番困ったのは歴史の年代によく錯誤を生じたことである。この弊害は卒業後もたたった。

3、服装、学用品……「芋にはだし」の表現どおり当時の経済不況は著しく生活程度は一般的に低レベルで肉類はおろか白い米の飯は節日以外^{シチビ}は口にすることもできなかった。

服装は1年から高等科まで着物に素足^{ハダシ}（別添卒業記念写真参照）で、4、5年まではノーパンツで校内運動会だけは真新しいシャツとパンツを着けて得意がったのを覚えて

いる。私は兄弟7名で絶えず3名位在学していたので、硯、ソロバン、クレオン等は殆ど共用であったので授業が重なった時は泣き面に蜂であった。

4、学業以外の日課と家庭学習……朝の登校前と放課後は山羊の草刈りが日課で日曜祝祭日は主として家族とともに山稼ぎ或は稀には草刈りで、雨の日以外、家で勉強することは殆どなかった。

1時期川田では通学団を結成東中西の3組に別かれ朝の登校は団旗を先頭に団体でなした。それは遅刻欠席をなくするため学校の指導によるものであったと思われる。家庭における学習は殆どなかったと先に述べたが晩は各通学団全員が学習会（字事務所）に参加して勉強したものである。石油は字に設置された学事後援会の提供であった。（当時勿論電機はなかった。）

5、方言札

或時期標準語励行の見地から方言札の制度があった。勿論学校内におけるもので違反したものは掃除当番という制裁があり、方言札を持った者はあらゆる方法で次ぎの違反者に札を渡すりレー式であった。或日の休み時間に1期先輩の某氏のかけた罠にかかり「アッサビヨー」と云ったとたん「やったやった」と隠し持った札を渡され掃除当番させられたことは今も忘れられない思い出である。

6、文集あづまの発刊、修学旅行

高等科になって師範学校を卒業して間もない新進気鋭の金城珍徳先生の担任当時文集「あづま」が発刊された1、2回自分の

作文が掲載された覚えがあるが、いつまで続いたかはよく判らない。

卒業を間近かに控え、卒業記念に修学旅行が行なわれることになり旅費の払い込み期日も迫ったが肝心の旅費がなく半ば諦めていたところ中南部の議員団が北部一周の旅行に来た。それを知った父は険しい山道を重い荷物を担ぎ4日間の労賃4円で間に合せ期待の旅行に参加できたときの喜びは、たてようがなかった。

旅行は尋常科6年と高等科2年の約56名で、生れてはじめて那覇市内、軽便鉄道の見学等思い出は多い。行程は往きは宜味村津波からバスで帰りは東巡りで久志経由5泊6日と覚えている。

7、課外勉強

卒業も2、3ヶ月に迫り学校では極力上級学校への受験を奨め受験者には課外勉強を特訓した。父に極力頼んで勉強を続け愈々受験の段になって家の経済事情では無理だ断念せよと云われ急にがっかり、涙がこみあげたが一言も反論はできずあきらめた。

8、昭四会の結成

卒業後「昭四会」の名で同期生会を数回持ち金城珍徳先生を中心に懐古談に花を咲かせたが先生は去る2月突然ご逝去され悲しい限りです。今はただご冥福を祈るのみ。

同期生は卒業当時30名程いたが奥浜正雄、宮城栄進、浦崎直次等活躍を期待された諸氏が多数亡くなり、一沫の淋しさを覚える今日この頃である。残った同志で今後も昭四会は続けていきたい。



思い出の記

池 原 貞 雄

入学の頃の施設

私が東尋常高等小学校に入学したのは、今から65年前の大正12年(1923)であった。当時の児童の服装は、着物に帯を締め、足にははなにも履かず裸足のままであった。校舎は、木造瓦葺1棟(職員室、校長住宅、3教室)と茅葺仮校舎1棟(2教室)だけであった。1年生と2年生は、茅葺の二つ

の教室に収容された。仮教室は高窓にはなっていたが、戸はなく吹きぬけのままで、床板のない土間に机と腰掛けが並べられているだけであった。そのため、大雨が降った場合は、雨水が教室の中に入らないように、教室のまわりは盛土がされていた。

運動場は、現在の下運動場の半分ほどの広さしかなかった。運動施設としては、

ろく木、鉄棒、砂場、テニスコートがあるだけであった。運動会の徒歩コースは、杭を配置して打ち込み、それに縄を張りめぐらしてつくられた。スタートラインは卵形になっている徒歩コースの中心部にあって、太鼓の合図でスタートして出口の柱を廻ってコースを走った。

教科と教科書

小学校1年の教科は、国語、算術、書き方、唱歌、体操の5科目であったと思う。たしか、4年になると理科が加わり、5年から歴史と地理が加わったと記憶している。そのほかに、修身と綴り方という科目もあったが、何年生になってから学習を始めたのか、はっきり覚えていない。

私が1年のときに使われていた国語読本の中には、次のような語句が記されていた。ハナ。ハト。マメ。ミノ。カサ。カラカサ。カラスガキマス。スズメガキマス。ウマガキマス。ウシトウマガキマス。以下略。先生からその読み方、書き方、その文字の示す物を教わった。入学前に字が読めたり、数字が書けたりする子供はまれであった。標準語が話せたり理解できる子供は殆どいなかった。2年生、3年生になっても、学校で方言混じりの標準語を使っても、家に帰れば方言を使った。

学校には、オルガンが1台しかなかった。その1台が職員室の廊下に置かれていた。唱歌の授業があると、7、8名の児童がオルガンを支えて、自分たちの教室に運んだ。低学年の場合は、教室が離れた仮教室であ

り、又、体が小さいこともあって、オルガンの運搬は高学年が受けもっていた。アリが餌を運ぶように、大勢の児童がオルガンにたかって運んでいた光景が鮮明に思い出される。

学校行事

学校で行われる年中行事はいろいろあった。国家の四大節の式典、卒業式、運動会、学芸会などが大きな行事であった。運動会以外の大きな行事のときは、瓦葺校舎の3つの教室の間仕切りの戸を取り払って広い式場が作られた。そこに全校の児童生徒、父兄、来賓、一般参列者が集まった。高等科の教室の壁には奉安殿があって、そこには、天皇・皇居后陛下の御真影が奉安されていた。四大節の式典や卒業式には、奉安殿の扉が開かれ、校長先生が礼服を着けて白い手袋をはめ、教育勅語を朗読した。勅語に述べられている内容の理解はできなかったが、みんな姿勢を正して慎んで拝聴した。

学校行事の楽しい思い出の一つに遠足がある。先生や友達と連れだって、まだ行ったことのない土地へ歩いて行ったことが忘れられない。その頃遠足で行った所は、魚泊、伊是名、有銘、塩屋などであったと思う。

ふだんは、1日3食とも芋をたべることが多かったが、遠足には御飯の弁当が食べられることが、遠足を一層楽しいものにした。目的地について、いよいよ昼食の時間になると、気の合った数人ずつがグループをつくって車座になって坐り、胸を躍らせ

ながら弁当を開くのであった。カーサーパー（芭蕉の葉を火であぶったもの）の独特の香りが食欲をそそる。思いきりかぶりつくと、鯉節の削り片と味噌を混ぜたおかずの味が、弁当を一層おいしいものにしてくれる。遠足で食べた弁当の美味しさは、終生忘れることはないだろう。

家庭学習

学校からかえっても、明るいうちは友達と自由に遊べなかった。家畜の飼料になる草を刈りに行くか、弟妹の子守をしなければいけなかったからである。夜になって勉強しようにも机は無いし、石油ランプを独り占めにすることもできなかった。どうしてもやらなければならない宿題などがある場合には、ランプに近い床の上に腹ばいになって読んだり書いたりする外無かった。



思い出の記

昭和6年3月尋常科卒業
玉 城 幸 男（旧比嘉）

父の転勤で6年生の時国頭村辺野喜小学校から転校して6年生に転入、担任は亀谷長喜先生で、一風変わった、奇言奇行の多い人手であったが9月には高江分教場に転勤となり、金城松三先生（金城昂先生の父さん）が担任と変った。当時は校地も狭く運

しかし、幸いなことには、入学する以前から、川田では夜間に復習会という勉強会が続いていた。夕食後、学校の仮り教室に下級生から上級生にわたる希望者が集まった。そして、幾つかのグループに分かれ、学校で教わったことを復習した。教えたり教わったり、自学自習に励んで、学校で教わったことを十分理解するように努力した。このように、毎晩復習会に交じったことが、今日の自分を育てた土台になったと思われる……。

自分の東小学校で学んでいた頃に思いを馳せ、母校の輝かしい100年の歴史を偲ぶとき、誠に感無量なるものがある。これまでの母校の100年の歴史がそうであったように、これからの母校の歴史が輝かしいものになるよう祈って止まない。

動場は一周100米に足りない程であったが校庭にはがじまるや「うすくうがじまる」（あこう）があつて私達餓鬼どもには適当な遊び場であった。放課後ともなると今のようにスポーツが無い頃なので木の上は「頭さわり」の時は最高の陣地であった。体育用

具や備品も少なく、オルガンは学校に一基しかなく唱歌（音楽）の時間には当番がかつぎに行く程であったが、教育熱に燃える先生方の指導には自然と畏敬の思いが湧き学校では今のようないじめ等と言う陰湿なことはなく、上級生は下級生の面倒を見てくれた。

運動会になると各字対抗陸上競技があって放課後は日没まで練習にかけまわり疲れ切って夕食後の勉強に居ねむりと戦った思いが残っている。そう言えば当時（昭和5年）字対抗リレーで川田から高等科2年の比嘉善雄氏（戦死）高等科1年比嘉貞男氏同じく比嘉利男氏（現新城利男）それと小生の4人で走って優勝した。後の3人は戦後も健在で村大会、辺土名地区大会また地区代表で第1回全島大会でリレーメンバーとして走り、今なおスポーツを続けているのはあの当時のスポーツの感激が人生観の確立に大きな影響を与え、今なお小生は生涯スポーツに生き甲斐を感じ「人生即走也」を座右の銘にしている。遊びの中で一番印象に深いのは「けまり」であった。先生方のテニスのボール拾いをすると空気が漏って使用不能になったボールがもらえた、それをけまり（ゴールの無い簡易サッカー）に使った。ジャンケンで勝った方がキックオフ（蹴始め）する。守備側が「ねがーい」と言ったら始まる。相手側後方のバックラインにボールがつけば1点である。規則はサッカーに似ているので校舎の床下に入った場合はもぐりこんで足でひっかけて出したり、がじまるにかかった時も枝先まで行っ

て足でゆすってボールを落して続した。本式のサッカーと違うのはフライボールは手でキャッチ出来るし、そのボールを蹴上げることがゆるされた。当時は素足で、小さいボールを蹴るので足先は左右交互に傷だらけであった。学芸会は運動会と同じく強く心に残る行事であった。学芸会は今頃のように学期途中でやるのではなく卒業式当日で式終了後に行なわれ、演技の内容もさることながら、当時は小学校を卒業して上級学校（中等学校）へ進む人が少なかったので卒業すると別れ別れになり以後なかなか顔を合す機会がなかったので卒業式の歌（長き年月）や別れの歌（螢の光）を歌う時は惜別の情がこみあげて涙にくれて声が出ない程で、同期生や上級生との別れのつらさで胸が一杯であった。そのために学芸会ではその心情を込めての演技もあって真に迫った演技は皆んなの心を引きつけていた。今どき起る校内暴力や、いじめの話を聞くと、教育活動の盛んになった今日「教育とは何だろう」と問いたくなる。生存競争のはげしい現代社会で、ルールに従った望ましい「競走」は必要だが、相手を否定し、相手の抹殺を考える「斗争」の社会に変って行く社会人を育成して行く現代の教育はどうしたものかと思う今日此の頃である。

当時は経済的、物質的面で恵まれない時代であったが人間性豊かで本当に周りの人に気を配る真の心の平和な時代であった。口先で平和を唱える前に自分に近いまわりの人に気を配る心を育てて行きたいものだ。

当時御世話になった旧師の多くは故人となり、今年に入って長老の金城珍徳先生が記念式典を見ず他界されたのは残念でならない。

卒業以来57年間では御世話になった先生方や、校庭で走りまわった先輩方、親しく机を並べたクラスメートも戦死、病没で数少くなった今は、生き残った同窓の皆さん

と今は無き先輩、級友の分まで長生きして母校の発展を見守り、これからでも可能な限り故里の発展に微力を奉げたいと念じております。

ここ母校の創立100周年を迎えるにあたり21世紀にはばたく若人の巣立と限り無い発展並に同窓生の皆様の益々の御健勝と御活躍を心から祈念いたします。



小学校時代の思い出

昭和6年3月卒業

桑 江 常 盛

母校東小中学校の創立100周年をみんなで祝いましょう。

大正13年に東尋常高等小学校1年に入学した私の思い出

東村の学校はその昔、天銘校と東校、そして高江校は東校の分教場であった。

天銘校とは久志村天仁屋の生徒も有銘の学校に通学したので、天仁屋の天と有銘の銘を取って天銘校と名付けられた。

行政区域が平良であるのに伊是名部落の生徒が何故天銘校に通学したのかについて、その理由は、長老の話によると、川田の学校に通うには海岸の岸道を登ったり降りたり、それにシンガー川、スーカミ川、福地川の3つの川を渡らなければいけない。大雨で洪水になると大変危険であると言うの

が理由で、道路も良いし安全である天銘校に通学させることにしたとのことである。

東村が久志村から分村した翌年、大正13年に丁度私が1年生に上がる年に私達伊是名部落の生徒は東校に集団で転校になった。その当時もやはり川には橋がかかってなく、満潮時等水量の多いときにはウデナハに廻り道をしなければいけない、そのために学校は遅刻であった。川を渡るには帯を解いて着物の裾を胸の所までからげ、時には着物をぬいで丸裸になって渡ることがあった。先に男生徒が渡り、後から女生徒が渡るが、男生徒の中には意地悪をするのもいた。自分が先に渡って向う岸から女生徒が渡って来るのを見ている。見られるのが恥ずかしい女生徒は川の深見に入るにしたがって、少

しずつ着物の裾を上げていくが水面ギリギリに胸の高さまで上げていくのは大変であったようで気の毒でもあった。川を渡るときに上級生が下級生を肩車にして渡してくれた。又大雨で洪水のため川が渡れないと思われるときには川田の浜までお父さんやお兄さん達がくり舟で迎えに来てくれた。そのときは本当に嬉しかった。一生忘れられない。

当時の生徒の服装は男女共紺の着物にタマアIEWーピ小を締めて勿論パンツははいていない。ここでも男生徒が女生徒の後から裾をからげていたずらするのがいた。運動会等で走るときに女生徒は前がはだけるのを手でおうのに懸命であった。

私も5年生の年(昭和3年)から猿股(パンツ)をはくようになった。同じ年から学生服、それも国防色と言って一定したのを着せるようになったが、値段が高くて貧乏人にはすぐは買えない。金持ちの家の子が服を来て来るのを見て、大変羨しく思った。

学用品の習字紙や鉛筆等買うにも現金が

ないので、1銭3厘のメージ小をかついで行き、平良の共同店で金に替えて買うというのが実情であった。

教科書は自分で名護まで行って買って来るが貧しい家庭の子供は新しい本は買えない。兄弟達の読み古しや、他所の上級生から譲ってもらい間に合せたものであった。

毎日がイモ弁当で米の弁当は年に何回あったか、折目のときの残りのご飯を持って行くのが嬉しかった。

伊是名から川田まで4km近くの道を裸足でよく通ったもんだと思う。石につまずき生爪をはがしたのが何回か、私の足の人差指には爪はなく指先は曲っている。

昭和9年から昭和10年の間に平良から有銘間の県道が出来て、安心して通学出来るようになった。

1時期は10人以上もの児童生徒がいて大変にぎやかだったのが、現在では当真家の子供4名だけで当分増える見ともしないのはちっぽり淋しい。



思い出の絆

大正9年5月8日生

比 嘉 吉次郎

おいらの母校東小中学校創立100周年おめでとうございます。まさしく1世紀、その100周年の過程で全校生徒が裸足で通学を楽

しんだ昭和10年卒の存在を忘れてはおるまい。後一步で70歳になんなんとする我が同級生が殆んど故人となり、生存者は長崎で

高教員を定年退職した金子清栄(旧姓我謝)比嘉文治、平安文雄、比嘉フジ、田仲チヨ、桑江キヨ(旧姓)前田ウメ、伊集タケ、盛島ツル(旧姓)比嘉タケ、比嘉シズ(旧姓)姓不詳アキ等等に私まで13名である。人生80年時代というのに約30名の同級生から卒業後僅か50年余の間に半分足らずしか存在しないと人生全くはかなくむなしいものである。

さて絆の深かった我が同級生のありし日のあの顔この顔、更に先生の顔と顔、更に校舎校庭通学路福地川の自然プール等等、数限りない楽しかった思い出をまぶたに浮かべ、色々のエピソードを織りませ思いつくまま書いてみた。

三師の思い出

私達が確か5～6年生の頃だったかと思う、我が同級生担任の先生は現在千葉県にて御健在でいらっしゃる稲福剛明先生であった。ある日作文の時間でタイトルは確か「夢」に関係のある出題だったと憶えている。私の作文のできがよかったとの事で同級生皆の前で先生が読み上げて大へん好評を戴いた思い出はこの年になっても忘れられない。文面の内容は詳しく憶えてないが夢の中の行動で「月は光々と照りつけていた」云々の表言の使い方が先生に感動を与え好評を得たと思っている。人間誉め讃えられた事と恐怖に落ちいった事等はなかなか忘れ難いもので以来作文には興味を憶え非才を省みず偶に新聞投稿も続けている。又私の人生の大半を打込んで来た警察勤務中、見る、

聞く、臭う、触る、等のすべての事実を司法行政等の文書作成で片づけて来た公務生活にも大きく役にたって来たと思っている。

次は現東小中学校校長金城昂先生の父松蔵先生に歴史を教えて戴いた思い出を書きましょう。先生お得意の授業でした。歴史は昔物語りが主なので先生の温い熱のこもった教鞭はだれにも真似のできない手真似、足真似実に明快で興味津津そのものでした。全生徒の神経を先生の一部始終の動作一点に集中せしめる先生のうまい表現のしかたはそれはそれはとても愉快で実に楽しい時間でした。だから歴史の時間ともなれば皆が手を叩いて喜び先生を歓迎し勉強にも熱がこもったものである。又テレビで賑かな正邪と倫理劇で有名な大岡裁きの学会会をやったのも先生の御指導じゃなかったかと憶えている。

心温まる両先生とは対照的に「カメラ」と呼ぶ若い先生に短期間教わった事があった。カヤ葺き木造校舎だったから私達が2～3年の頃だったかと思う。この先生のくせは生徒の顔へのキッス、腕、太モモ等の握りモミ暴行でした。恐怖で習う勉強は恐怖しか残らないのは当然で学習が残るはずはありません。なにを習ったか全く憶えてないがしゃべりつつ生徒の側へ来て男女だれとなく二人坐りの長椅子の端に片尻をかけ、大きな口で生徒のホホをスポッと咬むようにしてスーッと吸い込むのです。又ある時は腕、太モモを握りモミするのです。大人が子供の筋肉をモミほぐすのだから多少の痛みはつきものでした。然し皆緊張し

ていたせいか我慢して泣く子はいませんでした。異状授業が長く続くはずはありません。先生は精神障害が因で免職になったとの事を後で聞きましたが、短期間とはいえ今となつてはお気の毒としか言いようがない。

初恋の思い出

着物に裸足通学の昔でも上級学校への進学意欲は今と変るものではなかった。師農水白線の帽章に長ズボン的高中男性、清潔感溢れるセーラ服の高女生、あのりりしい魅力的な高校生へのあこがれは一応だれもが考えたものであった。然し貧富の差のひどかった当時の世代では貧困家庭の子供には実力はあっても望み薄き高根の花でした。日本が戦争に負け民主主義の世の中となり一世紀待たず僅か40年で夢にも見なかった自家用車社会となったのも我々国民が日夜を賭して働いた賜物である。そして社会は色々の仕組みをかえたものの昔も今も変らぬ物は恋物語りである。私の初恋は確か高1だったかと思う。忘れもせん相手は人もうらやむ富貴な家庭のお嬢さんでした。ある日運動場で彼女から目の合図と態度で好きというしぐさを見せられ、初めて男女異性間の好き嫌いが判ったのもその時であった。その後困った事に彼女のアダ名を私に呼ぶ野蛮人が現れ、もし彼女の親兄弟に聞かれたら大変な事になるぞと心配していた矢先、彼女が〇〇高女へ進学したので物語りは短編で一件落着ほっとした次第である。

学校帰り偶然メンガニクで根イモ（取り

損いのイモ）を拾ってオヤツ代りにしていた小生には全く天に橋をかける身分不相応な彼女でした。然し今となつては悲しくも故人となり胸を痛め、ただただ冥福を祈るのみである。

自然プールの思い出

平良の生徒で通学途中最も楽しかった事は学校帰り福地橋下流での水泳であった。ボラの群集する清らかな流れで上級男性は橋の欄干からの飛び込みと潜水、女生徒と下級生は浅瀬で小魚やカニとたわむれ泳ぎの練習等、指先がしびれるまで長時間楽しんだものである。母校東校の水泳教室は福地川流域の自然プールで行われていたので泳げない生徒は殆んどいませんでした。然し雨季ともなれば沖縄一長かった福地川の急流はコンクリー橋をも破壊する大洪水に变身、学校に閉じこめられたままの破壊洪水に2度遭遇した事があった。頑強な縄を兩岸へつなぎその縄にテンマ船を固定し大人が縄をたぐって渡して貰った思い出は忘れられない。又大洪水と暴風の荒波で自然構築された平良港は満潮ともなれば水深約7～8メートルの広大な湖と化し絶好の釣り場で暴風時は地元は勿論高江、魚、宮城、川田、方面への生活物資輸送の山原船が数隻避難したものである。又季節には数羽のカモが餌魚を求めて飛来し油を流したような水面で敏速奇抜見事な潜水演技を私達生徒に見せてくれたのもついこの間のような気がする。

然し文化の流れには逆らえず、今となつ

ては見る方んねらん海びけいじ。さて原稿制限もあるし最後に一言、おいらの母校東校が千年も万年もこの地球のある限り繁栄

し続け、併せて我が後輩が国際社会ではばたかん事を祈念して筆をおく。



東校の思い出

渡嘉敷 直 勇

この度、東小学校が創立100周年を迎えるにあたり、心からお祝いを申し上げます。永い1世紀に渡り発展の一途を続けられた偉大なる歴史の重みに対し衷心より敬意を表すると共に、100周年記念事業の一環として記念誌を発刊されることに対し、時宜を得たご計画だと心から賛同する者であります。昔の格言に1年の計は元旦にあり、10年の計は樹木を植えよ、100年の大計は人をつくれとあります。我が母校、東校が1世紀の永い歳月に幾多の偉い教育者、政治家、実業家を産み出していることは申し上げるまでもありません。また、100年と云う永い時の流れは校名も平良尋常小学校から川田尋常小学校へ、次ぎに国民学校になり第二次世界大戦後になって東初等学校、東小学校と校名も変更になりました。

我が沖縄は、明治12年に琉球王朝が滅び廃藩置県で沖縄県となりました。明治、大正時代は不景気で働きたくても職場がなく殆どの人達が山から薪を切って束にして売っ

て生活をしていた時代であった。当時は人身売買も公然と行なわれていて、男子は12～3歳頃から平安座の山原船員か、糸満の漁夫へ前借金で売られた。女子も14、5歳頃那覇の遊廓に女郎として売られる者や農家奉公する者等生活が厳しく就学率は非常に低かった。

昭和になってから義務教育が強化され就学率も次第に高くなってきました。私は大正10年に小学校1年に入学し、昭和2年に同小学校を卒業しました。当時はランドセルなどあるはずがなく、メリケン粉の入った袋を解いて風呂敷にして教科書を巻き、肩から左脇下へ通し結んで持ったものでした。また、現在のように学校給食はなく、甘藷を2、3個手拭の先に包んで昼食として学校へ持って行ったものでした。勿論、当時は学生服などは無く短い着物で履物もなく裸足であった。学舎も下級生（1、2年生）は仮校舎の茅葺で雨が降ると雨漏れがひどく床板は敷いてない土間なのでそれ

こそ大変であった。学用品のノートや習字用の白紙、鉛筆等は学校から帰ると山へ行き、長さ50センチ位の本を5、6本切り束にして、翌日部落の共同店へ持って行き必要な学用品と物々交換が出来たので当時としては便利であった。

教科書は全部自費で購入するので新しい教科書を全部買うと金がかかるので、出来るだけ親戚等の上級生が使用した古い本を譲り受けて不足分の本だけ名護の本屋さんまで行き購入したものです。

その当時は乗合い自動車は小型で5、6名しか乗れなかった。区間も名護ー白浜(宮城島の向い)間で1日2往復であった。乗車賃を出すのも勿体なくて往復約30キロを早朝家を出て、名護で本を買い夕方には家へ徒歩で帰ることが多かった。毎日の生活が徒歩でしたので馴れていたせいかなそんなに苦労とは思わなかった。

川田尋常小学校になって以来、学区域の住民が営々として築いて来た汗の結晶も、

今時大戦で廃墟と化したのが、村当局はじめ学校職員、校区住民の絶大な協力により仮校舎が出来、逐次校舎校庭が整備され学校教育の基本施設が整ってきました。

大正から昭和の初期にかけての茅葺校舎と比較して現在は鉄筋コンクリート建ての素晴らしい校舎や体育館等近代設備が整った中で子弟を教育させることのできることは、私共父兄にとりまして誠に喜ばしいことであります。しかしながら、社会は1日たりとも停滞することなく進歩発展し複雑多様化して参ります。学校教育も同様であります。子弟の教育にはいささかの支障もきたさぬよう常に教育委員会、学校当局や職員、PTA関係各位が連携を密にして、100年の大計である人材づくりに遅れをとってはならないと思います。

願わくば今後とも幾多の英才が輩出されることと、益々の校運隆盛あらんことを祈念致しましてペンをおきます。



50周年卒業生の一人として

昭和13年3月卒業

宮 城 昇

私が東尋常高等小学校を卒業した年は、同校創立50周年目に当り、今盛んなマラソンに例えると丁度折返し地点での卒業であ

る。創立50周年といっても今の常識では、想像もできないものであった。教育内容とはかく、施設や教科書、服装等は今テレ

ビで見る開発途上国以下のレベルではなかったかと思う。

私の記憶では小学校3年までは茅葺きで、土の上に板を敷いただけの土間で、窓は戸もない吹抜けであった。机、腰掛けは二人用のもので、これも先輩が小刀等で傷をつけられた上に手垢がベツトリ付いたものばかりで、毎年一度は川田の浜まで運んで洗って使っていたものだ。

又教科書も進級前になると上級生の使い古しを譲り受けるのに苦労したものだ。例え運よく譲り受けても頁がなくなっていたり、表紙が破れていたのでは結局学校に注文するしかなく学校で纏めて自費で買ったものである。

生徒の服装も制服はなく、5・6年頃までは、洋服、着物が半々位ではなかったかと思う。パンツをはくのも上級生はともかく男生徒では半々位ではなかったか。なぜ私がそれを覚えているかというところ6年の学芸会の練習を終えて記念撮影をした。写真の中で私は着物を着けている。写真を撮る事になって私は「これは困った事だ、パンツをはいてくればよかったのに」と思ったが今更どうしようもない。後でその写真を見る度に恥しい思いをしたものである。着物を着けているので男の大事な物が見えるわけがない。ノーパンを知っているのは自分一人であるが、写真を見るたびに大事な物まで写っているようで独りで顔を赤くしたものである。(写真戦中紛失)

私が当校在学中の担任の先生一人一人については、どの先生と云わず、強い個性で、

燃えるような使命感を持っていたので、想い出と懐かしさで記せば限がないのでお一人の想いだけに留めておく。私が5年生の時の担任先生に桃原先生といって師範学校卒業直後のバリバリの新任先生が赴任された。朝礼の就任挨拶で開口一番「ライオンは可愛い子供を崖から突き落とす云々」である。生徒達にとっては突然「ライオンは」の言葉から始まったので吃驚して後の話しは覚えていない。声も大きく、面貌そのものも顎が出張って眼が鋭くライオン先生のニックネームぴったりの風貌であった。所が性格的には穏やかである反面、教師としては厳しい面もあった。私が郡のお話会に出る事になった。所が私の発音がまずいというので放課後、職員室の前の廊下に掛けられた大鏡の前に、机を持ってきて立たされ、陽の暮れるまで特訓させられたものである。特に50音のサ行の発音がなっていないというので、サ・サ・サ・シ・シ・シ等と、タンテハクルーか丸パンをどっさり買ってきて、これを餌に遅くまで練習させられたものである。

お話会に出た褒美として父がズックを買ってくれた。新品のズックに靴下もはかないまゝに得意になって登校した。所が1回の登校で踵や指が擦れてしまい、折角の自慢のズックも2度と履かなくなってしまった。

食事は薯が常食であり、学校の昼食も工作時間に自分で作った直径15糎位の小さな竹籠にサツマイモを、4、5箇いれて、おかずなしの弁当が普通であった。登校時には教科書を包んだ風呂敷包を肩から斜めに

背中に掛けて薯を入れた竹籠を手にブラ下げて登校したものである。下校時には皆の籠は必ず空になるのが普通であるが、私の籠はいつも満杯であった。学友達の薯の皮を一手に貰っていたからである。どの家庭にも牛や豚を飼っており薯の皮は大事な飼料であるが、4、5個の薯では大した量にもならない等という事であっただろうと思う。お蔭で父や母からは大へん悦ばれたものである。その見返りという意味も含めて、製糖の時期になると父母から砂糖の「ハタガー」（端皮）を貰いそれを配って残飯（薯の皮）のお礼にかえたものである。

毎年5月頃になると全校生徒が潮干狩をする。かねてから両親には「ヤトに足を踏み入れると吸い込まれる」と注意されていた。なる程ヤトを見ると美しく透んだ海水が、5、6米から10数米の深さの珊瑚礁に囲まれた深みが所々にあって、海外の潮の干満のたびにゴーと無気味な音を立て、満ちたり干いたりする。子供心にもヤトは怖い処だと思い込まされていた。

或時一緒に行った従弟の金城徳仁（故人）が生れて初めて蛸^{タコ}を捕って、興奮のあまり「デーチナトーシガ、テイヌタクヌ、バキグワア、カラマチ」と大声で応援を求めている。気も動転して「蛸の手」というのを「手の蛸」と云い間違たのである。これも後々まで楽しい思い出の一つである。

紙数も制限を越え、内容もなっていないのに貴重な誌面を与えて下さった期成会に感謝してこれで止めたいと思う。

さて折返し地点からの50年は、我母校にとっては戦災という、いまわしい事等もあったが、100周年のマラソンを走り終えた今は、競い合った学友の多くは幽冥鏡を異にしたとは思うが、この栄ある100周年を共にしたかったものである。

彼等も又、在学中は全力疾走したであろうから、それに報いる為にも、又、200年マラソンの第一歩を踏み出すに当り、吾々同窓生も側面からの協力と応援を惜しまない事を誓ってペンを擱く。



小学校の思い出

宮城魚泊出身

立 津 ツル子（旧諸見里）

私の幼き日の学舎東小学校は、川田の山の手、右側に村役場も見える小高いところ

にありました。校舎は、木造瓦葺きで教室は教員室をはさんで全部で7教室ありまし

た。運動場も幼い私達が運動するには十分な広さがあり、周囲には大きなガジマルの木も植えられており休み時間のときには木陰で、いろいろのことをして遊び、又運動会の時には、そこで家族と一緒に弁当を食べたものです。

当時、地方の小学校としては立派な学校でした。私の生れ育ったところは宮城魚泊です。昭和6年4月私が入学した東小学校は魚泊から6キロメートルも離れておりました。幼い私にとってこの6キロメートルの登校下校の道のりは大変なものでした。今は道路も立派に舗装されて見違える程になりましたが、私が小学生の頃の魚泊から川田までの通学路は、道幅も狭く坂もある山道で、雨が降れば泥んこで、学校へ着くまで何度かころび、膝をすりむいて泣いたこともありました。

私達宮城の生徒は学校への近道をするため、海浜を歩き、古島川を渡り、岩間を飛んで渡って通ったものです。当時は履物もなく真夏の砂浜は、足の裏は痛い程熱かった。又雨降りあとの古島川は水かさが増し、私は渡ることができませんでしたので、上級生の兄さん達の肩車で渡ることもありました。岩間を渡るときは、手をさしのべてくれて渡りました。

私達の同級生は女生徒が多かった。宮城からは男生徒3名、女生徒5名で、その頃の女の子は髪を長くのばして頭上に結うか、又は三ツ網のおさげ髪で通学したものです。

1年2年生の受持ちの先生は、仲松遙子先生でした。台風や雨降のときは時どき遅

刻することもありましたが、それを咎めもしないでそっと教室に入れてくれました。魚泊から学校までの道のりを考えて下さったのでしょう。仲松先生はやさしい先生で私は大好きでした。先生の言われることは何でもききました。幼い心にも遅刻したりする自分を少しでも良く見せたかったのでしょう。3年生の受持は比嘉福吉校長先生でした。校長先生にほめられると、学校が好きになり喜んで勉強するようになりました。4年生の時は仲村渠先生でした。先生は音楽の先生でもあり「オンチ」の私は大変こまりました。でも何とか皆について勉強しました。5年生の時は金城松三先生でした。上級生になると教育科目も多く、難しくなりましたが金城先生は良く解るように教えて下さいました。おとなしい先生で懐かしく思い出されます。

6年生の時は新しく赴任してきた桃原先生です。先生は「ライオン」は自分の子供を崖から突き落とし、生きるもののみを育てる。皆さんも良く勉強して誰にも負けない立派な人になって下さいと小学生の私達には、難しい挨拶をなさいました。桃原先生はきびしい先生ではないかと皆心配しましたが、きびしさの中にやさしさもありました。

6年間の小学校でのいろいろのでき事が走馬灯のように思い出されます。私が東小学校を卒業してから、50余年の歳月が流れております。山原の山河も変り、東村の里々も変りました。私が学んだ東小学校も創立100周年を迎えることになりましたその式典

が去る5月に関係者の御尽力により盛大に催されました。式典に招かれてみる東小学校は木造瓦葺きから、素晴らしい鉄筋コンクリート建の校舎に変わり、体育館や教育施設等も整備され、私が昭和12年に卒業した当時と、現在を重ね合せてみると、昔の面

影はなくあの頃を忍ぶよすがもない程に変わり、はげしい歴史の流れが感じられます。

東小学校は、時代の流れと共に、その姿を変えても幼き日に学んだ者達の心にのこる学舎として、いつまでもいつまでも、続いていくでしょう。



小学校時代の思い出

津嘉山 朝 松

私の卒業した東小学校が、今年で100年を迎えたことに、大きな喜びを感じています。東校創立100周年記念にあたり、わたくしの小学校時代の思い出を簡単に述べてみたいと思います。

私は大正14年2月21日に宮城に生まれました。東校は当時「東尋常高等小学校」と言っておりましたが、この小学校に入学したのは、昭和7年4月6日でした。この年に入学した同級生は38名でした。宮城から川田まで以後毎日通学したのですが当時は通学路などはなく、潮が引けば浜伝いに、潮が満ちれば山道を通って、裸足で通学していました。服装はほとんどの児童生徒は洋服をきていましたが、まだ3～4名は着物を着て登校していました。弁当は竹かごに芋を入れて片手にぶらさげて持っていました。

教科書、帳面などは、風呂敷に包んで肩にかけて持っていったものです。義務教育が終れば高等科まで進むこともできました。高等科は2年までで、授業は複式授業でした。当時の校舎は茅葺校舎と瓦葺校舎があり、1年生から4年生まではカヤ葺き校舎で5年生から高等科2年生までは瓦葺校舎で勉強していました。

運動場は一周しても100メートルくらいしかない小さなものでした。先生は7人、それに授業時間を鐘で知らせてくれる小使いさん1名がいました。校長先生も3年の授業を担当していました。当時は算数、国語、地理、理科、修身、体操、唱歌の7教科を学びました。思い出深いのはわたくしの時まで1年生の国語で最初に習ったのは「ハナ、ハト、マメ、マス」でしたが私の1年あとかからは「サイタ、サイタ、サクラ

ガサイタ」に変わりました。

家庭での生徒の仕事は薪取り、山羊の草刈や、川からの水汲みに明暮れていたのです。

創立100周年になった東校は全国の小中学

校にも負けないすぐれた教育と近代的な学校になっていることをうれしく思います。このような思い出の時代であったことを紹介し、思い出の記と致します。

回 想

宮 城 俊 登

創立100周年を迎えた我が母校東小学校に心からお祝い申し上げます。

私が東小学校に入学したのは、昭和8年4月、卒業したのが、昭和13年3月である。あれから星下50年が過ぎたことになる。時の流れとともに記憶も忘却の霞の中に遠ざかり夢見る心地がする。

当時の校舎は、運動場より一段上の段に建つ木造瓦葺の建物であった。その裏に校長住宅があり、またその裏は段状になった実習用農場が広がっていた。校舎の前は各学年の花園と、芝生と、玉砂利を敷き詰めた通路の部分が組み合わさってできた庭になっていて、風情のあるたたずまいであった。芝生の部分には桜、さるすべり、つつじ、椰子などが植えられていた。各学年割り当ての花園は、環境美化運動の一環として、先生、生徒が一体となって競って手入れに努めていたので、四季の草花が咲き乱

れ、私たちの心をなごませた。校門を入った運動場の左側には、ウスクー（方言名）の大木が2本あり、5、6米も枝を伸ばし全校生徒がすっぽり入る格好の日陰をつくっていた。この木陰は全体集会などによく利用され、また、生徒の憩いの場でもあり、休み時間ともなれば縄跳び、石蹴り、ビー玉、木登り、鬼ごっこなどの遊びに興じたものである。

宮城から学校までの通学距離は片道2キロもあった。当時は交通機関のバスもなく、従って徒歩での通学であった。2キロの道のりは、低学年特に入学当初の子どもたちにとっては誰かの助けが必要であった。朝8時、鐘の合図で協同組合（現売店）前の広場に集まり、上級生の引率で集団登校である。学用品を男の子は方から背負い、女の子は腰に負って、手拭いの端にくるんだ芋の弁当を腰にぶら下げ皆裸足であった。

この集団登校の習慣は、先輩から引き継がれた伝統あるものであった。自然に連帯が生まれ、いたわりの心が培われた。同世代の者が長じて今尚強い絆で結ばれているのも、この集団登校のお陰だと思っている。

大正7年から使用されていた国語読本「ハナ、ハト、マメ、マス」が改定されて、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」の初等科国語に代わったのは、私たちの1年のときからである。表紙も、さし絵も色刷りできれいな本であった。新入生の中にはうまく標準語を使いこなせない子も多かった。担任の宮里スミ先生は長い期間、標準語と方言を混じえながらの授業であった。先生も大変ご苦労なことだったと思う。この先生も若くして他界なされた。ご冥福をお祈りします。あれから50年たった現代の子どもたちは方言が使えないと言う。世の移り変わりにただ驚くばかりである。

当時は一般的に生活が貧しく、農家では子どもといえども労働力の一員であった。学校から帰ると、高学年は家畜の世話や草刈り、低学年は子もりなどさせられていた。このような毎日であったので、初等科時代私は勉強した記憶はあまりない。

5年の頃、与那国出身の入波平真栄先生が赴任されて私たちの担任となった。師範学校を卒業したばかりの先生であった。放

課後よく浜辺に連れ出され、郷里や特に師範学校の話しを5年生の私にたんたんと語ってくれた。私は上級学校のことについては何も知らなかった。全く他人ごとのように思っていた。しかし、先生の話に刺激され、次第に興味が沸き憧れの念さえ抱くようになった。お陰で成績も少しずつ上がっていった。後に、中学へ進学するようになったのも、あの時の先生の話が基に芽生えたものだと感謝している。

3年から6年まで音楽は仲村ツネ先生の担当であった。支那事変が始まる直前、まだ社会的には平穏であったが、そろそろ戦時色が広がろうとする時代であった。音楽の時間の度に軍歌ばかりくりかえし歌うようになっていた。その中で、当時の校長大浜信光先生の作詞で、宮良朝包作曲の「とまり舟」が5、6年の頃の私たちの愛唱歌として歌われるようになった。これは山原船を係留した港、那覇の渡地（ワタンジ）の情景を歌ったものである。軍歌ばやりの中で、こう言う郷土の歌を教材として扱っていた学校もそう多くはなかったのではないかと思う。印象深く残っている。

以上、思い出の拙文を記したが当時を偲ぶよすがともなれば幸いである。

母校東小学校の限りない発展を祈念します。



師 弟

玉 城 国 昭

(その1)

映画「二十四の瞳」は、舞台がかつての東校の規模に近いので都会出身の人よりも感慨が一しお強いと思う。それにつけても忘れる事の出来ない思い出は東小2年の担任だった恒先生のこと。ある夏休前のこと、皆があまりせがむので、女の先生には冒険である海水浴へ連れて行ってもらった。場所は川田の西側の浜サーン川の河口。当時川田の浜ではここが一番遠浅だったからだろう。準備体操がすんで海に入る前に先生からおへそより深い所へは行ってはいけなと強い口調で注意があったにもかゝらず、重盛君は自信があったのだろう、沖の岩に向って泳いで行ってしまった。途中で恐くなって引き返そうとしたけれど、その附近は潮流が沖に流れているので、沖へ沖へと流されて行った。クラスの皆が気付いて、先生に知らせようと浜へかけ戻ったが恒先生は早くも気付いていて靴をぬぎ捨てると、スカートをはいたまま水しぶきを上げて重盛君の所へ泳いで行った。私は恒先生が泳いでいるのを見たことも無いし泳げると聞いたこともないので、夢中で東の方の浜で薪を束ねている村の人達に助けを求めた。東の浜にいた村の人達がかけつけた

時には、ぐったりした重盛君を抱きかかえて先生はあがってくる所だった。爾来恒先生の担任を離れてからも、私達のクラスは恒先生に対する気持は全く変らなかった。勿論今でも。

(その2) 師 弟

戦前の東校では新学期早々に学校あげての潮干狩があつて、高学年は、イノーガマまであるいて行く事になっていた。当時高等科1年の私達は師範学校卒業して赴任して来た若さあふれる前城仁幹先生を迎えて初めての遠出だったので嬉しく楽しく飛んだりねたり喜び勇んで出掛けた。いよいよ湖が引いてリーフが海面から顔を出し、海へ入る時先生方は事故が無いよう、こまごまと注意を与えたが「我は海の子」達は先生の心配もどこ吹く風とくもの子を散らすように四方に散って夢中に獲物を追求めた。何かをみつける度に先生のところへもって行って見せ、自慢した。先生は遠く近く広がって行く子供達を把握するのに大変なのに、いちいち子供達の手柄をほめたり、注意したりした。特に学校を出たばかりの前城先生は慣れている他の先生方よりも緊張しているのが感ぜられた。私達のク

ラスは男女共海に強いのが多く獲物も他のクラスにくらべて一段と優れたのが多かった。そのうち「皆浜へ戻るように」との先生の声に自慢できる獲物の無い私はあせって、海水が入って歩きにくいズックを抜きハダシで行ってはいけないと注意されて沖の波打ぎわに向かったと天罰できめん、踏んだサンゴ礁が折れてハダシの足の裏を切ってしまった。勿論用意された救急箱で手当てはしたが、とうてい歩いて帰ることは出来ない。前城先生はクラスのせいとを他の先生に頼んで先に帰途につかせ、遠い歩みにくい浜を川田迄おぶって下さった。先生には誠に申し訳ない事ながら私は今でも若くたくましく温かい、前城先生の背中を甘く楽しく思い出す、これが師弟のスキンシップかと。

（その3）学校図書

私達の東校時代は、本は学校図書と云っても5年生の教室のうしろの壁に150cm巾位の三段の書棚があるだけで冊数は100冊もなかったし、年に1、2度新しい本が10冊前後入荷するだけだった。今の生徒のように

部活もないので新しく本が入ると放課後あらそって読みふけたので1週間位で読みつくしてしまった。その他には共同店の「家の光」という月刊誌と個人的に講読している方から月刊誌を借りて読むより他はなかった。でもどうゆうわけか月刊誌をとっているのは婦人の方ばかりでその婦人誌を読んでいるのでよく先生にしかられた。それで一計を案じおやじの蔵書の「金色夜叉」を放課後の読書時間に図書室である5年の教室に持込んで読んでいると、見廻りに来た、久高将徳先生（沖縄戦で戦死）が次の日から先生の蔵書を貸して下さった。お蔭で各先生方の蔵書や新刊書など貸してもらうことができた。特に須美先生は雑誌を買う時は「あんたが読むのを勘案して買うからね」と云われた時は感激した。今の生徒は、学校図書館、中央図書館と、とうてい読み尽せない沢山の本があるけれど、一方部活やら行事やらと読む時間が無い様子、しかしどんなに忙しい中でも若い感受性の豊かな時代に時間を捻出して読書をして欲しいと思う心や切。



思 い 出

新 垣 友 勝

一口に創立100周年と云っても現代の我々にとっては、あまりにも教育制度に懸隔があり簡単には割切れないものがある。100年前と云えば、日本に小学校制度が数かれ国民教育の開化を意味し、名実共に近代日本の端緒を示したものである。沖縄に目を向けたとき、あの頃は小学校の課程が2年であり数年後に4年修了の課程を辿り、しかも4年生を修了したら臨時教員にも登用されたと歴史は語っている。1世紀の栄光と変遷の思い出を語るには、あまりにも筆舌につくしがたい。輝かしい100周年祭典を迎えるにあたり歴代の先生方や地域の皆さん方のご協力とご苦勞、ご活躍に敬意と感謝を表し心から祝福を申しあげたい。将来に亘って尚一層健全な発展が築きあげられていくことを期待するものである。

私は、戸数4件で内福地部落と云う、山は青く深く水は清く自然にめぐまれた土地で昭和8年に生まれた。幼い頃兄姉と福地川でエビやウナギ取りに興じたことが今でも懐かしく思い出される。しかしそのめぐまれた自然の郷里も今は、ダムのため水深60米余の湖底に沈んでしまった。私が5キロ離れた東国民学校へピカピカの1年生として入学したのは、日本の社会状況が軍国

主義花ざかりで日中戦争勃発の昭和16年で、私達の目標や希望は、陸軍大將になることで父母や部落の達人達も皆それを望んで励ましてくれた時代であった。担任は、儀保セツ先生で女の先生であったが、私達暴れん坊には、「天仁屋崎までとって投げますよ」と口にする怖い先生でしたが、私が遠い所から通学するので普通遅刻するとその日の授業は、終るまで黒板の前に立って勉強するが常であったが、こっそりと机で勉強する様に励ますやさしい先生でもありました。現在の先生には見当らない広い心で個々の生徒の実状に合わせた指導方法を取られていたことには、今更ながら感動をおぼえます。私の家は「川を渡らなければ行けないところにあり道巾1米にも足りない山道で」大雨のときに遅くなったとき等、家へ帰れないときが多かったので同級の宮城茂君や宮里稔君の家によく泊めてもらったものです。両君の母は、自分の子同様に寝食の世話をみて下さった。今の時代と違って、子供は、国の子だという社会状況であったかも知れないが、これが国の母の亀鑑だったかと、いつまでも語り草にしたいし、感謝申し上げたい。卒業後37年余も経っているが、今もその契は、強く世間からは、3羽

ガラスと云われ月に2、3度杯を交わし変動激しい社会を乗り越える原動力にしている間柄である。小学校3年の頃、父母は、私達の通学の不便さを思い学校に少しでも近づけようと魚部落に家をつくり、そこから通わせた。魚部落出身の生徒は内気で引込思案で殆ど毎日遅刻、山学校をする者が多かった。それを見かねた儀保節子先生が、私の家に同居し、夜は勉強と生活指導、朝は一緒に登校するという今では考えられない使命感に燃えた先生の鏡の人柄が偲ばれる。その頃私達兄弟3人の世話一斉をみてくれたのは、現在も東に住んで居る2つ年上のトヨ姉であった。今考えると本当にすばらしい姉だと思う。昭和43年戦後の中学校卒業生が中心となり、同窓会を結成し、母校へ記念に体育器具室を贈ったことである。郷里を離れ中南部で活躍している先輩、後輩の一人一人の家を訪ねて同郷のよしみで話しに花を咲かせ、同窓の絆を一層強いものにしたことは、私にとって大きな財産となった。母校が広々とした敷地と、すば

らしく学園環境が整備された起爆材になったものと同僚の集い等では、しばしば話題となり自負し合うことがある。2年と4年担任の比嘉初江先生、頬ぺたがリングの様に赤いベニグァー先生、3年担任の宮城文子先生、色白で美人のナイチャー先生、めばえを感じさせる先生、6、7年の担任新城利男先生は戦後身も心も打ちひしがれ荒廃した時代に無限の可能性と社会の中に生きる道しるべを教えて下さった先生、8年担任の先生、玉城幸男先生、その弟で和信先生には、グランドの中における良きライバルの間柄について等、又先生ゴッコ等して楽しかった山学校の話しや、山モモ等四季折々の豊かな自然の果^{プレゼント}実の美味の話し等いろいろ書きたいことは山々あるが、紙面の都合上、残念ながら割愛する。自分が今日あるのは、頭も毛並もよくない私に、人の倍働く、努力する、人の情を大切にする、約束を守る、やれば出来るの精神をたたき込んで下さった諸先生方のご指導のお陰である。



思 い 出

奥 本 道 夫

昭和20年4月に1年生として入学すべきだったが、戦争と言う非常事態の為、山奥

へ避難させられ「トゥングーマガイやイナシワタ」の山小屋で終戦をむかえ、山から

降りると大宜味村根路銘部落に集められ一時期そこで生活することになりましたが、その時に根路銘上原の入口附近の広場にテント張りの仮校舎でABC「アルファベット」を初めて習った記憶があります。その後各々の部落に戻り、いち早く村民が学校の復興に立ち上がり、かやぶきの校舎を造ってそこに手造りの机、腰掛を入れて東初等学校の開校となり、私達も2年生として入学しましたが、しばらくすると3年生に進級と言う戦後の混乱期で教科書らしき物もなく授業と言っても浜辺の白砂やふく木の葉に字を書くという自然教育であった。そのうちに紙(セメント紙)、鉛筆、そしてHBTで作った半ズボンの制服支給があった時の感激は今も脳裏から離れません。4年生頃からは学校もだんだんと着着き教育、スポーツ面も盛んになり、玉城幸男先生、哲弘先生、祐憲先生方の厳しい御指導を受け、辺土名地区の野球大会で優勝した時のあの感動又、塩屋校との練習試合に行く時今まで利用している協同バス(トラックを改造した)で白浜まで行き、そこで辺土名行きの新型バスに乗りかえて、短い距離ではあったが、はしゃぎながらバスの窓から道行く人々に声をかけたり手を振ったりしてバスに乗るのが唯一の楽しみで今の飛行機の比ではなかった様な気がする。学級では男女のけんかもよくあったが、進君と2人で女生徒をいじめたと言う事で担任の幸子先生から2人、「足のスネで運動場を一周しなさい」という罰を受け、足の皮がはげ血も流しながらどうにか周り終えましたが、

その辛さは言葉では表現出来ない程で女生徒いじめの反省材料になっ。今問題のいじめとは違って明日からは親しく話しを交わすという程度のもので他の学級でも例外ではなく、今同期生会などで話題になっている。上級生になると「山入」があつて、山から薪を切り出して山原船に売りその費用で学校の生徒会費や備品購入の資金にあてていた。又、旧3月3日は「トウンジ」で潮干りをして海に親しみ、遠足は乗物を利用することではなく、玉辻へ登山をし、あの頂上で弁当を食べ東支那海と太平洋が一望でき、その帰りに「ゴンミキ」で泳いでウナギやタナガーを取った。あの大自然での出来事が小学校時代の最高の思い出として深く心に残っています。あのころの先生方もほとんどが村出身で、家の事情も良く知っていて、身内同様で悪ふざけや人いじめをしている生徒に対しては、ゲンコツやビンタが飛んでくるので今でいう非行問題などの悩みはそんなになかったのではないかと思う。ある日、学校で急に発熱して、目の前にいる人がおぼろげに見え、足もふらついて立つ事も出来ない状態で、隣の友達が見かねて担任の崎山礼子先生にそのことを申し上げると、もう少し我慢しなさいと言ってすぐには帰してくれませんか。そのうちに熱がだんだん高くなってきたので先生自から私をおんぶして家までつれていき、翌日登校時に熱もまだ下がらないが、先生が迎えにいらして「このくらいで学校を休むやつがいるか」と言うなり昨日同様学校までおんぶしていただき、気分を悪くしながら

1日中机の番をさせられた。その時は酷なことをする先生だと思ったが、御陰様で小中高の12ヶ年皆出席で表彰を受け、社会へ出て今日まで諸々の面でその教訓が大きな支えとなり感謝しています。私達の卒業昭和26年頃の卒業式では、皆出席賞、学業優秀者には優等賞が与えられていたので皆その賞をいただく為に一生懸命であった。東小学校での数々の思い出は筆には書きつく

せないほどであるが、学校を離れた後も、東山原の大自然で育った事を誇りにし心の支えとしています。ここに我が母校東小学校100周年を迎えるにあたり私達の世代は学制が初等学校であり、戦後初の入学者でしたので、記述の通りの思い出となりましたが、100周年を節目として21世紀にむけて益々の御発展を祈願致します。



思 い 出

吉 本 勲

「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」「ススめ、ススめ、ヘイタイススめ」は小1年こくごの文の一節である。

「母の背中で小さい手で振ったあの日の日の丸は……」「太郎さん、次郎さん、ごらんなさい、向うに見える軍艦は観艦式に行くのでしょうか、海軍強い日本国……」「今日も学校へ行けるのは兵隊さんのおかげです」等々は私達小学校低学年生の愛唱歌であった。

私達が東小学校1年生へ入学したのは、昭和16年4月でした。その学年度から学制改革により、東国民学校と改称された。

太平洋戦争の勃発で、全国をあげて戦勝ムードが高まっていた、入学した頃から男

子の将来の夢は、強い軍人になることであった。

3年生になってからは少年団へ入会し、「胸につけた真紅の若き誇りのこの印……」を斉唱しながら毎週少年団訓練と称した軍事教練(?)が行われた。

少年団は、平良分団、川田分団、宮城分団で組織されていた。

その頃から太平洋戦争も激しさを増し、朝会では大本営発表として新聞記事が紹介された。それには決って『本日〇〇方面で敵艦〇〇隻撃沈、敵機〇〇機墜落、わが軍に損害なし』と発表される事が多かった。それを聞く度に全校生徒で拍手をして喜んだ。

4年生、5年生の頃には日本軍の駐屯部隊が東村内にも多くなり、東校はその軍隊の兵舎として利用されることになった。

私達は、校舎を追われ、一時期は川田区の精米所、製茶工場（現共同店敷地）を借りて授業することになった。後に平良区の事務所（現公民館前敷地）へ学習の場を移し、半年ほどそこで学習した。軍隊の中には朝鮮人（現韓国・北朝鮮）も数十人いたが、食事が少なかったせいで、民家でサツマイモを貰って空腹を満す人も多く見られた。朝鮮人が民家で食事する現場を日本兵に目撃されると、その人は罰として一晚中校庭の桜の木に練られ、翌日は朝食抜きで働かされる事例も見られた。

太平洋戦争も沖縄決戦が間近にせまり、児童生徒を安全地域へ疎開することが計画され、私達の学年もその対象であったことから疎開する人員も確定して九州地方へ疎開準備が着々と進められた。いよいよ第一陣の出発が直前になって、対馬丸が撃沈された事で、疎開は中止を余儀なくされた。

その頃から、日常生活の物資も窮乏を究め、洋服も配給制であった。学年毎に抽選して、その券を持って名護で購入する状況であった。授業も学習の他、避難訓練や防空壕掘りなどに多くの時間がついやされました。

4年生の10月10日には沖縄最初の米軍機による空襲があった。

初めての敵機の襲撃でその日は休校となった。飛行機からの機銃を物珍しく広場や海岸に出て敵機とも知らず手を振っていた。

敵機だと知らされ、急いで防空壕に逃げたことを覚えている。

十・十空襲があつてからは沖縄決戦が現実のものとなり、昭和20年3月には校舎も焼かれ、その後は避難生活の連続となった。

太平洋戦争で、1年～5年生までの担任であつた恩師がひめゆり部隊で2人、その他3人の先生方が犠牲になったのが残念ではありません。

戦後は、焼土となった古里で、住居や食生活も事欠く中ではあつたが、教育に情熱を燃やす東校出身の先輩方のはからいで、平良、川田、宮城で木陰の下などを利用して、それぞれ学習活動が復活されたが、昭和20年12月からは東校敷地内にテント舎が建てられ、ソーメン箱を机代りに、地面に座して学校らしい授業が始められた。

その後茅ぶき校舎が建てられ、机、腰掛や教科書も整備されるようになって本格的な授業が行われた。小学校は8年制であつたが、昭和23年4月1日より学制改革による6・3・3制となったため、私達は新制中学校の2年生へ編入。一期先輩は中学3年生へ、一期後輩は中学1年生へ進級するようになった。

私達は小学校7年生から中学校へ編入された事で、小学校6年生の卒業証書はなく、東校歴史上唯一の小学校7年卒業生という事になります。

入学から卒業までの期間は太平洋戦の真唯中で、国家の富国強兵政策の下、敗戦という混乱する激変社会で小学校教育を受けた者として、戦争抜きには小学校の思い出

は語れない。それも東小学校の歴史の1ページとして御理解いただきたい。

母校の100周年を祝い、今後も関係各位の

御協力で21世紀を拓く人材育成に大きく飛躍する事を祈念申し上げます。



追憶の小学校

岡 本 妙 子

1942年川田国民学校へ入学した。

その頃、早起き会があった。鶏鳴と同時に集合、点呼、体操、清掃、朝読みがあって、蛮声を張り上げ「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」「ススめ、ススめ、ヘイタイサンススめ」と教科書の音読みをした。イモの弁当を提げ隊列を組んで登校したものである。3年の頃は部落一巡のランニングと竹槍訓練も加わった。共同売店向いの福木にトルーマンやチャーチルの藁人形を造り、「鬼畜米英撃ちてし止まん」と身構えた。天皇の赤子として兵隊と従軍看護婦になるのが夢であり、学校でも軍事教練が増えた。

運動場の真ん中にオルガンが置かれ、行進曲が演奏された。

ベルや太鼓が響き、大手を振り足を高く胸をはって進んだ。「組み組み前へ進め」から「駆け足前へ進め」へと号令は変り、照りつける太陽の下、目も開けられない程の汗を流しつづけた。緊張のあまり右手と右足、左手に左足になって鞭打たれる子もい

た。

あのオルガンを演奏されたのは、久高先生であり、ツネ先生だった。久高先生は召集され帰らなかった。ツネ先生は戦後の困難な学校に再度教鞭を取られたが間もなく病死した。入学式、お儀式のたびオルガンをじっと眺めては両先生に憧れた。父母に尊敬され、生徒に慕われたいかに多くの先生方が今大戦で命を失い心身を傷けられていったかはかり知れない。

防空壕掘り、避難訓練も日課になっていた昭和19年10月10日遂に敵機B29に追われて学校から帰された。宮崎への学童疎開が計画され山羊汁での壮行会も済んだのに、輸送船待期のまゝ翌年には米軍上陸、山奥への避難、捕虜になって根路銘に収容となり「第二次大戦」を生きのびたものの飢えとマラリアにあえいだ。

根芋を掘り、カタツムリを捕り、戦果もあげて空腹を満していた時「部落学校」が開かれ、文字通り青空教室で九九を暗誦し

た。

やがて平良への引き上げが許可された。焼けた家屋敷にはカボチャが実っていて飢えをしのいだ。共同のテント生活だったが、活気があったように思う。校舎は焼け、憧れのオリガンの置かれていた運動場は艦砲の大きな穴があき、青い水がたまっていた。オタマジャクシが泳ぎ、白い雲も映った。次に見た時には瓦が投げ込まれ干涸びていたようにも記憶する。米軍野戦用缶詰1個を弁当に持って、川田の護岸の木麻黄教室に通っては砂を運び、赤土を手から手へリレーして穴を埋めた。

ノミ、シラミ退治のDDT撒布、手足の垢を海で洗う衛生の時間もあつたし、学校裏の農場に野菜を作り、福地川近くに田植えをしては食糧生活に精出した。山入りをしては教室の柱、薪をかついだ。復興の作業は「生きる」そのものを教えてくれた。いまだに基礎的知識に欠けるところがあつて補いようもないが、野山を掛け、海や川の豊かな自然に育てられた感性は最も大きい。

そんなある日、ダブレス隊長のジープが来て、ララの配給物資やテント教室、教材をプレゼントされた。10カ国語を離すダブ

レスさんのジープには珍徳校長が一緒だったので安心して争って乗った。英語の習い始めである。ダブレスさんのジープを吹き抜ける風の爽快さは今も忘れられない。文明の象徴だった。敗戦民のギブミー精神を珍徳校長は警め誇りを持ってと論じ、ダブレスさんはフレンドシップ「対等」の関係を示した。お二人はあの世でも戦後処理のご苦労をなさっているのだろうか。

タマチジへの登山を思い出に東小学校を修了したのは、1948年新しい学制が敷かれ、6334の戦後教育がスタートした年である。父母手造りの茅葺き校舎、窓も床もなかったけど、新制中学1年として「ヌンガニク」に移っていった。学校の創設、生徒中心の運動会や演芸会、解放され、学ぶ喜びを知った。

川田国民学校から東小等学校へ名前が変わったばかりでなく、第二次世界大戦を境に軍国主義教育から民主主義教育へと変革されていた。その間の心象風景をいくつか拾って見たが、もう40余年の歳月が流れてしまい、心理的にも母校はあまりにも遠い。

100周年記念事業の成功と関係者のご活躍を期待します。



螢雪100年に寄せて

渡嘉敷 直 勝

東小学校創立100周年記念式典並びに記念誌発刊を心からお祝い申し上げます。100周年という記念すべきお目出度い年を迎え、その記念事業の一環として記念誌の発刊が計画されていることは、誠に時宜を得たことだと喜びにたえません。私にもその原稿執筆依頼があり思い出の一端を残したいとペンをとりました。静かに目を閉じると幼かった頃の事が次から次へと走馬燈のように懐かしく、思い出が頭の中を駆けめぐるばかりで、何から先に書いてよいやら戸惑ってしまうばかりです。1世紀にわたる永い歳月を考えて見るに我が母校東校は、これまでに何回かの戦禍や社会の変遷から学校敷地の移転や改築等数多くの試練を経て今日に至っています。しかし、それぞれの時代にあって素晴らしく発展してきた今日の容姿を観るにつけ感慨無量であります。

歴代学校長はじめ諸先生方、並びに村当局、教育委員会、校区住民、関係各位のこれまでのご尽力に対し感謝の念で一杯であります。この螢雪100年間には、社会の激しい変遷と紆余曲折を経て今日に至ったと思いますが、その間着実な歩みを続け、如何なる時代にも子弟の教育を大事にし、人材育成に努め教育の使命を果たしてきたわけ

であります。卒業生は県内外の各界において活躍され、多くの優れた人材を輩出していることは周知のとおりであります。

さて、私達が東小等学校へ入学したのは、敗戦後の昭和20年で、今から43年前であります。当時は去った第二次大戦の戦禍の傷跡が生々しく残っている頃で、校舎の瓦礫が山と積れ、運動場には爆弾の痕跡が2～3箇所大きな円形の穴をあけていました。このような状況なので、学校では授業を早めにきり上げ、校庭の整備作業が多くあったように思います。幼い私達には明確にはわかりませんが、校区住民や父母が奉仕作業を毎日交代でやっていたのではないかと思います。入学当初の児童であった私達も父母と共に校舎の屋根瓦や石ころを爆弾跡に運搬し投げ入れた記憶があります。その頃は教室にも不自由し、米軍払い下げの野戦用テントや校区民、父母の奉仕作業で茅葺きの堀立小屋が建られつつあったが、机腰掛け等、学校の施設教具はほとんどなく、校庭にうっ蒼と茂ったガジュマルの木陰や海岸のマクマオ林の日陰でソーメン箱を机代用に地べたに何か敷いて勉強したり、浜辺で思いきり遊んだ事等が恩師や級友の顔と共に、つい此間のように懐かしく私の脳

裏に甦ってきます。

当時は教科書は勿論のこと参考書もなく、ないないづくしの中で米軍から貰い受けた白紙や使い残しの用紙に先生が黒板に書かれたものを写し取って家に持ち帰ったものでした。

3、4年生の頃からは、運動場も整地され校舎も茅葺の掘立仮校舎が完備し、机、腰掛しも整えられ次第に落ちついて勉強やスポーツに取り組むことができました。その頃は農業の時間があって全校生徒で学校裏の畑で甘藷、大根、ニンジン、ジャガイモ等いろいろと実習で作ったものでした。家畜も豚や山羊等飼って当番で飼育しました。

茅葺の仮校舎は窓ガラスや床もなく、骨組も山原の山中から取出した丸太や角材を利用していましたので、休み時間や放課後は天井までよじ登り、鬼ごっこや顔さわり等して遊び、よく先生方にも叱られたものでした。その他の遊びではパッチー、ピー玉、コマ、点とり、縄跳やゴールマーサー、肉弾遊び等があったが、学校前の海へ友人3、4名でサバニを漕ぎだして遊んだり、中南部から木材や薪を運搬するためにきたLC T（上陸よう船艇）が打ち寄せる波の干満によってピツと張ったり緩んだりするロープにぶらさがったり、飛び降りたりするスリル満点の遊びで大いに冒険心を満喫したものでした。

このように、戦後の混乱期に少年時代を過し、物資不足の不自由な時代を多少なりとも体験したことで、たくましく生きぬく

力強さを自然に身につけた世代ではなかったかと思います。

個人的な事になりますが、小3までは遊ぶことやスポーツは人一倍多くやっていましたが、勉強はほとんどせず授業中も先生の話し等全く聞かず次の休み時間や放課後は何して遊ぶかと、頭の中は遊ぶことしか考えていませんでした。こんな私に勉強の大事なこと、勉強の仕方を教えて下さった先生が4年担任の知念絹子先生でした。放課後私を教室に呼んで2、3年生の国語や算数等を個人指導してもらったお陰様でどうにか少しずつ勉強するようになったと、今その頃を振り返りそのご恩に感謝しているところです。5年担任は玉城哲弘先生でした。先生は陸上競技の走高跳や200米が得意であった。村大会等では常に優勝していたので自分達の担任の先生が誇らしく憧れの的であったし、自分も将来は先生みたいになりたいなあーと子供心にも常々思ったものです。

6年担任は新城利男先生で100米のスタートダッシュは天下無敵で全島大会で大活躍された先生です。幼い私達にはジェット機のような速さで疾走する様は実に驚異であり羨望の的でした。

そのころは、現在みたいに完全給食ではなく、家から甘藷を2、3個籠に入れて来て、米軍のリバック物資のミルク給食とでお腹を満したものでした。地区大会の代表選手になると大会前には先生方が豆腐汁やミルク粉でカステラ等を作って食べさせてもらいましたが、そのときの美味かったこ

とは今でも忘れられない思い出になっています。また、学校で飼育した豚を屠って豚汁をお腹一杯ほおぼったことも忘れることはできません。食べ物について30年以上経過した今でも、これだけ印象強く残っているのは当時の食糧事情の悪さを物語っているのでしょう。それから、石造り2教室の屋根に、土を練り混ぜ、瓦をのせる作業を6年生でやってのけたことも尊い体験であったと思います。この石造りの真新しい校舎で勉強したことやミルク給食後担任の新城先生が毎日のように「マッチ売りの少女」等多くの童話の本を読んで聞かせて下さったこともよき思い出として心に残っています。

対外スポーツ行事では6年生の頃、辺土名地区で野球を優勝したことです。練習試合では有銘小に負けていましたが、大宜味小のグラウンドで行なわれた地区大会で決勝戦を宿敵有銘小に見事に勝ち喜び勇んで賞状を持ち帰ったものでした。

小学校時代の学校長は金城珍徳先生、上江洲智篤先生でした。当時は陸上競技も大変盛んで担任外では玉城幸男先生、池原幸男先生方がおられて放課後生徒や地域の青年達を指導してもらいました。私が今でも脳裏に焼きついてはなれないのは3、4年生の頃、当時久志村の嘉陽と川田区との対

抗陸上の際、平良茂先輩が1万米で運動場までもつれ込む大接戦を展開し、ゴール寸前で最後の力で振り切りテープを切ったかと思うとパッタリと倒れたときの光景は私のまぶたにやきついて今でもはなれません。人間の気力、体力の極限に挑む姿を目のあたりにし深い感動を覚えたものでした。このように地域の方々のスポーツに打込む真摯な姿にふれると同時に体育、スポーツの楽しさ、その妙味と持性を体得させてもらったお陰様で充実した少年期を過ごさせてもらいましたが、その頃から後々の自分の進路が決定づけられたような感が致します。

福地川の清流、風光明媚な大自然、そして人情厚き方々に囲まれ、素晴らしき恩師、よき先輩、友人に恵まれ直接、間接にご指導賜った小学校時代があったればこそ現在の自分があると常々感謝致しているところです。

おわりに、母校東小学校がこの100周年を期に益々発展し、有為なる人材を育成し、社会に貢献する教育の場たらんことを念願致します。尚、今度の記念事業を立派にやりとげられた学校長の金城昂先生、期成会の皆様に心から敬意を表し、同窓生はじめ関係者各位のご多幸を祈念申し上げペンをおきたいと思います。

100歳の東小学校

「わあ、きれいだあ。」

たいいくかんの中には、お花の100しゅう年がきれいに、かかれてありましたので、わたしは、びっくりしました。

それから、しらないおかおのおじさんたちがきて、パレードがはじまりました。それから、こうかや100しゅうねんのうたをうたいました。みんなのこえがいつもより大きくなったのしそうでした。わたしも大声でうたいました。

えらいせん生が、むかしのお話をしました。えらいせん生は、いけはらせん生という人で東小学校のせいとだったそうです。しらないおじさんたちは、いけはらせん

東小学校2年 みやぎ いつか

いのことを、よくして이었습니다。

わたしたちだけが、東小学校のせいとだとおもっていたのに、あつまった人たちみんな東小学校のせいとだったときいたとき、とてもびっくりしました。ふしぎでした。

わたしは、おとなになったら、ピアノのせん生になりたいとおもっています。つぎのおいわいのとき、みんなにピアノで、こうかやきれいなきよくをひいてあげたいです。

100しゅうねんは、学校もきれいになって、おとうさんやおかあさんやおじいさんやおばあさん、しらない人たちもみんなたのしそうで、よかったです。

100周年記念式典

東小3 城 間 樹

昭和63年5月29日、その日は、ぼくたち東小学校の100周年にあたり、きれいな花文字や、いわいまくでかざられたすばらしい体育かんで、記念式典がおこなわれました。先生方のパレードがおわったあと、午前10時、教頭先生の開式のことばからはじまり、つぎにみんなで、校歌を歌いました。

つぎに校長先生のお話があり、そのあとに、期成会長の池原貞雄先生から昔の東小学校のことをきかされました。昔の東小学

校は、かやぶきこうしゃで雨がふったら、こうしゃの中に水がはいってこないように、みんなで土をもりあげたそうです。

それから机もなく、木のはこをつかって勉強したそうです。そのほかにも、ぼくたちには、かんがえられない、いろいろな昔の話をきかせてくれました。

今のぼくたちとは、ぜんぜんちがいがいい、昔はたいへんだったんだなあと思いました。

今のぼくたちは、すばらしいこうしゃで、

勉強できて、しあわせものです。

昔の人に、まけずいっしょうけんめい勉強していこうとおもいます。

むかしの東校

私のおじいちゃんは、昭和8年に東じんじょう小学校に入学しました。

ちょうどその当時、学校はかやぶきの学校で、おじいちゃんのクラスは、約40名ほど生徒がいたそうです。

当時のざい校生は、350～400名ぐらいいたそうです。

おじいちゃん達が学校に登校する時、まずしくてむかしは、「かき」がないから、米の袋をかぶって登校したり、雨にぬれて学校に通ったこともあったそうです。

弁当は、おじいちゃんの家には、米がなくて、おかずなしに、いも弁当をもっていったそうです。

ノートも、えんぴつも買えない、貧乏者で、えんぴつは、人が落とした物をひろって、短いから、「しん」を取って、竹のつつに入れてそれで字を書くようなこともあったそうです。

消しゴムもないので、つばを指につけて、まちがえた字を消したこともあったそうです。

服そうは、おじいちゃん達まずしくて、洋服も買えない、3年生まで、き物を着て、学校に通ったこともあったとおじいちゃん

おいわいの紅白まんじゅうもおいしかったです。

6年 末 吉 奈 美

は、言っていました。パンツも買えない時代だったそうです。

色々運動する時、き物のそでを切れたりすることもあったそうです。

おうちに帰って、お母さんにさんざんおこられたこともあったと言っていました。

学校はまずしい学校だったが、みんなも生活がくるしいながらも、いっしょうけんめい勉強していたそうです。

ちょうど、おじいちゃんが6年生、(昭和12年) ごろ、戦争が始まってあまり、勉強できなかったけど、でもみんないっしょうけんめいがんばっていたそうです。 $\frac{1}{3}$ ぐらいが学校を卒業できなかった生徒もいたそうです。

むかしの先生方は、みんなにがんばって勉強を教えていました。

おじいちゃんは、なんとか卒業して、やっと字をよめるようになったそうです。

私のおじいちゃんが言いたいことは、まずしくて、あとに戦争が起こったけど、それでもみんないっしょうけんめいがんばっていた。と、いうことが、言いたいのではないかと思います。

〔90周年記念誌より〕

国民学校時代の思い出

東 江 律 子

私は、昭和16年4月、東国民学校へ入学しました。校庭には桜の木や、ガジマルの木が植えてあり、校舎は赤瓦とカヤブキの校舎で出来ていました。

春には、桜の花が咲きほころび、メジロやウグイスの小鳥達が「チョ、チョ、チョ」ホーホケキョと、美しい鳴き声で、枝から、枝へととびまわっていました。

桜や、ガジマルの木の下で、かくれんぼや手作りのまりつき、石けり、あやとりなどをして遊んだ想いでが、私の頭の中を走馬燈のようにうかんでいます。

この様に、静かで楽しい母校でありました。当時の先生方のあのやさしさ、又きびしさが今日まで、私をこの様にきたえてくださいました。今は亡き当時の先生方に心から感謝いたします。何時までも忘れる事の出来ない、宮里スミ先生、仲村ツネ先生の、美しい、ハカマ姿、お二人共美しく、とてもやさしい先生でありました。私達が1、2年生の頃久高先生や、宮里スミ先生のオルガンに合せて、さくら、さくらを歌った音楽の時間が、とても楽しく何時になっても忘れる事が出来ません。

当時は、今のようなりっぱなカバンもなく教科書や、ノートはフロシキや、手作りの手さげ袋などに入れて、新しい教科書をもらうとすぐに表紙をかぶせて、何時まで

も大切にして、弟や妹にゆずりあって勉強し、学用品や、色々の遊具を使えるまで使い物を大切にしてきました。

学校の机や、こしかけも何時見てもきれいに学校の近くの流れ川へ持っていき、洗って使いました。

尚、当時のべんとうは、ほとんどの生徒がイモに油みそのおかずでした。米のごはんはたまにしかありませんでした。米ごはんの時は、今日は銀めしだとうれしいやら、はずかしいやらで、なんともいえないおいしさでありました。

学校の帰り、道ばたの野いちごや、ギマの実をたべ、口を真黒にして帰り、母にこられた時もたびたびありました。お菓子もあまりない時代であったので、野いちご取りがとても、楽しい思い出の一つでありました。

学校から帰ると、たきぎ取りや、いもほり、ヤギの草刈りや、子守りなどをしてむだ遊びをする生徒は一人も見あたりませんでした。

夕方になると各班ごとに別れて勉強会、砂浜の上で国語の本読み、かけ算九九練習などを先輩の方々に教えてもらいました。毎朝未明に、起床ラッパの音に起され冬の寒いアラレの日でも、はだしのままで朝起会へ、みんなが集まるまで、大きな声で歌

を歌ったり、元気よくラジオ体操などをして「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声をかけながら、部落内や学校までマラソンをして行き、その後、部落の道路のせいそうをして、登校していました。

美しい松並木の道を通り、青々としげった平良川のヒルギ林、道ばたの野や山には真赤なツツジや、色々の花が咲きほころび私達の目をたのしませてくれました。

沖縄一長いと言われた福地川には、何時見ても魚や、カニ、エビ、くらげなどが泳いでいました。台風の時など、山原船が3、

4隻も停泊した立派な港でもありました。

私達は、こうした美しい自然環境にめぐまれて通学してきました。

小学校3、4年の頃から、私達の校舎へ早変わり、平良区の事務所が教室になりました。

その頃から勉強する時間はあまりなく、奉仕作業や、防空ごーほりなど、兵隊さんへの協力として、ツブブキ取りや、ススキを刈ってきて、タンブーづくりをしました。

それから戦争のため、私達はこの様にして国民学校時代をすごしてきました。

東校の思い出

吉 田 善 昌

私は1962年4月から満5ヶ年間東校に御世話になりました。今過去をふりかえって見ると、楽しくて気の張りつめた毎日でありました。それだけに数々の思い出がありその凡てがはっきりと浮んできます。

当時職員は22名で、つぶよりで熱意溢れる若い先生方が多く朗らかで活気に満ちていた。現在久高ふじ先生は退職後住いを那覇に移られお元気であるときく。新城利男教頭は校長に抜擢され、優秀校長として伊平屋校、国頭中校、瀬喜田校でその敏腕を振って立派な功績を残して昨年勲奨退職されました。他の先生方も教頭又は中堅教員として活躍している。誠に頼もしい限りである。私の在任中5名の縁結びがあった。おめでたい極みである。クバと木とまで縁

を結ばせた出雲の神も東校が気に入ったと見える。又苦楽を共にした仲村恒先生、宮城時正先生、宮城親孝先生が他界されたのは誠に残念、謹んで御冥福をお祈りする。

児童生徒は皆素直でありました。やんちゃはするが手に負えないような問題児は居なかった。赴任当時中学男生徒の長髪を短かく切るよう指導したら皆素直に切ってくれた。「校長先生話がある、長髪して何故悪いか」と職員室に入って来た中学2年のE君とじっくり話し合い納得してもらった事などが思い浮ぶ。卒業式の式終了後「有難うでした」と校長住宅を訪ねてくれたのは私に頑固爺の称号を送ってくれたやんちゃ坊の男生徒達であった。又魚の川で小学校の女の子が水難にあい幼い命を失い学校中が

深い悲しみに沈んだいたましい事故もありました。今思い出しても心が痛みます。安らかであるようお祈りする。あの頃の子ども達は今はひとかどの社会人として各方面で活躍していることだと思えると感入なるものがあります。

次に小学校々舎裏の傾斜面や職員室前中庭にも花壇を造り各学級に割り当て、校内花園コンクールを催すなどして花作りを奨励したので子ども達の関心も高まり喜んで花を育ててくれました。校庭には年中季節々々の花が咲き学校が一段と美しくなり、北部連合区や文教局主催の美化コンクールにも優秀校として表彰を受けた事もあります。色とりどりに咲きみだれた花園の情景が今も目にちらつく。又パンの運搬道路や、校内放送施設、其の他電話の架設、中学校の便所や校舎も新築され、次々と学校環境の整備がされたことなど今だに忘れられない。

それから北部連合区から「家庭学習について」の研究校の指定を受けました。研究

の方針や内容について全職員による話し合を幾度となくもち、われわれなりの具体案をまとめてそれを実施に移すようにしました。研究発表会には教職員多数参加され、その成果も頗る好評でありました。父兄からも喜ばれ、研究の真価を充分発揮することが出来たと思って居ります。

尚赴任以来要望し続けた養護教諭も64年に配置され、保健活動が活発になった事や、村からピアノ1台備えてもらった事や、同窓会から体育備品室を購られた事や、水不足に悩まされた事や、楽しかった海浜の観察等、東校の思いではつきないものがあります。このように東校時代の楽しい思い出を語ることが出来ますことも、在任中苦楽を共に分かち合った職員同僚や、PTAの正副会長をはじめ役員や全校区民の絶大な御協力があったからであります。改めて厚くお礼申し上げます。

栄えある90周年を心からお祝い申し上げ東校が今後いよいよ隆昌発展することを祈念して擱筆します。

東校の思い出

吉 川 安 一

やんばる路を車で通り抜け、国頭村字楚洲から東村へ赴任したのは、15ヶ年前の1964年の3月末であった。

あの当時のやんばる路は、道路整備がおくれていて、幅員は狭く路面は凹凸がはげしく、カーブが多かった。このようなきび

しい道路事情は、任地までの道中、私を不安と緊張におとし入れた。

未知の「東村」は、赴任前、沖縄地理にすこぶる乏しかった私にとって、耳あたらしい言葉としての村名の一つであった。もちろん、村の風俗習慣や年中行事、地形、

産業形態、教育事情等は、無に等しいほど知らなかった。しかし、前任校の楚洲小中学校の校長から「東村」は、東海岸に位置し、人情が豊かで細かく、教育熱心の村で、山紫水明の地であることだけを知らされていた。

赴任後の本校での6ヶ年間、私は、すばらしい管理者、吉田善昌校長に新城利男教頭、そして、今は故人の平良景太郎校長と宮城時正教頭の下で、良き諸先生に、また教育熱心のご父兄や村民にも恵まれ、微力ながら教育活動をすることができた。在職中、職員やご父兄のご指導ご協力で大禍なく勤務することができたことお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。ところが、任期中、職責を万分一さえ果たしえなかったこと、今更ながら恥しい思いがしてならない。

1968年、本校創立80周年記念式典が来賓、同窓生、校区民総出で盛大に挙行されたこと、まだ記憶に新しい。創立記念事業の一環としての記念誌発刊の編集委員のひとりとして働いたことも、つい最近の出来事のような気がする。

記念誌発刊は、本校創立以来はじめてのことで、長い歴史の貴重な教育資料も戦災で焼失したせいもあって資料収集（特に戦前の写真）に困迷した。そのことも考えてみれば、編集活動を通しての一体感であった。それから、記念誌の校正のために日曜日を返上して故宮城時正教頭と二人きりで、名護市内にある私の母の実家で、時のたつのも忘れて、夕暮れ時まで、文字や写真に

眼孔を光らせて、誤字や脱字を追いつけた思い出もある。

現今、十年一昔の記念誌を手にはページを繰るとき、学校要覧、追憶、写真、よい子の作文、その他と読めば読むほど過ぎし日になつかしい……。80周年、90周年、100年と世代から世代へと内容充実と共に継承発展していく記念誌を貴重な教育資料として、いつまでも保管して活用したいものだ。

教育、文化、産業の振興は、日の出る「東村」からという村全体の意気込みが盛んな時期に、私は教員生活の6ヶ年間で当地で送った。あの頃、教職経験が浅かった私は、指導技術におおいに欠け、子供たちの教科指導や道德教育、そして特別教育活動等に内容充実した教育実践を行なうことができなかった。言うまでもなく、子どもたちの知育、徳育、体育はもちろん、子どもたちの人生設計に教師として、役立てなかったことは今も心残りしてならない。

十余年を経過した今日、教え子達は、2児の母親となり、3児の父親として、子どもの保育に、また、あらゆる職種職場で元気に働いている。その成長の姿を見ると、うれしく、たのもしく思えてならない。

東村の地域社会の中で育まれて成長した子ども達は、他市町村の子どもたちとはかわって師弟の愛や絆が実に強く濃いものだ。今も尚、教え子たちは、行ずりに寄っては、または便りや電話で、ある時は、同期会の席で、それから、私の住宅や職場を訪ねて来ては、自分や同期生の近況を知らせたり、将来のことを語ったり、家族や恋

人のことを話してくれたり、ある日は、中学時代の思い出に時間を忘れさせることさえある。このように、教え子たちとの心の結びつきが今も続いている。今後も更に師弟愛の輪を広げて行きたいと思っている。私は、東中学校で在職できたことを誇りに思っているし、幸せ者のひとりとして自負している。

東中学校での在職時代は、わたしごとではあるが、私の創作活動が盛んな時期でし

た。東中学校や東村は、私にとって創作活動のできたふるさとで生涯忘れることができない。

あれから、十余年、経過した今日でも、あの当時の諸先生に、子どもたち、ご父兄、村人の姿が眼に浮び懐旧の念で胸一ぱいだ。

90周年記念を機会に、学校教育の物的環境や心的環境が増々内容充実されることを期待し、東小中学校の限りなき御発展をお祈りします。

わたしのおとうさん

「おとうさんが ちいさいとき どの学校をでたの。」

と きくと

「ひがし小学校だよ。」

と、いいました。

おとうさんが、子どものころは、いまのような りっぱな こうしゃは、なかったそうです。

たいいくかんも、ないので 雨ふりは、きょうしつの 中で やったそうです。

ランドセルも なかったので ふろしきに本を つつんでもっていったそうです。

雨がふったら 本や ちょうめんがぬれて、こまっただろうなあとおもいました。

おいしいきゅうしょくも ないので いもべんとうを もっていったそうです。

おとうさんの 子どものころは、みんな まずしい くらしをしてかわいそうだなあ

1年 きんじょう ゆみこ

とおもいました。

「おとうさん 子どものころ べんきょうよくできたの。」

と きくと

「テストで べけがあったら おじいさんがきせるで あたまをポコポコ うつのでいたかったよ。」

と いいました。

「いたくて ないたこともあるの。」

と わたしがきくと

「しかられて ポロポロ なみだを ながしながら ごはんを たべたこともあるよ。」

と いったので

「どうして。」

と きいたら おとうさんは、

「きょうだいがおおかったので 早くたべないと ごはんが なくなるからだよ。」

と いいました。

おとうさんの 子どものころと くらべていまは、おいしい きゅうしょくも た

くさん あるし きれいな こうしゃで ペンギンができるので しあわせだなあと おもいます。

ピクニック

きょうは、きょういくとなりぐみのピクニックです。

あさ5時におきて、空をみあげると、あちらこちらに黒いくもが見えた。

「雨にならないかな。」

と おもった。

おとうさんが おきてきた。

「あつ子 おはよう。」

と いいながら 空をみあげ

「くもっているな 雨にならないければいいが。」

と しんぱいそうな顔をしています。

「おとうさん ピクニック だいじょうぶね。」

と いうと

「うん このぶんなら だいじょうぶだよ。」

と げんきな声で いった。わたしは とびあがるほどうれしかった。

やがて おかあさんがおきてきて、

「みんな おきなさい きょうはピクニックだよ。」と、おとうとや、いもうとたちをおこしています。

8時ごろバスがきました。わたしは おおいそぎでバスにのりました。27にん みんながのると バスは おくまビーチにむ

かってしゅっぱつした。

わたしはバスの中で「大きなくりの木の 下で」のうたをうたいました。いもうとの みな子ちゃんたちも いっしょうけんめい うたっています。バスは山みちを どんどんはしりつづけています。やがて おうちが みえました。もう たかえにきているのです。しばらくいくと 右がわに 大きな木が二本見えました。

「せかいいいち大きい木かもしれない。」

と おもった。

やっとおくまビーチに つきました。わたしたちは にゅうじょうけんをもって ビーチにはいりました。その時 きゅうに 大つぶの雨が サーとふりだした。みんなは、しんぱいそうな顔して、

「はやく雨がやむといいのに。」

と くちぐちにいつています。やっとな雨が やみました。

もう12時です。きょういくとなりぐみちようさんが

「もうおひるのおべんとうにしよう。」とおっしゃった。

わたしたちは、みんないっしょにすわった。おかあさんが、さっそくおべんとうを、ひ

らいた。いもうとのみな子は、「だいすきなちきんがある。」と いってさつとちきんをとりあげた。わたしは おにぎりからとりました。みんなの顔は とてもうれしそうでした。おとうさんは、カメラを、もって「みんなわらって。」と いいながら、しゃしんを パチパチとっていました。

おべんとうをたべて みずぎにきがえました。いもうとのみな子ちゃんや、4年生のもりたけくん、のりやくんたちは もうみずぎにきがえていました。わたしは じゅんぴうんどうをして、ゆっくり海の中に はいっていきました。まわりでは たくさんの人が、およいでいました。おかあさんがわたしの手をつかんで

「足を バタバタうごかしてごらん。」

「顔を 水の中につっこんで ごらん。」

と いった。わたしは いっしょうけんめい足を バタバタさせたり 顔を 水の中につっこんだりしたが なかなか まえへすすみません。おかあさんが 手をひっぱって まえの ほうへ すすめた。なんだかきゆうに じぶん一人でおよいでるような気がしてうれしかった。いもうとたちは うきぶくろで およいでいました。おとうさんたちは つりを しているのをみたりしゃしんを パチパチとったりしていました。

わたしたちは 4時ごろおうちへかえりました。

「きょうの 日が もっともっと ながければなあ。」

と おもった。

東小中学校のうつりかわりを勉強して

3年 吉 本 昌 代

わたしたちは、学校で社会科の時間に東小中学校のうつりかわりを勉強しました。

わたしは、学校のうつりかわりを勉強してわたしたちの学校が、こんなに古く、年をとった学校だとは、思いませんでした。

東小学校は、今から90年前、明治21年に平良尋常小学校という名前で平良区にできました。東村にはじめてできた学校でした。

そして明治38年に平良区から今の川田区へ学校がうつってきました。

わたしのおじいさんも、この平良尋常小

学校に通っていたそうです。

でも、おじいさんは、わたしが赤ちゃんのときになくなったので、むかしの学校の話を書くことができないのでぎんねんに思いました。おじいさんは、今、元気でいらっしゃると93才になっていたそうです。

ちょうどおじいさんの年ぐらいの学校だなあと、わたしは思いました。

わたしのお父さんが、小学校に通っていたころは、東国民学校といったそうです。

お父さんが、小学校のときには、おそろ

しいせんそうがおこり、わたしと同じ3年生のころから、大人になってりっぱなへいたいさんになるように、学校でくんれんもしたそうです。

せんそうでは、家や学校などがやかれて、山へにげて、山のひなん小屋でくらし、もちろん勉強どころではなかったようです。

せんそうが終わり、学校のやかれたあとにテントやかやぶきの学校ができ、子どもたちは、どうにか勉強をはじめることができたそうですが、そうめんばこをつくえがわりに、じべたにひざまずいて勉強したということをお父さんから聞いて、今のわたしたちは、ほんとうにめぐまれているなあと思いました。

お父さんが、小学校7年生のころに、小学校は6年となり、お父さんたちは、中学2年生に、小学校8年生は中学3年生に、小学校6年生は、中学1年生へ入学して新

しく中学校が、今の福地橋の近くにできたそうです。

東中学校は、今から31年前にできたので、31才です。小学校にくらべたら、まだわかりです。

わたしは、このように古くて、すばらしい東校、おじいさんやお父さんも通ったこの東小学校で、勉強ができてとてもしあわせだと思います。

学校では、新しい校しゃもつぎつぎとできて、こんど図工室、家庭科室、しょく員室、保けん室のすばらしい2階だての校しゃも、でき上がって、まもなくその校しゃも使えるかと思うと、うれしくてたまりません。

わたしは、東校の生として、この学校にはずかしくないようなりっぱな生とになっていきたいと思います。

90周年をむかえて

わたしたちの学校は、1988年5月に、平良にできた時からかぞえて、90年になるそうです。

それで、お父さんや、お母さんたちが、90才になった学校のお祝いをするために、日よう日も学校に出て作業をしたり、工事の手伝いをしたりしていそがしそうです。

わたしたちも、てんらん会に出す習字をれんしゅうしたり、全校生徒で力を合わせ

て大きなモザイクへき画を作ったりしました。

90年の学校のれきしには、いろいろなことがあったと思います。わたしのお父さんも東小学校を卒業したそうです。お父さんが、小学校のころは、どんな学校だったのか、きょうみがありましたので聞いてみました。お父さんは、30年以上も前のことから、よくおぼえていないが……といいな

4年 比 嘉 恵 美

がら、思い出すようにポツリポツリと話してくれました。

お父さんたちは、戦争が終って、一番最初の小学校1年生だったそうです。運動場も、今よりずっとせまく、おまけに、バクダンの落ちた大きなあながあったそうです。教室も最初は、アメリカ軍のテント小屋だったそうですが2年生のころ、お父さんやお母さんたちがつくってくれたかやぶき教室にうつり、その後、ずっと小学校を卒業するまで、そこで勉強したそうです。机は、かんづめの入っていたダンボール箱を利用したそうです。ノートは、セメントのふくろを切った紙、本は、ガリバンでいんさつしたもの、えんぴつもはい給され、短くなったら、竹のくだを切ってさしこみ、最後の1センチまでたいせつに使ったそうです。かばんは、ほとんどの人がアメリカ軍用の

かばんを持っていたそうですが、中には、ふろしきを利用している人もいたそうです。

くつもなかったので、毎日ほだしで学校へ行ったそうです。寒い冬の朝など足のうらから寒さがじーんとしみこんできて、なきたい時もあったそうです。

「あれから30年あまり、学校はすっかり、みちがえた。恵美たちは、しあわせだよ。しっかり勉強しなくては一。」

大きな時計のついた真新しい校しゃ、ろうかを通ると新しいペンキのにおいがする。2階のろうかは、ホテルみたいにきれいだ。トイレも水せんトイレになってとても気持ちがいい。90才になって学校は、ますますきれいになった。お父さんがおっしゃったようにわたしは、このきれいな学校でいっしょうけんめいがんばらなければいけないあと、心の中で思いました。

パインもりの体験学習

「ああ、いい気持ち。」

辺り一面、緑一色だ。パインのこい緑の葉が福地の山々から海へ向かってなだらかに続くしゃ面をおおっている。

学校を出発して約10分後、私達5年生親子を乗せた8台の農業用自動車は、くねくね曲がった坂道をのぼって、福地ダムの近くのパイン畑に着いたところだ。

今日は、パイン取り入れの親子共同作業。きのうまで降り続いた雨もすっかりあがり、

5年 大 嶺 菜穂子

みんなの表情も晴れ晴れとしている。服そうは、いつもとちがって長そで、長ズボン、手ぶくろ、たびと作業服すがた。せ中にティールをせおってはりきっている。

まず、経ざい連のAさんから「適じゆく果の見分け方と取り方」について説明を聞くとみんなわれ先にパイン畑に入った。私にとっては初めてのパインもり。(人より先に多く取りたい)とあせって青い実に手をつける。すると、父に、

「これは、まだ早いよ。」

と注意された。まわりを見ると、親子が組になり、むがむ中にパインをもぎ取っている。

「これも取っていいか、母ちゃん。」

「うん。これは、半分じゅくしているから、丁度いいね。」

こんな会話が耳に入ってきた。私達親子も負けてはいられない。いっしょうけんめい適じゅく果をさがして歩いた。

今年の夏は、雨が多く、ずずしい日が続いたため、いつもより収かくがおくれているという。おまけに台風にも、パインの日よけを防ぐための紙ぶくろをはぎ取られてしまっている。それを見て、パイン農家であるEさんは、「早く自分のパイン畑を見回って、ぶくろをかけ直してやらないと、せっかく実ったパインがだいなしになってしまう。」と心配そうに話し、おちつかない様子。

私は、これを聞いて、パイン農家って大変だなあと思った。苗を植えたり、手入れをしたり、ぶくろをかけたり、実り時期を変えるカーバイト薬を夜に出かけて行ったり、こんなに愛情をかけて世話をしたのに、自然ともたたかわなければならぬとは。そう思うとパインが、とても大切なものだという気がしてきた。

1時間ほどして、パインもり終わりの合図があった。親と子がいっしょにもいだパイン。ティールに何回もせおって来たパインが、山のように積もった。集まって来たみんなの顔は汗びっしょり。しかし、パインの山を前にして、満足そうだった。

この後、全員そろって選果場へ向かった。そこでは、機械で、選果—計量—記録の一つながりの作業をするのを見た。親子30人で取り入れたパインは、意外に多く、約500キログラムあった。

今度は、選果場の広場にこしをおろして、パインについての勉強会だ。

はじめに話してくださったのは、経ざい連のAさん。パイン草本の名称と役目や植える時期と手入れについて。

次は、役場のBさん。私達の村にパイン作りを広めたわけ。農家に資金を貸してさかんにしたこと。指導員をおいていること。生産量が、始めたころは約200キログラムであったのが、現在は7万トンほどにふえた。今後はもっとふやす計画であり、沖縄では、最もさかんなパインの村であること。

続いてパイン工場のCさんの話、私達の村で生産したパインがN工場のパインかんづめの40%をしめること。父母は、一級品のパインを作るのに努力していること。

終わりに、Dさんのふるさとでの昔の思い出話。これがとてもおもしろく、心に残る話だ。カーカーカラスの話、モウモウ牛の話、おやつがないため、親がかくしている黒ざとうをぬすみ食いしてしかられた話。そのほか、ふるさとでの山や川や友達の話など。

話が終わって後は、お待ちかねの弁当の時間。全員がお母さんの作ったふるさとのかーサー弁当だ。ばしょうの葉のかおりのする油みそ入りのおむすびは、とてもおいしかった。

私は、このパインもりの体験学習を通して、親子で汗を流して働くことの楽しさを知った。そして、ふるさとをささえるパインづくりにしんけんに取り組んでいる父母のすがたに心をうたれ、感謝の気持ちでいっ

ぱいになった。私達の父母が苦勞して育てるパインがもつともつとふえて、私達の村を緑につつま、りっぱな実がたくさん取れるようになってほしいなと思った。

パインうり

きょうから おぼんです。

わたしたちかぞく5人は、なはへパインをうりにいきました。

あさ パインを車にいっぱいつんで7時にいえをでました。10時になはにつきました。

いちばには おぼんのかいものをする人がいっぱい いました。人がたくさんとおるところで うることにした。

はじめのうちは、パインを見て すっと いく人が多かった。「うれないのかしら」と おもった。

しばらくして、おばさんたちが 2、3人きて、

「パイン いくら。」

「大きいので200円。小さいので150円。」

「たかいわね。」

すっと行ってしまった。

ところが さっきのおばさんたちがまたやってきて、ひとりに2こずつかっていった。

そのとき わたしは おもった。

「やっぱりやすいんだ。」と とても うれ

しかった。

ごごになって かう人がだんだんふえてきた。

おかあさんは

「これは、わたしのはたけでとれた あたらしい パインですよ。とても おいしいよ。」

と、なんべんも なんべんもいった。

わたしも そういおうとおもっていたが、ちょっぴりはずかしくていえなかった。

ごごになって、だいぶうれたが のこったものは、パインこうじょうへもっていくことにした。

わたしたちは また一つ一つ車に つみました。東まで もちかえるのです。

家につくと「つかれた。」と いって、すぐやすみました。10時になっていました。

「みんなうれるとよかったのに。」

と おもった。

おかあさんは

「みんな よくがんばったね。」

と、にこにこしていました。

働く喜び

中1 大 城 司

畜産と農業をしているわが家では、休日になると決まって畑や牛舎の仕事をします。家族揃って出かけるのはちょっとしたピクニック気分です。

でも、パイン畑につくとピクニックどころではありません。夏は太陽のさんさんとふりそそぐ下での作業です。パインの実が日焼けしないように袋の日おいをかけるのですが、それが何万何千という数ですから大仕事です。その日おいが台風などで破れたり飛ばされたりすると、また日おいをかぶせるのです。

収穫の時期になると、ちびのぼくの背丈くらいになったパイン畑の中を、手袋をしてのパインもりです。手袋をしてもパインのとげで手足、おまけに背が低いので身体中さされて赤くはれ、額や背中からたきのように流れる汗で、とげあとがヒリヒリ痛み出します。それでもそんなことにはおかまいなく仕事を続けます。そしてもぎとったパインを車へと運びます。かごが少ないのでぼくは両腕いっぱいパインをかかえこみ、畑と車の間を何十回となく往復します。しまいには腕がだるく痛くなるのはいうまでもありません。

けれども父や兄たちは痛れた様子も見せず、ただ黙々と働き続けおしゃべり一つしないのです。そんな父や兄たちを見ていると、弱音の出る自分に恥ずかしくなり、根気よく頑張らなくてとはと自分に言い聞かせ、

文句一つ言わず仕事に打ち込みます。

休けい時間など、父や兄たちともぎたてのパインをほおぼるあの時のパインの甘ずっぱい味に舌づつみを打つとき、何とも言いようのない気分になります。そして、どんなに難儀で苦しくても、この広々としたパイン畑を目の前にすると、ぼくたちの家族が力を合わせ、一生けん命働いたおかげでこんなに実ったのだと思うと少しも苦にならないのです。苦になるどころか一生けん命働いて本当によかったという気持ちにさえなります。

疲れた身体で家路につき、母の用意してくれた冷たいコーヒーをゴクゴク飲み、のどをうるおす時のあのコーヒーの味を何とも言えない程おいしく感じられたこともあります。それは仕事をやり終えた時のあのなんとも言えないさわやかな気持ちが身体に伝わり、疲れもふっとんでしまうような気分です。

それから去年の夏の暑い日のことでした。ぼくにとって初めての牛のふん出しの手伝いをしたとき、初めてのことで要領も得ず、ふんが顔や身体にかかり、あまりの臭さにへどがでそうでした。だから12時のサイレンが鳴り出したときは、やっとな臭さから解放されるぞと喜んだものです。

でも父や兄は何の臭さも感じないかのようになどに玉のような汗を浮かべて、スコップを手ぎわよく動かしているのです。まる

でスコップをあやつっているかのように！

ぼくはそのとき、人間が泥まみれになり、無心に働いている姿が、こんなに尊く美しいものかとみとれたことはありませんでした。

夕食後のひととき、父が長兄にパインの作付けや収穫の良し悪し、牛のこと等についていろいろ話し合うことがあります。それを傍で聞いていて、作物は天候に大きく左右され、人手もかかり、作物の値段によってぼくたちの家庭の経済に大きく影響するものだと思います。

父や兄が干ばつ、雨つづきのときも、虫はついていないか、くさってはいないか、カラスに食べられてはいないか等とパイン畑を足しげく見まわることによって、作物がよく実るのだということをつくづく思い知らされました。丹精をこめて育てた作物がすくすく育つ、その時の喜びは農家の人

でなければ味わえないものではないでしょうか。

作物がよく実り、牛の成育のよいときの父母や兄のうれしそうな顔をみると、自然に心がなごみ安らぎをおぼえます。

小さい頃からごくあたり前のように家の手伝いをしてきたぼくにとって、父母や兄を通して、働くことの大切さ、働く喜び、作り育てる心、愛する心を学ぶことが出来たことをぼくなりには知ることができ、うれしく思います。

仕事を通してそれを教えてくれた家族に感謝するとともに、何だか自分が、今までより急に大きく成長したような気持ちにさえなりました。

このような体験を通して、これからも前向きに取りくんで行き、少しでも何かに喜びを見い出し、中学生生活を有意義に一步一步進んで行きたいと思います。

「アンネの日記」を読んで

中2 當 真 三和子

「わたしは、これまでだれにも打ち明けられなかったことを、全部あなたにうち明けられることを祈ります。そしてあなたが私にとって大きな支えとなり、なぐさめになることを祈ります。」

という書き出しで始まった「アンネの日記」を私はごく最近読みました。

たてようのない恐怖と孤独の中で、一冊の日記帳を心の友とし、書くことによっ

てきびしい日々を耐え、戦争がいつ終わるのか予想もつかない不安の中で生きることへの希望を捨てなかったアンネに、私は大きく心をゆさぶられました。

今までこれほど私に衝撃を与えた本もありませんでした。

そして、戦争が何の役に立つのだろうか。なぜ、人間は仲よく暮らせないのだろうか。というアンネの疑問は私の疑問でもあり、

しきりに人生について、平和について、戦争について、生命の尊さについて話かけてくるようでした。

問題の多い感じやすい年頃に戦争に直面し、大きな痛手をうけたアンネ。

ユダヤ人であるがために世の中から遮断され、極度に自由のない日々を見つからないように細心の注意をほらい、神経をとぎすませなければならなかったユダヤ人達の生活。

こんな生活が1年も2年もいや、戦争の続く限り続いたのです。だがアンネは、どんな逆境にあっても自分を冷静に見つめ、絶えず理想に向かって進み、自己を主張し、真実を語ることを恐れなかったアンネに、私は同世代の少女のどんな時にも屈しない強い精神に感動し、驚かずにはいられませんでした。

もし、私がアンネの立場に置かれたとしたら、ユダヤ人に生まれたことを呪いなげいたことでしょう。そして外出や買い物、外で遊ぶことも極度に制限された生活を強いられて、冷静にものを見るところか弱音をはき、希望のない打ちひしがれた生活を送っていたことでしょう。両親とはなればなれの不安や寂しさ、ましてや収容所でパンを分け与え、みんなの太陽となり希望を与えることはとうてい出来なかったでしょう。

戦争を知らない私たちは自由が与えられ、自分のしたいことやほしいものがほとんど手に入る現在、平和はすでに与えられたものとして、真にその有難さを知ろうとはし

ないのです。

戦争を体験したおとな達でさえ感覚では戦争を嫌いながら、現在の家庭の小さな幸福にひたっているような気さえます。

第二次世界大戦で20数万人の犠牲者を出したわが沖縄、今沖縄各地で三十三回忌の法要が行われています。私の祖父もその犠牲者のひとりです。祖母は夫を失い4人の子どもを抱え途方にくれたあのいまわしい話を私たちによくします。

しかし祖母の話は昔話を聞くようなもので、「大変だったんだなあ」「苦労したんだなあ」ということだけで、祖父の死も真に迫ってくるものではなかったのです。

祖父の顔も知らない私の生まれる以前のことであり、祖父への肉親としての情が生まれてこなかったのです。

こんな私を祖母はどんな気持ちで見ていたのでしょうか。きっと孫の情の薄さを嘆いていたのかも知れません。それでも祖母は自分の本当の気持ちを知らせてくたえて話していたのでしょうか。

祖母にとって祖父の三十三回忌の法要が終わったとしても、祖母の胸の傷跡は生涯消えることはないでしょう。

私は以前より少しではありますが、祖母の気持ちを戦争の悲惨さを知るようになったつもりです。

去った10月1日沖縄終えんの地、摩文仁の丘に山田真山画伯の平和記念像が建立されました。それは画伯が今度の戦争で2人の息子を失い、戦争の惨状をつぶさに見、二度と戦争がおこらないよう平和を希求す

るため20余年の歳月をかけ、心を打ち込んだ記念像だそうです。完成を目前に去年の1月9日91歳で亡くなった画伯の心を私たちは決して忘れてはいけないと思います。いやその心を永久に持ち続けさせなければならぬのではないのでしょうか。

世界の恒久平和を祈るシンボルとしても！そのためにも祖父のアンネのそして過去になくなった数多くの戦争の犠牲者の死を絶対に無駄にしてはならないと思います。

今、私は私の想像を絶するような不安と恐怖の中でアンネが何を考え、どう成長していったか、また戦争が人々に与えた影響、

平和のありがたさを考えさせてくれた日記に感謝しています。

そして、何よりもアンネの強い精神を自分のものにしていきたいと思います。

アンネや山田画伯の肉体がこの地上から消えてしまっても、彼女の聡明な美しい魂、画伯の平和を希求する心は人々の心の中に生きつづけることでしょう。

「人類の平和は心の中から」

この小さな心の中から一步一步生み出そうではありませんか。二度とあのような悲惨な戦争をおこさないためにも！

思い出のアルバム



昭和3年尋常科6年卒業記念写真（東尋常高等小学校）



昭和4年3月卒業生（提供・玉村弥吉氏）



昭和8年川田チーム 提供・宮平次郎氏



昭和13年東尋常高等小学校高等科卒業生



提供・アルゼンチン知念佑憲氏



若き日のツネ先生・仲松遙子



女子青年団

昭和17～19年頃

(比嘉康定氏より)



男子青年団

昭和17～19年頃

(比嘉康定氏より)



学校職員 (1949年11月15日) 提供・知念佑憲氏



1949年11月15日 知念絹子先生と生徒



昭和25年（1950年3月） 川田初等学校卒業記念



昭和26年3月 東小学校五年生修了記念（次年度、赤瓦・石づくり校舎建築）

提供 渡嘉敷直勝氏



1951年4月10日 ヌンガクに中学校があった頃（バックは福地橋）

玉城哲弘先生アルゼンチン渡航のため

提供 比嘉信子



昭和36年度卒業記念 バックは終戦後初めての瓦ぶきの校舎

提供 渡嘉敷直勝氏



昭和38年度卒業



昭和25年度辺土名地区大会で優勝 提供 渡嘉敷直勝氏



昭和25年東小学校 7 期生 高平橋前の海岸で



昭和42年頃小学校 4 年生遠足（高江へ）



現在の職員室前には円形の大きな池があった 昭和43年頃の職員



20期卒業記念写真「平良景太郎校長外」 昭和43年3月卒業（1968年）



東中学校第4期卒業生（1949年3月卒—昭和24年）・（昭和11年生）（新制中学校）



東中学校第3期卒業生（1951年3月卒—昭和26年）



東中学校第7期卒業生（1955年3月卒—昭和30年）



東中学校第8期卒業生（1956年3月卒—昭和31年）・（昭和15年生）（中学1年生の頃）



東小学校第9期卒業生（1954年3月卒—昭和39年）・（昭和16年生）



東中学校第9期卒業生（1957年3月卒—昭和32年）・（昭和16年生）



東小学校第10期卒業生（1955年3月卒一昭和30年）・（昭和17年生）



東中学校第10期卒業生（1958年3月卒一昭和33年）・（昭和17年生）



東小学校第11期卒業生（1956年3月卒—昭和31年）・（昭和18年生）



東中学校第11期卒業生（1959年3月卒—昭和34年）・（昭和18年生）



東中学校第12期卒業生（1960年3月卒—昭和35年）・（昭和19年生）



昭和33年東小学校第13期卒業生（昭和20年生）



東中学校第13期卒業生の中学2年の修学旅行



東中学校第17期卒業生（1962年3月卒—昭和37年）・（昭和24年生）



東中学校第14期卒業生（1962年3月卒—昭和37年）・（昭和21年生）



1年B組



1年A組

東中学校23期卒（1971年3月卒）



2年B組



2年A組

東中学校22期卒（1970年3月卒）



昭和12年高等科1、2年（運動場中央のウスクーの下で）



昭和29年頃授業風景



平良の屋又北原で「セーグワー」や「うなぎ」どりをする子供達（昭和29年頃）





自家制の高跳台で遊ぶ平良の子供達（昭和29年・平良区現在の比嘉商店附近）



かやぶき屋の平良区の様子（昭和29年頃・マレッキー博士提供）



学校の授業風景



平良区全景



「ハダシ」で通学する子供達
(現在の平良橋附近)



「御嶽」で病気の馬の治療をする平良区民（現在の村営体育館附近）



子守りをしながら、「タムンザー」で遊ぶ子供達（昭和29年頃）
現在の平良公民館の前は広場だった



つつじ園後方の山から見た平良



昭和51年から造成され昭和58年にはつつじ祭りが行なわれる

座 談 会



司 会 金城 昂（東小中学校校長）
語り手 高良輝忠氏

自己紹介

司会 お忙しい所大変御苦労さんです。先ずは自己紹介ですが、高良さんは宮城でお生まれになって、今年で（昭和61年）何歳になられましたか。

高良 明治37年5月10日生まれで82歳ですかね。

司会 そうすると、高良さんの、宮城あたりの思い出は、何歳ぐらいから記憶に残っていますか。

高良 そうですね、小学校3年位からですか。あの頃は、青年会と言うものが有りまして、小学校をでて中学校に進まん者は、

すぐ青年会に加入しなければいけない時代だったですから、その頃から少し覚えてますね。

通学路・服装

司会 では先ず、通学路について御話を伺いますが、当時、川田、平良、宮城の今の道はできてないでしょうね。

高良 道はできてなく、ここ平良は渡し船ですね。そして、伊是名は有銘校に通った時もあります。渡し船が無い時平良の生徒は、裸になって、潮の干いた時は、ちょうど膝ぐらいまでつかって渡りました。大水の時や、潮が込む時は、着物を頭に（当

時洋服は無く、みんな膝丈の着物ですから）のせて帯で教科書もくびって泳いで渡ったものです。それから、「ウイバル」にあがって、サーン川の橋に下りてそれで川田の部落に入る。そういう道だったんですね。もちろん今のサーン川橋などありませんよ。泳いで川を渡った人達は、現在ではそしですね、徳善さんや桑江さんなんかまではその経験があるはずですよ。

司会 宮城からの道はどうだったんですか。

高良 宮城はですね、道路はすべて浜を利用していました。しかし、暴風とか、雨の日で古島川や高平川が渡れん時は、古島の山越え、谷越えをして大変難儀をして川田まで通っていました。

司会 あれ、古島の川は下から渡ったんですか。

高良 いや、旧道の橋があったんです。

司会 タカデーラ橋は……。

高良 タカデーラの橋はなかったんですよ。潮のこむ時は、今の豚小屋があるでしょう、そこを通って川田にきたもんです。参考までに話をしますと、「平良うりぐち橋かきて、なだの美らさや川田村、村のいち果て福地村」と言う口説が久志村に残っています。福地村というのは宮城のことです。

司会 その頃の服装などは、どうだったんですか。

高良 大正のはじめ頃までは、洋服なんかというものはなくて、男も女も膝位のかすりの着物、夏は、ゆかた地で着物を縫って、帯を締めて、芋の3個くらい持って学

校に通うというのが普通でしたね。

司会 高良さんなんかが小学校一年に入る頃にも、やっぱり入学式はありましたか。

高良 ありましたよ。

司会 入学式などの服装は？

高良 やっぱり着物ですね。

司会 その着物は買ってきたものが多いんですか、それとも直接自分達の手織りですか。

高良 やっぱり手織りもあったんですね。

司会 手織りということは、芭蕉ですか。

高良 芭蕉が手織りですね。外に紺は、布地を買って来て、併せて縫ったんですよ。

司会 それをつてけ、はだしで。入学式がそうだとすると、普段着けるものは

高良 やっぱり同じですね。山に行くにも、何をするにも、皆着物時代ですからね。洋服なんてのは、ずっと後からですからね。学校の先生方以外には、洋服を着た人はいなかったですからね。

司会 僕等の頃でも、女の子がパンツをはいたのは、大体小学校3年位からでしたからね。

高良 そうでしょう。

司会 昔だと、着物をつけた女の子たちは、まるっきりそのままですか。

高良 着物の下は、男も女もノーパンツですね。運動会など、女の子は着物の前をおうようにして走るもんだから、こればかり気にして良い記録なんか出ませんよね。

司会 ブルマーをはくようになったのは、昭和もずっと後になってからですか。

高良 そうでしょうね。

司会 我々の時代でも小学校3年位まではノーパンツ、しかし、ブルマーも有るには有りましたがね。

高良 普通の大人は、ふんどしみたいな「メーチャー」を着けていましたね。子供達は今の小学校を卒業するまでは男女とも下着ははいていなかったですね。日本でも、大正12年の震災後しか、女は下着をはいていませんよ。

司会 学校では、体育の時間に体操などあったわけでしょう。

高良 ありましたよ。

司会 服装はそのまま体操を……。

高良 今とは違って、簡単な体操でしたから。

司会 運動会などもやはりその服装で……。

高良 そうです。だから精一杯走れないんですよ。6年頃になるとやっぱり恥ずかしいことを知っていますからね。

司会 運動会ではどんな種目がありましたか。

高良 大概、遊戯が主だったですね。駆け足もあったんですが、何千メートルとか、そんなものはなかった。200メートル位まであったかなあ。今の下の運動場を2回から3回位回る程度でしたから。

司会 なるほど、大体当時の服装などの様子がわかりました。

校舎と学校生活

司会 次に学校の校舎について話を進めますが、平良から移って来た当時の校舎は茅ぶきですよ。

高良 そうらしいですね。僕等は移った当時のことは覚えていませんね。

司会 高良さんなんかが学校をでる頃、川田の学校は茅ぶきでしたか。

高良 そうですね。茅ぶきと瓦ぶきの2校舎あったんですね。瓦ぶきもすでに出来ていましたよ。

司会 ああ、そうですか。じゃ、瓦ぶきができたのはずいぶん古いんですね。

高良 我々のころからありましたよ。

司会 元のイリミージュウ小の屋敷の部分、その辺に何か瓦ぶきの校舎があったそうですね。

高良 はい、そこに校舎があったんです。当時私などは一年生でした。一年・二年は茅ぶき校舎でした。土間でね、床もない土間ですよ。

司会 戦争直後のあの校舎と大体感じが似てますね。

高良 全く似てますよ。それも、学区域の人が出て造るんですからね。奉仕作業で、丸太の木でですね。

司会 学校は午後までありましたか？それとも午前中ですか。

高良 やっぱ午後もありましたね。

司会 その頃の生徒の数は、今に比べるとどうでしたか。

高良 生徒の数はずっと少ないですね。何百人いたかは忘れましたがね。

司会 僕等の時代は、300人位でしたがなあ、全校で。記録がないので、高良さん達の大正期の人数ははっきりしませんね。ところで、先生方は皆沖縄人でしたか。

高良 私たちの入学当時の先生は、原ケイジロウと言ったかな、原というヤマトウンチューで夫婦の先生でしたよ。そのヤマトウンチュー先生が校長先生でした。あの当時は、沖縄の人で校長になるという人は少なかったですね。原という校長先生は、早く亡くなられて、奥さんは長らく教員されて、その奥さんも沖縄で亡くなられたはずです。

司会 何名くらい先生方がおられたか大体わかりませんか。

高良 先生は、4名おられたかなあ。

司会 やっぱあ当時の、複式みたいに3年、4年一緒とか。

高良 そうですね。複式でね、先生が少ないもんだから。私の入学当時の先生は川田の知念定馨さん、後で、村長になられた。2年の時は、久志嘉陽の翁長松次先生、翁長マサオさんのお父さん。あの人は活発なスポーツマンでね、宮城の生徒は、道が悪いでしょう！だから天気の良い時はもう遅刻ばかりやるんですよ。宮城の生徒は、魚から、内福地、デーウドゥマイでしょう。浜などで、カニなどと遊んで1〜2時間も遅れてくる。僕なんかもう半分も学校へは行かなかったですよ。遅刻をすると、その戒めは、全校生徒の前で教壇に立たされて

ね、あのチンブク竹で、ケツを5・6回なぐられて、そのあと一時間くらい立たされましたね。

司会 学校が始まるのもやっぱり9時頃からでしたか。

高良 大概9時頃からですがね。学校に10時頃まで到着せんでしょう。浜でブラブラ遊んで。時には、学校には行かずに、川田の浜でサパニを引っ繰り返してその下に隠れて、同級生と一緒に家に帰って、学校に行ってきたという顔をするんです。一度、それがバレて、学校で散々な目にあわされたことがありましたよ。

司会 教科書などは自分持ちですか。

高良 教科書は自分持ちではありましたが、優等生は教科書も卒業式に貰いましたよ。もっと成績のいい生徒は、そろばんとか石板とかセットで工具までもらいましたね。今は平等にやるでしょう。昔はもう1等2等で全部差をつけてやりましたからね。

司会 確かに、ひとつの励みにはなったかも知れませんね。

教科書は名護で買ったんですか。

高良 名護で買ったと思いますね。ちょっと良く覚えておりませんが……。

司会 あの頃は、今みたいに、教科書と学用品以外には、学校に出る金というのは全く無い時代ですか。

高良 ないですね。

司会 高良さんの頃からまだ石板ですか。

高良 そうです。石板です。

司会 いつ頃まで続きましたか。

高良 そうですね、長くは続かなかった

と思いますがね

司会 というのは、よく石板を使ったという話を聞きますが、その現物を未だ見たことがないんですよ。不思議な位ですよ。

高良 大概30～40センチくらいの広さで、木で縁がされてあってね。今の黒板とは違って、「せきひつ」とか何とかいうもので書いていましたね。

司会 あれは、チョークではないですよ。ね。

高良 チョークではないです。少し固いですが書きましたね。そして拭くと消えるから丁度黒板みたいな便利なものではあったんですよ。

司会 何が材料だったか良くわからないですね。全く残っていないですから。

高良 残ってないですね。

司会 ひとつくらい有りそうなものですけどね、何処かに。

高良 戦後まで有ったはずですが、戦争のためになくなったはずですよ。

司会 そうでもないですよ。我々が子供の頃から見たことがないですよ……。

あの頃はもう読み書きそろばんですよ。ね。修身、それから唱歌なんかありましたか。

高良 唱歌という本も有りましたよ。

司会 唱歌、それに体操。

高良 上級生になると何か地理というものがあつた。今の社会科ですか、地理、歴史はありましたよ。読本といってね。

司会 唱歌なども伴奏はオルガンだけですか。

高良 オルガンだけです。鳴物なんてい

うものは他には全然なかったですよ。

司会 図画なんかありましたか。

高良 図画はありましたよ。

司会 あの頃クレヨンなんかは……。

高良 クレヨン、絵具みたいなもんがありましたね。

司会 そろばんでも、あの例の割り算九九を使う何というか。

高良 「にいちてんさくのご」の……。

司会 そうそうあの式の……。

高良 あれは、面白いですよ。もの言いながらすぐ答えが出るんですよ。

司会 処であの頃ランプ、あるいはローソクで勉強したということは分かるが、子供達は自分の机など勿論ないですよ。ね。

高良 机などありませんよ。

司会 どうしていたんですかね。僕等の時代からはいくらかそういう物はあるわけですけど……。

高良 いや、あのね、ランプ小がありました。ランプといっても、角ランプ小(グア)、角ランプの無いところには、皿にローソクみたような、なんと言うか、ローソクに似たようなもの、何油というかな。

司会 たね油？

高良 そうそう、たね油、それにむ布切れで5寸くらい芯をだしてね。そんなもので良く字を習ったなあと思うんですよ。今の人なら字読めんはずですよ、暗くて。

年中行事

司会 通学路については大方理解できま

した。次に年中行事についてお話を伺います。

あの頃、川田、宮城、平良というのは、親類とか、行事とか、そういう付き合いが今より多かったんじゃないですか。

高良 そうです。いまよりはかえって多かったですよ。

司会 その場合もやっぱり、例えば、スーコーなんか夜やりますよね、夜もそういう道を行っただけですか。

高良 やっぱり歩いたんですね。タイマツをつけて。電灯なんて見たこともない時代ですからね。昔は、トッブシのタイマツとか、竹のタイマツとかがありましたね。

司会 その頃は、冠婚葬祭なんか、宮城に行くとか、あるいは、宮城が川田に来るとかという場合、一応晴れ着をつけてますよね、その場合、最初から晴れ着を着けて行き通いましたんですか。

高良 そうですね。はい。

司会 晴れ着をつけて。はきものは。

高良 はきものは裸足で。

司会 そうすると、「はきもの」は持って行ったんですか。

高良 持って行かないですね。着くと足を洗って入ったぐらいのもんでした。これはまあ事実ですよ。下駄なんかあることはあったんですがね。遠い川田や平良には、下駄やサバなんかはいて行かなかった。裸足で行き来したんですよ。それで、家に入る時は、足を洗ったりして入りました。

司会 例えば普通大人なんか、行事などの場合、酒を飲むでしょう。そう言う時は、

潮の満ち干の関係で自由に行き来できない訳ですから泊まることになったんですか。

高良 泊まる場合もあったし、泊まる人もいたんですが、しかし、昔の人はたいがい潮の満ち干を利用してやっているものですからね、そういう行事も。

司会 最初から潮の満ち干を考えて時間など設定した訳ですか。

高良 はいそうです。しかし、これはもう我々の明治時代から大正の中頃までの話で、その後はそうでもないんですがね。

司会 少し方向をかえますが、校区の大きな行事といたら、旧暦の8月行事ですね。

高良 まあ、8月行事が大きいですね。それと今の海神祭ですね。あれは平良と川田だけの行事ですが、とにかく大きな行事ですね。

司会 我々の子供の頃もそうですが、昔から8月の15日前になると、部落あげて踊りの練習をしたことを覚えていますが、何日ぐらい練習したんですか。

高良 そうですね、どの字でも1ヶ月くらいはやっていましたね。あの練習は厳しかったですよ。特に宮城は、行政区域が大泊まであって、年令はいくつまでだったか忘れましたが青年の上に「ニーセー会」というものがあるんですが、それが、踊りが出来ようが出来まいが、一応全部にやらせてみて、出来ない人には「うけじん」といってお金をださせるんです。中には、大泊や魚の遠くから通うことのできない人は、上手な人でも、うけじんをだして逃れるも人

もありましたがね。大概是、20日ぐらいの練習で、その中10日ぐらいは昼も夜も練習したもんです。

司会 その時の食事なんかどうしましたか。

高良 食事は自分持ちですね。ジーウターだけは「ジーウターマカネー」といって、ジューシイメーを炊いたり、茶わきなどのマカネーがありましたが、その外の人はいずれも自分持ちでした。

司会 そして、旧の8月は、9日あたりに「しくみ」して、総日は10日でしたかな。

高良 「しくみ」は村によって違います。8日のところも9日のところもある。10日は総日、十五夜が「別りあしび」です。

司会 すると、「しくみ」「10日の総日」「十五夜の別り」の3日間のためにひと月もかけて大変なことですね。

高良 宮城では、しくみは、イノガマでやって、10日は本部落で、11日は又イノガマでやって、12日は魚でやって、14日は大泊でやってそして15日の朝、トーシードリーを弾いて現在水タンクのある宮城部落のうしろの旧道を通って帰って来たんですよ。そして又、引き続き夜は十五夜の別りあしびをすると、まあこんなふうでしたね。

司会 お互いの3カ部落では部落あげてというと、これが一番大きな行事になりますか。

高良 そうでしょうね。川田は、僕等の青年時代ですが、芝屋を雇って来て徹底的に踊りを習ったりしたことがありますよ。前フクジャー小のおじいさんや、ハマチャー

の方々がいらっしゃる時代にはとても盛んでしたね。平良は戦後芝居を雇って来て練習した時の踊りで、有名な「福・禄・寿」が今でも残っていますよね。

司会 あれは戦後ですか。

高良 あれは戦後です。平良も前からあったんですが、戦後芝居を雇って大々的に練習して大変盛んになりました。戦後は宮城が一番衰えている。戦前は盛んだったんですが……。

集落について

司会 次に集落のことについて話をすすめますが、先程、口説の、福地村は宮城のことと言うことでしたが、何時頃から宮城になったんですか。

高良 そうですね、200～300年前の話らしいんですがね。川田と国頭、安波の間に部落がないもんですから、「中間に部落をつくれ」という琉球王朝時代の命令があったそうですが、「やまぐに」で道も険しく、誰も希望してそこに住む人が無かったため、川田の真ん中のスージから切って、強制的に移動させられたことが国頭村誌にあるんです。

川田の人達は、最初、デークドウマイに移動させられたが、そこは、耕地面積が少なくて人が住めるところではないもんですから、そこから「古島」に来たんです。古島は、行政区は川田になっているが、土地は宮城の古島です。古島に越しては来たものの、そこは、大波とか、洪水とかで生活

が出来ないもんだから、今の宮城に、明治10何年かに上がったと書いてあるんです。昔は、久志村時代の文献もあったと思うんですが、戦争のためこれが殆ど無くなっているんです。

司会 その辺、掘り起こしが必要だと思いますが、福地村が宮城ということは、始めて聞きました。

経済活動と生活

司会 次に生活状態の話に移りますが、あの頃は、生計に必要な現金収入は全部「山わぎ」ですか。

高良 殆どが「山わぎ」ですね。

司会 そして、「山原船だゆい」で今のように名護を通しての経済ではなく、与那原ですか。

高良 たいがい、与那原、泡瀬、平安座あたりですね。まあ、航海する山原船は殆どが平安座の船でしたから、与那原と平安座ですね。

司会 結局、こちらから、薪とか、材木をだして

高良 そうです。そして物物交換したり、又、お金を取ったりですね。

司会 それ以外はの経済活動はなかったのですか。

高良 なかったですね。

司会 例えば「アチョール」が商売にまわって来るとことは……。

高良 いや、そんなことは無かったですね。山原船を持っている人だけのつながり

ですね。

司会 向こうから品物を持って来て取引をするだけです。

高良 そうです。

司会 そうすると、例えば、海が荒れたりすると、品物が不足するという状況などは無かったんですか。

高良 それはですね、川田にも、平良、宮城にも「マチヤグワー」というのがあって、薪や材木の取り扱いをする店が1〜2軒あって、そこに、ソーメンなどが余裕をもってあったんでそれでしのいでいたんですよ。個人の店では、川田のシオミ屋一のオジーなんか古いし、宮城は魚泊にガージャヤー、宮城本部落にもマージャ小と言う店があって、たばこや品物を売ってましたね。又、山原船については、正月には「初ウンケー」といって山原船の得意先になっているところが重箱を作って船に乗り込んで、彼等も手製のものを作って、船の上で太鼓を叩いて踊ったりしたんです。これを「サカンケー」と言っていましたかね。

司会 「サカンケー」と言う言葉、そう言えば聞いたことがありますね。

高良 それから、船から船頭などが降りてきて、得意先の店で「ヤッサヤッサ」するんですね。そういうふうな、和やかなこともありましたよ。

司会 なるほど経済の中心は、全く船ばかりだったんですね。重箱の話が出たついでに、食生活について伺います。あの頃は、芋が主食とよく言われますが、芋だけで栄養失調にならなかったのは、各自が川や海

の自然のものを副食に工夫して取り入れたということですか。

高良 それもありますね。昼休みに後ろの川に行くと、これくらいのザル小の一杯はタナガーが捕れましたね。タナガーは網ですくっても捕れましたが、我々の頃は、「マーミ」と言うものがありましたね。ガキナ草の芯をとって丸く輪をつくって、それをタナガーの尻尾からいれて引き締めて捕るんですよ。それでもティール小の半分位は昼休みにとれましたよ。又、潮干狩にでたり、ムドルに出てアサリを捕ったり、まあ、そんなふうなもので少し栄養を補ったんじゃないですか。

司会 なるほど。今と比べると自然のものが簡単に捕れ、生活の糧になっていたんですね。

住まい

司会 ところで、次は住まいのことについてですが、僕等の思い出にあるのは、人が家を造ったら、クバにごはんを包んで配る、いつ棟上げしてそれが貰えるかと大変楽しみでしたがあれは、昔もあったんですか。

高良 あれは、昔はもっと盛んでしたよ。

司会 そうですね。昔の「ヌチ屋ー」とか「アナ屋ー」を造る場合もそれが有りましたか。

高良 ありましたね。家を造る時は全部奉仕作業ですからそれを楽しみにしていましたね。あれは、斤味すると3斤だから、

量にして相当なものです、これを全部食べる人もいたんです。日頃はごはんを食べてみない人が多かったですから。

司会 昔の家は、普通の「ヌチ屋ー」でも、時期には取り外しができるように、床は全部は釘付けしなくて、大掃除のときなど、取り外して海や川で洗えるようにして有ったんですか。

高良 そうですね。ずっと昔、と云っても明治時代から大正の始め頃なんです、ヌチ屋ーや瓦屋（カーラヤー）を造るというのはなかなか無かったですからね。瓦屋なんかと云うのは、宮城に一軒と川田に1〜2軒あった位のもんでしたね。

司会 普通の「アナ屋ー」の場合もやっぱり床はしかれていましたか。

高良 床は竹を編んだりしてやっていますね。まあ、だんだん後になって、大きな木を二人でノコでわいて、それを床に使うようになっていきますね。その昔は、大概竹で編んでいますね。又、壁はですね、竹で編んだ「チヌブ」というのが有るんですが、そのチヌブを編んでその中に「かや」を入れて、後から合わせて「スルナー綱」で括って壁にしたんです。

司会 あれは、それこそ自然そのもので、温かかったでしょうなあ。ただ、すきま風がはいらないので夏はどうだったですか。

高良 夏も涼しかったですよ！茅屋ーは。

司会 そうですね。

高良 ほんとに涼しかったですよ。我々が青年の頃からは、床もりっぱに敷くようになりましたが、私達の親父なんかの時代

までは、殆ど竹を編んで床にしていたのを覚えてますよ。無論、すぐ地べたには竹を編んで敷いてもダメだから下には、丸木の丸太を敷いてありますがね。その上に「わら」で編んだ「ぬくぶく」と云うのを敷いて寝たもんです。

司会 「ぬくぶく」というのは「わら」ですか。

高良 そうです。藁で一間四方位に編んだ敷物で、それには、米や豆なども干したりしたもんです。私達が青年時代—そうです—ね16〜7歳位までは布団をかぶって寝たことは無かったですよ。「綿入り小」と云って今の丹前ですが、それとお母さんお父さんの着物3つ4つの袖を合わせて、それをかぶって寝るんです。めずらしいですね。あれで足は出るんですが、あんな寒い冬を過ごしていますからね。友達とゴロ寝する時もあれだけですからね。丹前なんか買って着ける人は少なかったですよ。

司会 そうでしょうね。よく過ごしたもんですね。

遊 び

司会 高良さんたちの子供の頃の遊びにはどんなものがありましたか？。僕等の頃はもっぱら三輪車遊びとケマリ等でしたが。

高良 竹馬や「イッパウチェー」ですね。あれは危ない遊びですよ。乱暴にやりよったんですが、それを又手で受けよったんですよ。それとか、まりを蹴る「蹴まり」ですね。女の子は、野原に生えている「こけ」

を取ってきて布に包んで「まり」をつくりました。

司会 まりはコケで作ったんですか。

高良 まりなんか買う金ないですからね。

司会 遊びに金をかけるということは全くなかったんですね。

高良 ほとんどなかったですね。野球というものは無いし、それに似たもので「デンスボール」というものがあるにはあったんですが。

司会 そう云えば、「デンスボール」という遊びがありましたね。

高良 しかし、それはあまり盛んではなかったですね。

司会 大体、生活するのに精一杯でしたから、学校から帰ってから遊ぶということはあまりなかったわけですね。

高良 そのとおりですね。ほとんど遊ぶことができなかったですから。

生活道路

司会 先程の話で、海路のことについてはおおよそそのことが判りましたが、あの頃、自動車はあったんですか。

高良 自動車のはじめは、ミージョウのソウボウ（金城松房）さん、沖縄でもあの人が、はじめて自動車を運転して持ったんです。東に自動車が来たというのは、比嘉貞男さんなんか初めてじゃないですか。何時もは白浜止まりだったんですが、川田に乗りつけたこともあったんです。あの時は叱られたそうですよ。自動車が来たと言

うのは、まだ歴史が浅いですよ。

司会 そうすると大保から此処までの道はどうなっていたんですか。

高良 今の青年隊の北側に旧道がありますね。宇出那覇から登って、現在大保のところに開拓されていますね、そこを抜けて大保へ出たもんです。徴兵検査に合格して入隊する時は宇出那覇まで歩ける生徒は下級生でも日の丸の旗をふって伊集盛安さんの家の所まで見送りました。大人は、三味線を首にかけて「トーシンドーイー」して、大保まで送り、そこからサバニで羽地まで渡っていきましたね。

司会 大保からの道は大体いつ頃できました。記憶にありますか。

高良 大保からの道はですね、私等が青年になってからの話ですね。大正8年から12年頃そんなもんじゃないですか。それから、川田の昇康君のところの「ワイトウイ」もその頃できましたね。人夫として働きましたがね、あの山をわって福地に通ずる道「ワイトウイ」を作ったんです。それから4～5年後、私が横浜から帰った頃には、川田を越して、炭焼き橋位まで道が出来ていましたね。川田から宮城までの道ができたのも昭和10年か11年頃ですよ。

司会 高良さんなんかは本土へ行くときは、名護から那覇までは大体もうバスかあるいは車で……。

高良 はい。私なんかの時代からは本土へいくにはバスもありました。バスというより馬車が通っていたから馬車ですね。

司会 宮城から出発して、どこまで、ど

んな乗り物でどうして行ったんですか。

高良 ですから、大保あるいは、塩屋あたりまで歩いて、それからサバニの「渡サー船」で羽地の仲尾次まで行って、そこからは客馬車という馬車がありました。それから私達よりずっと先輩の場合は、那覇行きの「運輸丸」とか、「名護丸」とかがあって、その船で那覇まで行ったんですよ。難破した場合もありますがね。それでなかったら、陸からだ馬に引かす「馬車」ですね。よく乗って10名くらいですか。片方に5名ずつ。これも乗り継ぎをして嘉手納まで行って、そこからは「軽便」という汽車があったわけです。そこからは軽便に乗ったり、あるいは、軽便に乗れん人は、又乗り継いで客馬車に乗ってね、そして那覇まで行った。我々が本土へ行く時からは自動車はありしたね。僕等は昭和になってから行ったんですから。

司会 その客馬車時代には、那覇へ着くまで大体2日位かかったわけですね。

高良 そうですね。嘉手納経由ですからね。いやまあ、一日で行ったんですがね、早く名護から出発せんと行けなかったんです。

司会 時代は変わったもんですね。何年くらい前のことですか。わずか65～6年位ですか。まだそんなに長くはないんですよ。

風俗・習慣

司会 ここで少し方向をかえて、風俗と

か習慣についてお話を伺います。

風俗といえば昔は「モーアシビー」が盛んだったと聞きますが、高良さん達のころまでありましたか。

高良 有りません。もうポッキリ我々の時代からはなくなった。少し先輩まではあったんですがね。

司会 あーそうですか。無くなったのは、官憲が取り締まったのですか、それとも自然に（高良）自然ですね。

僕等が未成年の15〜6歳までは、現にモウアシビーを見えています。

参加して遊んだことはありませんがね。川田の男性と宮城の女性があつた「炭焼橋」の浜辺の「ユンヌバマ」で夜通し三味線を弾いて歌っていましてね、鳥の声が聞こえるまで遊んでいましたね。

司会 我々の時代は、学校へ行ったら、中頭から来た人の中には、もうしあしびの話をする人がいたんですよ。ところが僕等のところではもうそんな話は全く無くて、大人になってからここで少しあつたと話を聞きましたね。

高良 中頭あたりでは、おそくまでありましたよ。ここでも、もうあしびの時は、女の方からジュウシーメーをカーサに包んで夜食を持参して、女の方からおごっている、嘘じゃないですよ。そして酒もガブガブのんで親に知れないように明け方家に帰って、朝にはオノをかついで山へ、山歩かんと食えないから。

司会 そんなおそくまでやっても、やっぱり巡査が取り締まったりはしてないんで

すね。

高良 モーアシビー取り締まりということもあつたそうですがね、当時東村には巡査が一人しかいないんですからね、一人であつちこつち駆け回って、夜中まで取り締まることはとても出来ませんからね。川田駐在ができたのは昭和初期の頃ではないですか。元々慶佐次になったんですから。僕等が青年時代は、事件が起きると、慶佐次へ巡査を呼びに行ったことがたくさん有つた。岸壁を越えて、ユンヌバマから伊是名を越えて慶佐次まで行つたんですよ。

司会 慶佐次にあつたんですか？

高良 そう最初は、後で川田にもね。

司会 病院などは、こちら（東）にはなかったわけですか。

高良 病院はない、塩屋とそれから羽地にありました。

司会 塩屋に病院ができたのはいつ頃ですか。

高良 あれは古いそうですよ。朝比名という鹿児島の人が開業していたようですから相当古いでしょう。大正年間に出来たんじゃないですか。

司会 病気になる、もう、そこが頼りで……。

高良 塩屋か仲尾次ですね。それから名護ですね。

司会 昔は戸板で病人を運んで行つたと言うことを聞いたことがあるんですが……。

高良 それはよくわかりませんが、タンカなどというものはなかった時代ですね。

司会 われわれの頃も病院はなかったん

ですよね。その頃から塩屋にしかなかったんですが、その他に、当時の社会事情のことで皆がもう忘れてしまってよく判らないことや珍しいことなどないですか。

高良 あんまりないですね。

司会 例えば、東は大宜味みたいに、餓死騒ぎあったとか、そんなものはあまりないですよ。

高良 やっぱり、こっちも餓死（飢餓）というものはあったんですね。それで、ソテツ、私なんか大いにソテツを食べました。

司会 それはいつ頃ですか、大体。

高良 僕の12～13歳の頃ですね。

司会 社会全体に……。

高良 大概ですね。

司会 社会全体に餓死がおこる原因は台風ですか。

高良 台風ばかりじゃなかったですね。イモ作りをするにも耕地面積は少なかったですからね。又、貧乏人は、毎日の金銭に追われてわりとイモを作らんもんだからね。今の時代から考えると毎日あんなに死にもの狂いに働いて、それで金がないということはおかしいですね。当時は物価も安かったけど、日常の賃金が安いものだからね、精一杯働いて50銭ですからね。まあ普通は25銭から30銭ですよ。これでは家族を養えない、税金は出るし、昔から税金はでますからね。今の村民税、村税がでず、地租付加税ですね。地租税とか、付加税とか、県税、国税、赤紙、青紙ですね。

司会 今の税金より種類は多かったですか。

高良 そうですね、種類は多かったですね。

村 政

司会 高良さんが役場に入られたのはいつ頃ですか。

高良 昭和16年ですね。宮城の区長を3年間やらされて、4年目に役場に入ってくれと頼まれてね。

司会 あの頃の村長さんは？

高良 知念定馨さんでした。

司会 助役は

高良 助役は、新垣ゼンポウさん。

司会 ああ、ゼンポウさん、はい分かります。有銘の方ですね……。あの時の議員は選挙ではないでしょう。

高良 推薦です。大概区長あがりか、字から推薦されて、選挙というものはありませんでした。

司会 字からの推薦ですか。本当は選挙しなければならなかったはずですがね。推薦でね。議員は何名位おりましたか。

高良 12名、12名ですね。一番村長選びが難しかった。村議の12名で村長を選ぶんです。議員が2つに割れたためにクジを引いた場合もあるんです。宮城の栄昌さんと川田の池原善忠さんがクジを引いて、善忠さんに当たった場合がある。

司会 あの時の議長は村長だったそうですね。

高良 議長は村長、それから助役も議員でした。12名の中の2人はもう議員に入っ

ている。

司会 村長も議員の中から選ぶんですか。

高良 そうです。

司会 我々にはよくわかりませんが、婦人会長も男がやったそうですね。

高良 東校の校長は平良、川田、宮城の連合した学区の長でしたから、学区の婦人会長も青年会長もみな校長先生がやっていましたね。

司会 なるほど。

高良 これは事実ですよ。我々の青年時代ですから、まだそう長くはなりませんよ。

司会 校長が婦人会長……。

高良 そうです。それで、それにまつわるエピソードがあります。大泊が高江の行政区に編入する陳情書ですね、大泊が高江に便利だから高江の行政区域に大泊をくっつけてくれ、という陳情書の宛名に、大泊に居た新里という学者が（ちょっと教養のある人、昔の学者かな）が〔久志村長―比嘉マンショウ君〕、それから学区連合青年会長〔校長―新城げんとく君〕と書いてたが、この「君」というのが問題になってね。「君というのは何事だ」、「村長君・校長君というのは何事だ」って怒ったそうですがね、このタンメーは「君に忠」といって「様より君が偉い」といって頑張っしょうがない。道理では様より君が偉いんだといっってね、大問題になってね。青年会でも、何回も集まったことがあるんです。大正7～8年の頃だと思いますが、面白かったですね。僕等は青年に入っていましたからね。

司会 あの頃魚泊はどの位の戸数があり

ましたか。

高良 魚泊は今より少なかったですね。少ないといっても少しですがね。

司会 大泊は？

高良 大泊はそうですね、20戸位。

司会 そんな沢山ありましたか。

高良 大泊は、ほとんど川田に来てるとか、泡瀬あたりに越してる人が沢山居るしね。

20軒位はあったと思いますよ。

司会 ちょっと話を変えますが、この辺の人達が学校を卒業して軍隊に行くとか、本土に働きに行くとか、そんな場合、言葉に不自由するとか、習慣の違いで暮らしにくいとか、そういうふうなことは有りませんでしたか。

高良 私なんかの時代からはあまり言葉に苦しむということは感じませんでしたね。しかし同年輩の紡績に行った女の人達は大変軽蔑されたそうですね。軍隊は勿論のこと苦しかったそうですよ。我々の時代でも表現がうまく出来ないもんだから「このやろう」と言ってよく殴られたもんです。しかし、そうですね、昭和の始め頃か、中頃までは、沖縄人と朝鮮人には宿も貸さないと看板まで貼られた場合も有りますからね。これは、言葉ばかりでなく、生活様式などが合わなかったからでしょうね。

司会 本土で働いて実際の経験の中で、何かそういうような差別をされているという感じを受けたことはありませんでしたか。

高良 私個人的にはあんまり不自由は感じなかったですがね。

司会 さて、一応お聞きしたかった事は
大体これで済みましたが、参考までに、高
良さんの覚えていらっしゃる「久志口説」
をお聞きしておきたいと思いますが……。

高良 そうですか。じゃ参考までに……。

久志口説

1. 今度新旅 名護まじり
た村分とる 久志辺野古
うふらまがい ゆすまがい
番所前なちよる 瀬嵩村
2. かねくの広さや てまがねく
てまのあさぎん はいみぐて
浜のながさや かにちゃ浜
八重の先々 あぶの村
3. 松山くさてぬ 嘉陽村
さんに登とる 天な村
有銘まがいや ゆすまがい
まへに向かとり 慶佐次村

4. 平良うりぐち 橋かけて
なだの美らさや 川田村
村のいちはて 福地村
川田前浜 船三じゅ浮きて
じるが先なゆら さだみぐりさ

司会 高良さん今日はお忙しい処、長時
間大変御苦労さんでした。

百周年の時は現役の顧問ですからね。

高良 それまで生きていられるかどうか
な。

司会 高良さんは、僕達より長生きしま
すよ。

高良 生きていられたら名誉だけど……。

司会 再来年の5月24日が百周年ですが、
まあそれまでガンジューにしてください。

今日は本当に有り難うございました。

高良 いいえ、何もお役に立ちませんで。

座談会（昭和61年9月13日）

司 会 伊集道男

出席者 金城政信、宮城徳善、桑江常盛、
宮里時次

司会 本日は東小学校百周年記念の記念誌を発行するために、座談会を開催したところ、多忙の折りにもかかわりませず、お集まり頂きまして誠に有り難うございます。

お話をさせていただきます内容につきましては、昭和前期の社会のようす、子ども達の遊びや勉強、学校等の様子についてお願いします。

お話をさせていただきます前に自己紹介をお願いします。

金城 川田出身で明治40年生まれ、高等科を卒業したのが大正13年、小学校を卒業したのが大正元年

宮城 平良出身で大正3年生まれ、大正10年川田尋常小学校入学

桑江 平良出身で大正6年生まれ、私が小学校に入学したのは、東村が久志村から分村した大正12年でした。

宮里 平良出身で明治42年生まれ。

司会 皆さんの子どもの時代は大正から昭和にかけての時代ですが、そのころの服装についてお聞かせください。

宮里 簡単な着物で洋服はありませんでした。

桑江 男女共カスリの着物でした。下着も小学校の頃は無く、中学校になってからだったと思います。中学校になってから学生服を着けました。

それでも、なかには学生服を買えなくて、学生服を着ている人をうらやましく思ったものです。

金城 履物は無く、全員裸足でした。

宮城 高等科2年までは裸足に着物でした。同級生に2人だけ洋装の生徒がいました。

司会 お正月にゲタをはいたということではなかったでしょうか？

桑江 お正月用のゲタを作る為に山に入り、適当な木を切り自分でゲタを作った。ゲタの紐は自分で作る人もいたし、買う人もいた。

金城 散髪は自分の家で殆どした。バリカンで散髪はしたんだけど両手を使うバリカンでした。

司会 当時の子ども達はどんな遊び、どんな手伝いをしてましたか？

宮里 学校から帰ると直ぐかまを持って草苅とか山に竹を取りにいった。

金城 学校での遊びは、主に手まり、跳び箱、竹馬等の遊びでした。

学校から帰ると殆ど草苅でした。でも草を刈る前に水泳をしてから草苅をしたので楽しいこともあった。私は朝も草苅にいった。

宮城 1年の頃から山にいった。日曜日に木をきりそれをアカサー(40cmに切り割っ

たもの)にして置いて、月曜日から土曜日の毎朝運んだ。

草苅は友達同士で行き一束づつ草を刈り集めて、チカユシエーという遊びでしたが、これは一種の勝負ごとで一番近くまで鎌を投げた人が集めた草を貰った。負けた人は又自分の草を刈りに行った。楽しい遊びでした。

司会 どの家畜が養われていましたか？

宮城 殆ど山羊でした。

金城 馬や鶏もいました。

宮城 山羊や馬から貴重な肥料を得ることが出来た。

司会 勉強についてお聞かせ下さい。

宮里 勉強は殆どしなかった。

宮城 部落の一角所に4～5人集まって勉強した。

金城 勉強する時はジール(いろり)の側でやった。

司会 灯りはどんなものでしたか？

宮城 最初は角ランプを使って次にフヤランプになった。フヤランプには3分、5分、8分ランプと種類があった。

金城 8分ランプを使っている家は金持ちの家でした。

司会 当時の村の生活の様子をお聞かせ下さい。

金城 当時の川田の場合は、農業だけの専業農家は5～6件で、キビ、イネ、イモの3作でした。多くは農業と林業の兼業でした。

桑江 山稼ぎで一仙3厘の薪を作り生活にあてた。畑は殆ど川田の人の所有で伊是

名の人々はそれを小作していた。

宮里 所得についてはキビ収入と山稼ぎからの収入があった。

金城 漁業を専業としていたのが2世帯あった。シーザーの木をくり抜いて船を作っていた。イカがよく釣れとてもいい収入源になった。

司会 産業についてお聞かせ下さい。

宮城 しいて言えば養蚕があった。キビ、イモ、米……

司会 食生活についてお聞かせ下さい。

宮里 食事は3度ともイモでした。

宮城 イモのおかゆもあり……たまにお米があると雑炊でした。

金城 昭和になり米の2期作が出来るようになってから、1日に1回は米の御飯が食べれるようになった。

昭和の7年～9年まで私は川田の共同売店に勤めてましたが、正月には100斤詰めの米俵、70俵が売れた。それでも昭和の初期は米が十分に無く、一般の家庭まではいきわたらなかった。

司会 当時の村の行事についてお聞かせ下さい。

宮里 アブシバレー(悪虫払い)、海神祭、7月のエイサー、8月の村芝居があった。

桑江 伊是名の方では、私が子どもの頃は虫集みが有りました。それは他の部落で行っているアブシバレーのことです。それから3月3日は女性の遊びということで、炊事、家事は全部男性がやったものです。

金城 川田のアブシバレーはアガイ(東)組とイリ(西)組みに分かれておこなった。

5月の海神祭は平良、川田のハーリーと相撲があり、全て対抗戦であった。8月には村芝居があり一箇月位練習をした。その間婦人会が炊き出しをおこなった。村芝居の主役達はニーサー会である26歳迄の者が、村芝居全てを引き受けておこなった。

司会 学校の様子についてお聞かせ下さい。

金城 校舎は木造づくりの1棟でした。当時校長先生は今帰仁村出身の新城先生でした。記憶に一番残っているのは比嘉福吉先生です。先生は運動もうまく、授業熱心で厳しかった。そして子どものことに熱心でした。

宮城 私の場合は大正10年に1年入学した。1・2年は単式で3年からは複式で、1・2年の教室はカヤ葺で土間でした。

其に当時は修身科や農業科がありとても厳しく、礼儀作法や勤労精神が培われました。

桑江 当時各部落に先生方が下宿をしたり間借りをしたりして地域の住民と一緒に生活をしていた。

司会 通学についてお聞かせ下さい。

桑江 私達の先輩達は天銘校(現有銘校)に通学していたらしい、なぜなら東校に行くには、新川、推上川、福地川と三つの川があり渡ることができなかった。

我々の時代でも川を渡るのは困難で着物の裾をまくって川を渡った。上級生は下級生を肩車にして渡した。

司会 当時の教師についてお聞かせ下さい。

宮城 各部落に担当の先生を割り当て、その先生が遅くまで子ども達の学習指導をやってくれた。

桑江 師弟関係は絆が深かった。

司会 皆さんの青年時代は戦争との関わりが深かったんだと思いますが、戦争と学校との関わりはどうだったのでしょうか。

金城 昭和19年に米軍が上陸するという事で、陣地構築として学校にタケ部隊がきて本部にした。人数は400人ぐらいでした。タケ部隊の後にタマ部隊きた。兵隊がきてからは学校の機能は無かった。

司会 本日は大変有り難うございました。東校の歴史、東村の歴史として記録にとどめたいとおもいます。



座談会（昭和61年9月27日）

司会 玉城勝郎

出席者 比嘉宗幸（百周年記念誌編集委員長）
玉城国昭 宮城昇 久高将順 大
城清 知念晨喜 金城マサ 吉本
由子 新城利雄

比嘉 100周年を記念して記念誌を作ることになりました。

本日はお忙しい中ご出席くださいまして、大変有り難うございます。皆様には、幼い頃の思い出を語って頂いて、いい資料が出来ますよう御協力よろしくお願いします。

司会 今日は戦後、特に敗戦直後を中心にして御話をおねがいします。最初に自己紹介をおねがいします。

久高 私、久高将順です。昭和2年6月

10日生まれて宮城の出身です。

玉城 私、玉城国昭です。昭和3年3月

5日生まれて川田の出身です。

大城 私、大城清です。昭和2年5月21日生まれて平良の出身です。

吉本 私、吉本由子です。昭和2年6月20日生まれて川田の出身です。

金城 私、金城マサです。大正5年11月24日生まれて川田の出身です。

宮城 私、宮城昇です。大正13年2月8

日生まれて平良の出身です。

新城 私、新城利雄です。大正6年8月11日生まれて川田の出身です。

知念 私、知念晨喜です。大正11年3月31日生まれて宮城の出身です。

司会 どうも有り難うございました。次に敗戦前後の様子について御話をおねがいします。

久高 私は当時満洲の航空隊にいましたけれど終戦の2カ月ぐらい前からは飛行機は1機もありませんでした。全部沖縄戦で使われてしまったと思います。8月20日ごろに日本が降伏したことを知りました。その後捕虜になり4年間収容所生活をしました。

知念 私は沖縄戦に参戦しましたが、糸満市あたりで捕虜になりました。捕虜になったときはケガをしまして、捕虜収容所にくるまで意識を無くしていました。それから20日ぐらいは捕虜収容所の病院にいました。その後、北谷からハワイに移送され米軍の海軍病院に2カ月程入院しました。ハワイには3年7カ月間いました。沖縄には1948年に帰ってきました。

宮城 私は沖縄戦で負傷し意識不明のまま真米田の野戦病院に收容された。それから屋嘉收容所に送られ、そこに2～3カ月居たと思うんですけど、正月前になってから開放された。

金城 食糧を確保するのに大変苦勞をしました。食糧の蘇鉄を取りに行ったときに捕虜になりました。その時私は妊娠してまして、捕虜になった私を大切に田井等の収

容所にはこんでくれました。しかし捕虜収容所での生活は厳しく身の危険もあったもんですから、50人ぐらいで収容所から抜け出し自分たちの避難小屋にいったんですけど、ここも米軍が大勢居て、ここもダメということで根路銘の捕虜収容所で捕虜になりました。

新城 大体の記憶をたどってみますと、私達川田の人達が避難したのはハタナバーと言う所でした。昭和20年の6月頃米軍が侵攻してくるという情報がはいり、取るものも取り敢えず、避難地を出まして、宇出那覇を通り大保を通して大宜味村の根路銘の収容所に行きました。根路銘には主に川田の人で、宮城や高江の人達は喜如嘉、高里の収容所、平良の人は田井等、真喜屋の収容所、有銘の人は羽地、久志だったとおもいます。

しばらくしていると、収容所を管理しているダグレスという隊長がいて「君は明日から根路銘にいて学校をつくりなさい」と言われ、根路銘の部落にいて学校は作ったんだけど、教材も本もないし殆ど子ども達と遊んでました。それからしばらくして塩屋にいました。その学校は校長も職員もいました。戦後の学校の始まりは、何もない時代、食べ物もない、組織や部落の機能もない時にさいしょに出来たのが学校でした。

先ずなにをさておいても子ども達を教育するんだと、そういう思いが当時の人々に強くあったとおもいます。

大城 私は護郷隊にいました。恩納岳で

国頭村、大宜味村、東村の兵隊約四百名ぐらいだったと思いますが、6月1日頃に攻撃され3カ月ぐらいかけて有銘のサンカク山にたどりついた時に敗戦を知りました。そこで武器、衣服を穴を堀埋め解散ということになりました。衣服を避難小屋から避難民の着物を探し、それを着てそれぞれ帰りました。私は有銘の部落で運よく家族と合うことが出来、田井等の捕虜収容所に収容されました。

玉城 私は戦争の時は鉄血勤皇隊、いわゆる県立の3中の生徒でした。生徒でありましたが志願と言う形で伊豆味の707-1部隊に配属されました。

本部半島は4月の11日から1週間ぐらいの戦闘ですっかり米軍にとられちゃって、生き残った連中は第2の陣地ともいふべき名護岳にいったんだけど陣地というのは名ばかりで負傷兵ばかりでどうしても無いから、3中出身の連中は自分の郷里に帰りなさいといわれた。風の便りで川田の人達がバタナバーに居るということで、そこまで行って家族に会った。それから、根路銘の収容所生活でした。

吉本 私は16歳の時に内地の落下傘につかう絹を製造する会社に居ました。都城で大空襲にあいました。屋根すれすれに機銃での襲撃で、幸いに防空壕にいたので生命は助かりました。

それから三股という田舎に避難して、その田舎の人達にあたたかくもてなされました。

司会 これまでは捕虜生活と戦後の生活

のようすを御話していただきましたけれど、今度は捕虜から各字、各村に帰ってきてからの生活について御話をお願いします。

玉城 軍の配給は人々が部落に帰ってくると直ぐはじまった。

金城 部落とか班でお互い協力して家づくりがはじまりました。今日は何処のお家を作るというふうに、イーマールーでそれぞれのお家をつくっていきました。衣服はHBTでつくって着けてました。食べ物は、本当に苦しい中で配給をもらって全家族をまかなうため、チンパンブー（つわぶき）の葉等をゆでて、配給でコンビーフが多かったので、それと混ぜて炊いて食事をしました。それに配給から貰っためりけん粉でだんごを作ってたべました。

大城 戦後の平良には一件だけ戦火をまぬがれたお家が有りました。たしか儀保さんのお家だったと思います。部落のあちこちに戦車の残骸や銃弾の跡が無数ありました。

道路は戦車により全て破壊され、配給を取りに大宜味村に行くにも随分苦労しました。

久高 私が帰ってきたのが昭和24年の9月だったんですけど、配給は米だけだったと記憶してます。帰って来た時に母が以前に配給のあった卵の乾燥の粉を大事に保管していて、それを私に食べさせてくれた記憶があります。

戦後4年で相当復興していたんだなあーと感触を受けました。それから、配給を貰うために長蛇の列でした。そしてもらった

メリケン粉でだんご汁やてんぷらをつくりました。てんぷらを揚げる油はオイルをつかいました。

新城 衣服のほうは、殆どアメリカの軍服を払い下げてもらおうと、これを母親達が工夫して長いのは切ったり、あるいは全部はずして洗ったりして、子どもの体型に合わせて利用してました。靴は兵隊さんのお下がり、子どもも先生も同じくつをはいていた。それから住まいですけど、最初は戦火でなにもないから、焼け残った家に寄せ合って生活しました。しばらくするとテントの配給があり住まいとした。其がだんだん落ち着いてくると本格的な家づくりが始まりました。最初は自分達の住むかわぶきの家を作り、次に学校をつくりました。

司会 今までの話と関連しますけど、戦後の厳しい生活のなかでの学校関係について御話をおねがいします。

新城 部落に帰って来てからマラリヤに大変苦しめられました。捕虜収容所の時もそうでしたが、戦争で死ぬのも多かったけれど病気で死ぬのも多かった。各部落毎日葬式でした。今日は何処の誰が今日は何処の誰かと、それが一つらかった。栄養失調の子ども達、栄養失調から来るいろんな病氣、医者もいない薬もないから何の病氣か分からないままに高熱と下痢でたくさんの方が死んでいった。

司会 医療の件について少しふれていただきたいのですが、生活の厳しい中で学校は先程、住宅と一緒に作られていったんだけど、実際、病名の分からないまま多くの

方々が亡くなったんですか？ 医者にかかるといことは全くなかったんでしょうか？

大城 殆どマラリヤで死亡したんですよ。

知念 下痢ですから、今で言えば赤痢みたいなものです。

司会 医療機関はゼロということですか？

全員 はい、ゼロ

司会 米軍がみてあげたということはないですか？

大城 平良にちょっとした医療の出来る所があったんですけど、ただお医者さんが誰だったかは記憶にないです。

司会 次は話を変えまして、戦後の教育の流れ、その変遷についてお話をお願いします。

新城 1945年の8月に殆どの人達が避難地から帰ってきます。その頃に諮詢委員会ができて、文教部というのができて初等学校が始まった。

初等学校ができるまでの半年間は各部落での部落学校で子ども達を教えた。その頃は川田の方は5～6人の教員経験者がいましたので、それなりに指導ができました。

しかし、平良、宮城は1～2人の教員で指導をしていました。その後諮詢委員会ができて川田の方へ平良、宮城の子どもたちが合流して初等学校ができた。

司会 部落学校というのは、小学校、中学校の学年編成はどうなっていましたか？

玉城 川田はちゃんと学年編成がなされてました。

司会 1年から何年までですか？

玉城 高等科2年まで、平良の方は下級

生と上級生とにわけてました。1年、2年生というのは半分子守みたいなので、勉強するのは4年以上の子もでした。

平良はセツ先生が高等科、下の方はハツ先生が指導してましたね。

宮城 私は多分高等科の進学担当をしていたとおもいます。教科は数学と農業で、ツネ先生が英語でした。教材は文教部からの見本があって、見本に基づいて授業を行ったんですが、とても苦勞をした。ウイバルの松の木の下で賛美歌を歌わせて時間を過ごしたことも有りました。農業の時間は焼け山の開墾をし、そこにダイコンや芋を植えました。芋は大分イノシシに食い荒らされました。

新城 校舎はテントでした。テントの校舎を今の小学校の所に並べてつくりました。2・3カ月テントの校舎で過ごし、その後に父兄の手で茅ぶきの校舎をつくりました。校舎の壁はテントを切って使った。床もない、机もない、机がわりに箱を各自家から持ってきて箱の上で勉強した。

司会 校舎はすべて部落の人達の道具や資材の提供で作られたんですか？

100%そうですね、村のほうからも諮詢委員会、アメリカからもなんにもない、部落の人達であれだけの校舎を作ったんです。

玉城 昭和22年10月に50センチぐらいの台風がきて、民家は随分壊されたけど校舎の被害はすくなかった。

新城 みんな適当な箱を家から持ってきて箱の上で勉強した。床もない地べたに座って勉強した。雨が降ると授業は出来なかつ

たです。

それに殆ど作業で、当時、運動場には爆弾があっちこっちに有って、毎日爆弾を埋める作業でした。

司会 教育を進める中で、最初は独自の教育の進め方でよかったと思いますが、米軍による教育への指導が強くなってきたという感じがするんですけど、どの辺から米軍が強く出てきましたか？

新城 教育制度はアメリカからの指示もあったけど、教師は日本の教育じゃないとだめだという認識を十分持っているから、別に指示には従わなかったし圧力も無かった。しかし文教部などは相当圧力があったんじゃないかな？

司会 そうすると、教師に任されていたんですね？

玉城 辺土名地区はダブルスという司令官がいて、衣食住から教育まで彼の意のままで、教育に関してはあまりうるさくなかった。

司会 そうすると地方司令官の判断で辺土名地区の運営がなされていたのですか？

玉城 全くこの人の勝手では無く、軍政府からの指示も有ったみたいです。

司会 話はまだ沢山あると思いますが、次に現在の子ども達と、皆様方の幼少の頃の子ども達の様子を御話願います。

知念 自分の時代は学校の先生というのは神様とおもっていました。今の子どもはそうじゃないと思います。

司会 昔の子どもも今の子どもも、この点は変わらないなあと思うところはないで

すか？

宮城 先生が一寸こうだと注意したら素直に従う素直さは昔と変わらないと思います。

今、よく話題になるいじめについては、実態があるか無いか定かでは無いけど、気になる。

久高 昔は殆ど軍事教育だったので、体罰は毎日あったので当たり前で通っていた教科は昔より随分多いみたいな感じがする。

大城 家庭での手伝いをするのが、少なく成った感じがする。以前は朝起きたら水くみ、学校から帰って来たら草取り、薪とりと家庭での手伝いを一生懸命やった。生活の環境は変わっていますが、勤労精神を培うために家庭での手伝いを積極的にさせる必要があるとおもいます。

金城 現在の子どもはあまりにも恵まれ過ぎるとおもいます。

以前に母と子の集いに参加する機会があったんですけど、自分の親の仕事さえ分からない子がいました。その中でこづかいを多く要求した子ども達がありました。親と一緒に畑へ行って、仕事の苦しみを知ると自ずから小遣いを多く要求してはいけないと思うようになるとおもいます。

パインの最盛期とかキビの出荷時期には子どもに手伝いをさせる、その中から親の

苦しみも分かる様に成るし、忍耐力も養う事が出来るとおもいます。

宮城 私が給油所でアルバイトに時々高校生を使うんですが、家で農業の手伝いをしている人はすぐ分かりますね。仕事の指示をしなくても自分で考えてする。家で農業の手伝いをしないで遊んでいる人は自分で考えて仕事を仕様としない。

吉本 勤労精神を培うことにより忍耐がでてくるとおもうのです。

玉城 勉強する教科が多すぎると言う意見が有りますけど、確かに我々の時代に比べてやるべきことが多い。

それは社会が複雑になり変動が激しくなっている。そのためにその変動についていけるよう、基礎と成るべきことを身につけなければならない。我々の場合は単純に強い軍人になればいいみたいなことだったんだが、その他もちろんあるけど、そういうふうになんにも沢山やる必要なかった。今の子ども達は勉強がいそがし過ぎる。

司会 ハイ、有り難うございました。本日は大変貴重な御話をしていただきまして感謝申し上げます。本当はもっと時間をかけて、お話をお聴きしたいのですが、本日の予定の時間となりましたので閉めさせていただきます。

本日は誠に有り難うございました。

『小学校授業料の全廃』

琉球新報 明治36年4月17日

明治5年の学制発布以来、諸教育改革の中で、就学率の向上をめざしての授業料の全廃であろう。

就学不履行に制裁を附すとの法を、当時の人たちはどのような気持で受け取ったのであろうか。

琉球新報 明治32年11月15日

『平良尋常小学校の就学率

51・2%に』

明治33年調べによると平良尋常小学校の就学率が53.2%になっている。

前年度の就学率27.5%からの急増率は何を意味するものであろうか。

他の学校（門切を考えて）とほぼ同じくらいの就学率に伸びたことや、増加率の大きいことをみると、強い行政指導が啓蒙活動があったことが予想される。

それにしても、高等学校への進学率が九八%も越える今日に比べて隔世の感あり。

琉球新報 明治33年11月13日

『平良尋常小学校六代校長

安谷屋仲作氏特別賞与』

明治30年代の教員の給料制・昇給制について詳しくは知らない。

平良尋常小学校の6代校長の安谷屋先生の名前が特賞の欄に載っておられるので、紹介までに。

『沖縄の国語の学習』

沖縄方言と共通語の格差の大きさが、沖縄での学校教育の大きな課題になっていたことは当然であったであろう。

後に、「沖縄読本」という方言と共通語をあわせた教科書も作成されていくが、この新聞記事もその過程を表わしたものであろう。

ママ ウツチヤナシ ジナトウビーンダ
今、時計は何時になっていますか。

琉球新報 明治36年1月5日

『村頭の異動』

沖縄の町村制の実施が明治41年、それまでは「間切」の制度である。

東村も「有銘・慶佐次」「平良・川田・宮城」で一間切になっていたようである。

村頭の「宮城蒲八」「宮城慶門」の名前もみられるけど、もしその子孫に当る人がおられたら知らせて下さい。

琉球新報 明治36年2月7日

『奈良原知事の高齢祝賀会』

県施政において、後の自由民権の父と呼ばれた謝花昇と対立した奈良原知事も一般県民から古稀の祝を受けている記事を後世からみると少なからずも奇異の感あり。

琉球新報 明治36年2月27日

『台風で山原船難破』

久志間切平良村の兼島牛さん所有の琉球形七反帆船が、宜野座津口に停泊中に台風のため浅瀬に打ち上げられるとの記事。

兼島さんの子孫が平良区に住んでいるのでしょうか。

琉球新報 39年11月23日

『東村（久志・金武）と与那原の対立』

山原と与那原が山原船が交通基調であったころの話。

薪代が「杣山」の地代を払うために二厘の値上げの問題で、山原と与那原の対立が起ったことの記事。

生活必需品である薪の値代であるために、両方にとって大変な問題であったであろう。

「杣山」が私たち村民のこんな形で表われるのをみるにつけ、謝花昇の「自由民権運動」が脳裏をよこぎりの私だけではあるまい。

琉球新報 明治41年 5月11日

『高江校の創立』

昭和41年6月1日、久志村川田校高江分教場が開設されたことがニュースになる。

人里離れ交通の便も悪い高江荒川の人たちの様子を「台湾の生蛮」に比喻しているところはいささか大げさなり。

公教育が全県すみずみまで行きわたっていく過程が感じとれる記事である。

琉球新報 明治42年 3月31日（水）

＝『物産展』で川田の仲村渠利作さん入賞＝

昔も今も産業育成に力を入れることには変りがないようだ。

明治42年 8月の国頭郡の重要産物の審査の結果が新聞記事になる。

その中で、久志村字川田の仲村渠利作さんが「スクガラス」の部門で入賞。

農業中心の現在の東村で漁業の部門での入賞は今昔の感あり。

琉球新報 明治42年 8月20日（金）

『県道・郡道の計画』

～瀬嵩より平良を経て渡野喜屋まで～

村費又は村有財産を売却し34万円の資金をもって当ることに、賛否相争うなかで計画が進んでいる様子と、久志村のみが賛成との記事。

山原船が交通の中心であった当時、陸上交通路の整備に取りかかり始めたのは時代の変遷の一点であろうか。

琉球新報 明治42年10月13日（水）

学校教育概要



通称「おはよう坂」

校内スナップ



下の庭の「うさぎ小屋」



東側から見た給食室



図書館



「中庭の梯子」



なつかしい「つり鐘」



池原貞雄先生琉大学長就任記念
「向上の一途に終点なし」



整備された運動場と体育館

ホ. 設置要領

(1) 仮設舞台

- ①現舞台を180cm伸ばす(高さ100cm)
- ②農協パイン選果場の箱を土台にする(箱16個)
- ③パイン箱の上にベニヤを張る・ベニヤ13枚(90×180)

*問題点

イ. パイン箱が高さ55cm・長さ145cm・横105cmで舞台の高さに合わせるのに問題があるため会議用テーブル・ピーマン出荷箱等の利用も検討の余地がある。

(2) 寄付者席

- ①パイン箱をそのまま土台に利用する(箱12個)(高さ55cm)
- ②ベニヤを張る・ベニヤ25枚(120×240)

(3) 楽団ボックス

- ①農協購買の板木を利用する(約40枚)(高さ15cm)
- ②ベニヤを張る・ベニヤ8枚(120×240)

予 算・・・ベニヤ(120×240)	78,200 円	(1700 円×13枚)
釘	2,000 円	
木材(トウバイホー)	6,000 円	(600 円×10本)
計	86,200	

(4) テーブル・椅子等

- ①テーブル 130～140 台 必要(舞台12・一般席81・花壇30)
(受付3・オードブル10)
- ②椅子 約 600 脚 必要(一般席486・役員・来賓25)
(寄付表彰20・吹奏楽30・受付6)

*テーブル・椅子は農民研修施設・老人センター・教育委員会
のを中心に借用する。現状の数は把握してないが足りなければ
各区の協力を仰ぐ。

予算集計

種 目	金 額	備 考
会場案内	40,000	
駐車場案内	5,500	
校門アーチ	60,000	→ 予報月幕 6,000
花	225,000	55,000 円
横看板	50,000	
紅白幕	20,000	借用が可能だが量を揃えるのが困難
テーブルクロス	25,000	国体で使用したのも利用できる
会場設営原材料	86,000	
その他	20,000	+ 写真 50,000
計	531,500	

へ. 展示物

(1) 写 真

①歴史を振り返る写真をパネルにして展示する。(校舎の変遷)

(2) 絵 画

①東小学校の以前の風景画を展示する。(知念氏)

(3) 書 道

①「飛躍」の文字を正面左右に配置する。

予 算	・・・写真(引き伸ばし)・・・	56,000	円(8000 円×7 枚)
	絵 画(謝礼)・・・	20,000	円(1展)
	書 道(材料代)・・・	6,000	円
	計	82,000	円

ト. 体育館入口花壇

(1) 会場入口を花で埋める

①階段状の花壇を準備する。

②受付の周囲も花を配置する。(プランター)

③花は金盞花を主とする。

④PTAの協力を得、各家庭で準備した物を利用する。

⑤校門から会場までの花の道をつくる。(プランター3列)

⑥プランターは学校で100個花を準備する。

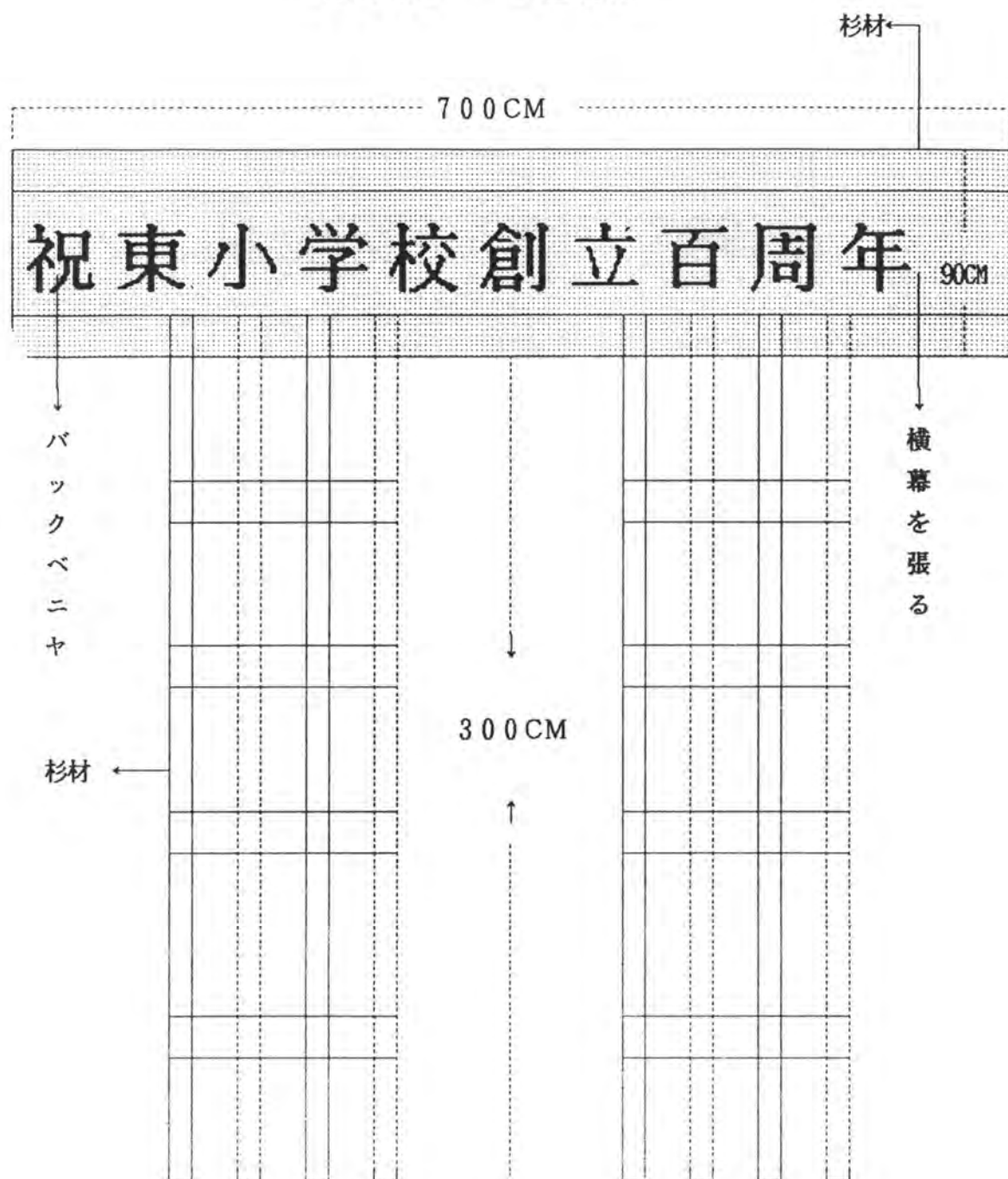
予 算	・・・花 壇(3段もの)・・・	10,000	円(2500 ×4)
-----	-----------------	--------	------------

東小学校百周年記念式典会場設営動員計画 (昭和63年5月26日)

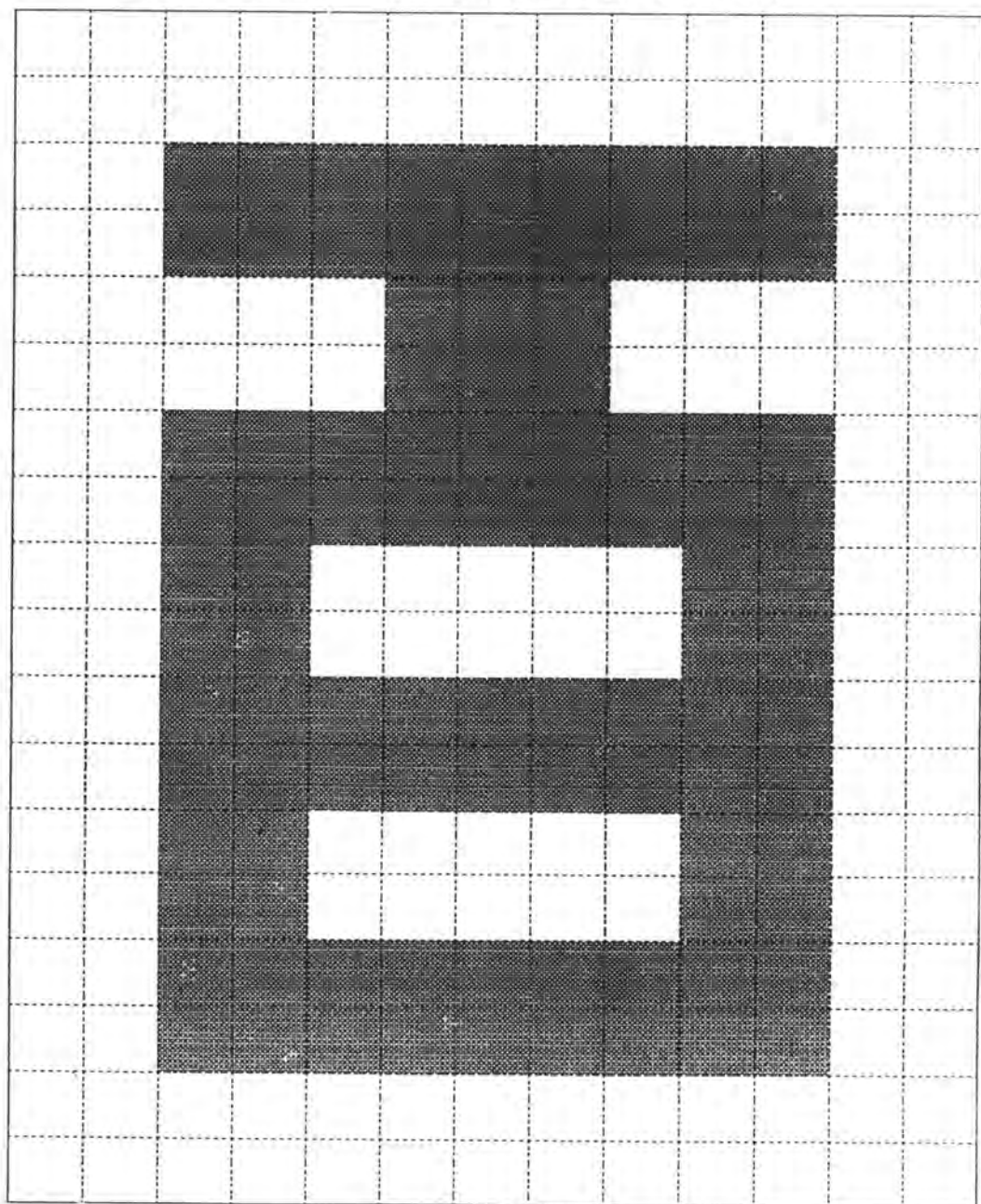
業務内容	担当団体	作業要領	用具	業務主任	備考 (人員配置等)
蘇鉄狩り	宮城PTA男子	作業場所→高江区 1トン車→2台	カマ	知念 展栄	人員 → 男子20～25人 作業場所→高江 (クババスウイ) 注・雨靴着用 役場のバスで移動する。
校門アーチ 作成	川田PTA男子 (A班)	別紙図面による	ハシゴ2 金ヅチ ノコギリ	吉本 健夫	人員→5人 (大工) アーチ巻は宮城男子合流 事前の準備→杉材10本 (浦崎) 25日に準備
舞台作成	平良PTA男子 (A班)	バイン箱運搬 南西工場トラック使用 ベニヤ等材料→東建設 材料運搬→東建設2トン 車	金ヅチ ノコギリ	城間 富弘	人員→15人 舞台作成後→花のハチマキ・舞台正面パネル設置
花運搬及び 飾り付け	平良PTA女子 宮城PTA女子	浦崎園→学校 運搬→浦崎のユニク使用		浦崎 直彦	1. 平良女子は浦崎震園ハウスで待機 2. 宮城女子は学校体育館で待機 3. 川田女子はグラウンダー配置後体育館に合流
椅子及び テーブル 運搬及び設置	川田PTA男子 (B班)	農民研修施設・平良区 老人センター・宮城區 から借用 役場2トン車 川光建設2トン車使用		奥本 辰雄	1. 人員約20人→終了後は体育館会場設営に合流・紅白幕設置 2. 農民研修施設・老人センター・宮城區 (椅子340・68・180) (テーブル68・34・30) 3. 椅子は前向きに配置する

業務内容	担当団体	作業要領	用具	業務主任	備考（人員配置等）
沿道 プラ ンタ ー — 配 置	各自で運搬 川良PTA女子 男子2人	各家庭プラントナーを運び 公民館前へ体育館玄関ま での飾り付け	男子→ペンチ2	吉本光子	1. 終了後→体育館の装飾・公民館入口の案内路の周囲も装飾 2. 生 花→平良安子（前日に準備） 3. 男子2人→花壇の設置
テ ン ト 設 置	平良PTA男子 （B班）	テント110張り 学校・役場・川田区 平良区・緑化組合 （1トン車2台）		池原憲男	1. 人員→15人・（中庭5張り・受付3張り） 2. 雨天の時2張り追加・計110張り準備 3. 中庭に設置テントは足を折って準備しておく 4. テントの足の足に借用元の表示をする
駐 車 場 ラ イ ン 引 き	宮城PTA男子	川田漁港 ビニールテープで区画	巻き尺 ビニールテープ 釘 金づち	宮城 準	1. 人員→5人（露秋搬入後に班をわけける） 2. 人員が足りない場合は平良男子テント班から応援させる
会 場 周 辺 清 掃	全 員	ホウキ等 （学校で準備）			各部署の業務が終了し、校内の の清掃を行う
全 体 指 揮				宮里 優	1. 写真・用具の準備

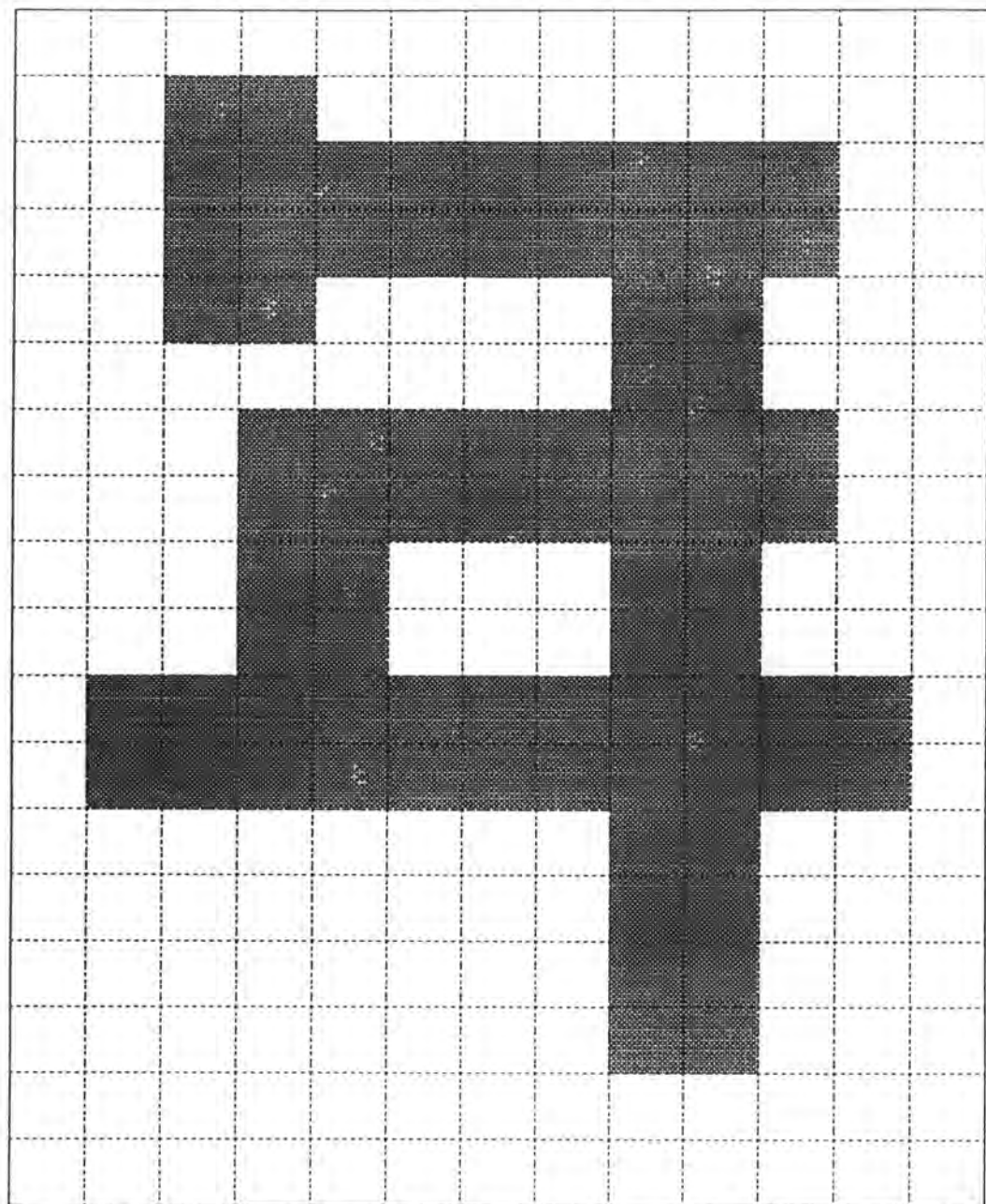
校門アーチ図面



花文字板 (縦→198CM/横→143CM)



花文字板 (縦→198CM/横→143CM)



資 料 編



池原貞雄先生「琉球大学学長就任」
昭和42年7月1日～昭和45年6月3日



「向上の一途に終点なし」の演題で母校で記念講演



学長就任の報告をする
伊集盛安教育委員長



奥さんも一緒に歓迎を受ける



児童生徒の拍手で迎えらる新学長

創立80周年スナッフ



式典の風景



川田区の「国頭サバクイ」



宮城区の「エイサー」



80周年の期成会役員



80周年当時の学校職員

創立70周年記念式典スナップ



木の葉のアーチ「飛躍」が偶然に百周年と同じ



屋外での式典
後の幕は「東国民学校昭和19年卒業生」の寄贈



期成会長あいさつをする
平良平助村長



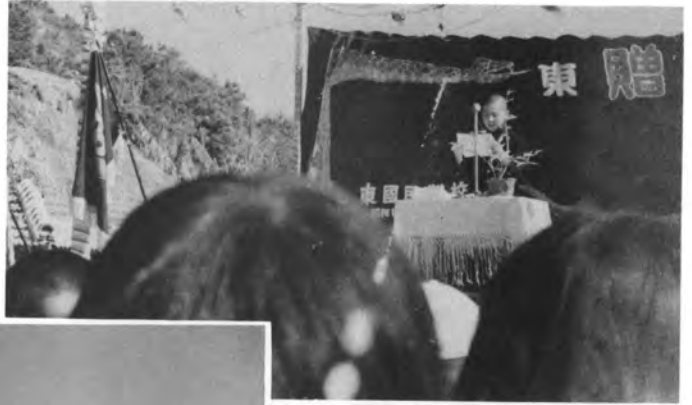
拶挨拶をする宮城栄昌大先輩



PTA会長あいさつ
吉本好助氏



式典風景



児童会長あいさつ
宮城 信也君



大きな声で校歌を歌う子供達
現在の校歌はこの時を記念してできた



表彰風景 受賞者



表彰を受ける中村亘先生



祝辞をのべる新里清篤立法院議員



新城利男先生



祝辞を述べる
安波根直成文教局長



宮城定蔵 辺土名地区教育長



式典風景 左側の山に現在の体育館が建っている



式典風景 手前は大城 博先生



式典風景

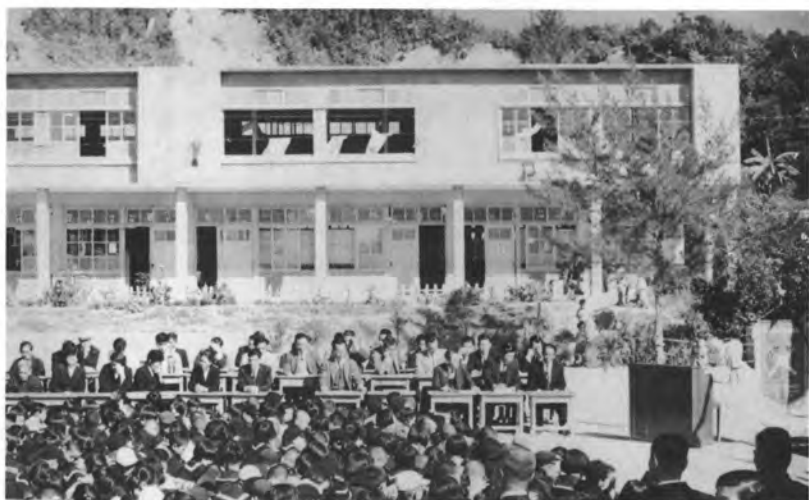


式典当時の校舎



優勝旗は十四期生が辺土名地区小学校野球大会での優勝（昭和34年）

け「オルガン」は当時学校に一台か二台あっただ



左に「勝るの宮」が見えている

大きなカジユマルの木の下で「青空教室」の授業もあった



写真中央 吉田賀盛校長



区民も多く参列された



運動場全景 整備のため児童も連日作業だった



フォークダンスを披露する
婦人会



30年前の高良輝忠氏



ダンスを披露する中学生・後の瓦屋は校長住宅と給食室



勇壮なる（川田巻棒）





金城康一
金城安一

比嘉博昭

金城 操

池原直吉



川田の巻棒





宮城のエイサー



70周年当時の学校職員



1955年（昭和30年）当時の東校教職員



70周年当時の教職員



創立70周年式典後（1955年）教職員とPTA役員



創立70周年学校職員



川田区生年祝い (1952年一昭和27年)



1954年 (昭和29年) 川田区生年祝い (13祝い)



1950年（昭和25年）（台風の跡片づけに集まった川田青年会）



川田青年会陸上競技選手団（1951年・昭和26年）
（写真左の女子青年団の旗が現在東村教育委員会に保存されている）

海軍志願兵検査通達書

延岡市大字 恒富修總倉 寮ニニ番地

三郎 長男

久高 将信

右海軍志願兵検査施行ニ付左記日時検査場ニ出頭シ本書ヲ以テ徵募官ニ届出ツヘシ

検査場ニ出頭シ本書ヲ以テ徵募官ニ届出ツヘシ

出頭 日時	検査場
昭和十九年九月十七日午前七時	延岡市 岡富國民學校講堂

昭和十九年九月 五日

延岡市長 三浦 虎雄



一誠實（何事もまごころでやりませう）
 一自治（自分の事に自分でやりませう）
 一規律（きまりよくやりませう）
 一協同（何事も心を合せてやりませう）
 一勤勉（よくつとめませう）

子供ニ學習ヲ習サセテ下サイ
オクレタリハヤヒキ氣ヲ、体ンガリ
スル事ノナイヤクニ氣ヲオボク下サイ
學校道具ノ不足ノナイ様ニ御注意下サイ
學級道具ニハ必ス名前ヲ書入レテ下サイ
子供ノ服装ニテ御アシンニ思ハレコ
トガアレバ直ぐ學校へオキキ下サイ

月 日	認 印	學校上家庭卜ノ通知事項
--------	--------	-------------

1997

昭和十一年

通知表

保 護 女	校 長	受 持
久高 三郎	新垣 宜昭	仲村 孝清

第

28

東亞當高等小學校

科第三學年

611

久高將信

[illegible]

[illegible]287

- 一、兒童ニ豫習復習ヲセシムルコト
- 一、學用品ヲ指ハシムルコト
- 一、兒童ノ身体衣服ノ清潔ニ注意セシムルコト
- 一、病氣其他止ムナキ用事ノ外ハ運動欠席セシメザルコト
- 一、時々學校ヲ參觀セラルルコト
- 一、兒童ノ發育狀態ニ絶エズ注意アリタシ
- 一、通信ノ認メラルタル時ハ認印ヲ捺ナレタシ

昭和十五年度

通
知
表

東尋常高等小學校

高等科第一學年

久高將信

[illegible]

東縣常高等小學校
醫學科第五學年
久高將俊

通信簿

昭和十
學年度

受梓	校長	保護者
西村正也	比嘉良和	久高三郎

										訓校	
月日										誠實(何事もまごころでやりませう)	
月日										自治(自分の事は自分でやりませう)	
月日										規律(きまりよくやりませう)	
月日										協同(何事も心を合せてやりませう)	
月日										勤勉(よくつとめませう)	
月日										學校ト家庭トノ通知事項	
月日										保護者の方へ 一、子供ニ親習ト復習ヲアセテ下タイ 一、オフレタリ、ハナビケレナリ、体ンダラ 一、スル部ノナイヤクニ強シクワケ下タイ 一、學校道其ノ不足ノナイ様ニ御注意下タイ 一、學校道具具々名額ヲ書入レテ下タイ 一、子供ニスルホトモアソビンニ思ハレルコトアレバ直ニ學校ヘオキテ下タイ	
月日										保証印者	

修 業
尋常科第五學年ノ課程ヲ修了セシム
コトヲ證ス
昭和十四年三月二十六日

業
昭和十四年三月二十六日

印 長 棧 房

裝	檢	休	身
118.8	長	身	
52.9	重	體	
64.3	圍	胸	
65.6	高	坐	
17.2	重	體	比
52.9	國	胸	比
52.1	商	坐	比
下	登	榮	
三	發	形	性
二	病	疾	狀
	症		胸
左	左	視	力
右	右	折	屈
五視	右	常	眼
王視	右	色	
三	辨	眼	
性母母一	現	眼	
耳	力	聽	耳
耳耳耳塞	現	耳	
密定	調	眼及鼻	
北	前	皮	
子	視	處	齒
	視	米	牙
三	與	牙	
六	與	牙	
七	與	牙	
	考	修	

出	缺	一	覽	學	業	績
授課日數	出席日數	欠席病氣	日數事故	遲到屢數	早到屢數	保護者認印
四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月
十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月
六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
合計						

領收證

一金 四円也

但し字宝城保十護者(會費)(四戸金)

右乙二領收帳也

昭和十六年七月十八日

東校保十護者會 幹事

久高正信

字宝城

久高正信殿

領收證

一金 四拾毫円也

但し字宝城保十護者會費(四十一戸)

右乙二領收帳也

昭和十六年七月十六日

東校保十護者會 幹事

久高正信(印)

字宝城

久高正信殿

賞狀

八百米一等 久高正信

右本大會ニ於テ頭書ノ

成績ヲ收メタリ仍テ茲

ニ之ヲ賞與ス

一九五五年十月二十日

東村陸上競技大會長

北嘉謙三



東小中校全集バレー選手派遣
旅費寄附者名

一 全 貳拾五円也 東教育委員会

一 全 五円也 平良共同店

一 全 五円也 川田共月店

一 全 五円也 宮城共月店

一 全 五円也 東雲業組合

一 全 五円也 宮城千藏殿

一 全 五円也 PTA会長

一 全 拾円也 東村役所

一 全 計一全六拾五円也

賞状

第一學年

石原すみ子

右は出席優良

につき頭書の通り

之を賞與す

一九五三年三月二四日

東中等學校長金城珍徳

賞状

努力賞 第二學年

石原すみ子

あなれは本年の成績
が著しく向上しましたか
らその努力にたいし右の
通り賞與します

一九五三年三月二四日

東中学校長金城珍徳

學校へ 學校から家庭へ

學校に於ける學習
態度は良好で、
成績共に優異、
體育、美術、音楽、
生活、社会、自然、
科学、国語、算数、
英語、外国語、
その他、
各科目に於ける
成績は、
概して、
優異、
である。

よく勉強しよーた。
今後もしっかりかん
つばしよー。
努力に勝る
天才あり

元氣旺盛で虎を
作治得て受けるが
がよい。才習中難し
に讀みふける事あり
ます。理・解かに有
てて或横致す傳者
尚ほその努力を要
望致します。

1954年度

東 小 學 校

帮助	助	帮助
平	平	平
宫	宫	宫
慢	慢	慢

部	科	内	上		中		下		上		中		下	
			上	中	上	中	上	中	上	中	上	中	上	中
武	内	剣												
		刀												
		槍												
馬	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外	馬												
		車												
		具												
武	内	馬												
		車												
		具												
武	外</													

項目	一	二	三	計
投資資金	89	98	60	247
出資資金	89	98	60	247
商 股				-
専 股	*	*		*
繰 引	*			*
備 引			6	6
早 引	*			*
実 の 金				
所 見	良 好			良 好

株	身長	115.6	cm
	胸囲	21.2	kg
	脚囲	00.0	cm
	座高	55.2	cm

左 妻 上 右 一 女

第

修了證事

年の課程を終了

東小學校長

当 肉 賀 助

期 日	一		二		三	
	責任印	保護方印	責任印	保護方印	責任印	保護方印
						

久志間切嘉陽村平民

比嘉寶治

管下久志間切早良尋常小學校

新築費 トシテ 金壹圓寄附

候改奇特候事

明治廿一年十一月十三日

中興縣知事 渡邊等九岡堂



証狀

第三學年 宮里優

あなたは當校水泳大会の時

二〇米泳いたことを証します

一九五五年七月九日

東小學校長 當間賀助

賞状

第一学年

下年精勤

宮里優

あなたは出席が
優良ですから右
の通り賞します

一九五四年三月二十日

東小学校長 當間賀助

賞状

第五学年

石原須子子

一九五四年三月二十日生

右は出席優良
に頭書の通り
之を賞します

一九五四年三月二十日

東初等小学校長

修了證

石原すみ子
昭和五年六月二十六日生

右は本校の課程
を修了せしことを
證す

一九五一年三月二十四日

東 初等學校長上江洲智篤

第三三號

編 集 後 記

百周年記念誌の企画から2年の歳月が過ぎ、同窓の皆様には、大変迷惑をかけてしまいました。

資料の収集の為に校区内の各字をローラー作戦であたりましたが、思うように資料の入手が出来ず、今さらながら戦災の大きさに驚かされました。

南米の郷友の方々や本土在住の方々に資料の入手を依頼したり、琉球新報社の資料室に足を運び、ご覧のように少々ながらも一応の資料を集めることができました。

又、百周年の記録として、手記や座談会をお願い申し上げましたが、多くの方々が心良く引き受けて下さいました。紙面で改めて感謝を申し上げます。

更に、百周年を迎えた東小学校の様子、子どもたちの様子を記録として残すよう企画し、進めてまいりました。その事で学校職員、児童生徒の多大なご協力をいただきました。また、若狭印刷の宮城正勝氏には、本誌発刊を際し細部にわたり御尽力頂き、併せて感謝申し上げます。

辛うじて、次の150周年への橋渡しの役が出来たものと思い編集後記といたします。

平成2年8月

東小学校百周年

記念誌 編集部

東村立東小学校創立100周年記念誌

平成2年8月発行

編集 東村立東小学校創立100周年記念誌
事業期成会記念誌編集委員会
発行 東村立東小学校創立100周年記念誌
事業期成会
印刷 若狭印刷
〒900 那覇市若狭1-6-1
☎ (0988) 68-6404
